平成３０年３月国際放送番組審議会

平成３０年３月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４５回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センターで１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のＮＨＫの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「BOSAI: An Educational Journey ～Fukushima edition」、「Fukushima TIME/LAPSE」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（元駐米大使）
副委員長	大西　　洋	（オフィス タイセイヨウ）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	小林　栄三	（伊藤忠商事㈱　会長）
委　　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア 代表）

（主な発言）

＜視聴番組「BOSAI: An Educational Journey ～Fukushima edition」
（ＮＨＫワールドＴＶ　２０１８年　２月２４日（土）　０:３０ほか）
「Fukushima TIME/LAPSE」
（ＮＨＫワールドＴＶ　２０１７年１２月３０日（土）１０:１０ほか）について＞

○　「BOSAI: An Educational Journey ～Fukushima edition」は、まずガンマカメラで渋谷の状況を映し、それから福島に迫っていくなど、様々な工夫がされていると思った。また、リポーターが自ら学んでいくスタイルは視聴者に親近感を与える。だが、このリポーターに大学生や外国人を起用することもあり得たのではないか。

副題に「Fukushima edition」と銘打っているので、ほかの edition（版）も存在すると思うが、原子力発電所の事故を取り上げて防災を語るのは、海外の視聴者にはわかりにくいのではないか。「BOSAI」というならむしろ津波や地震のほうが分かりやすいのではないか。おそらく、そういうeditionもあるのだろうが。

「Fukushima TIME/LAPSE」は、女性のナレーターの声に非常に味があってよかった。３つのエピソードが描かれていて、一番感銘を受けたのは、富岡町から避難

しなかった松村直登さんの話だ。最初はタイムラプスの活動を批判的に見ていて、「絵がきれいだからといっても、もとに住んでいた住民が戻ってくるわけじゃない、そんなの、意味がない」と強く言っている。ところが画像を見ていくと、人は帰らないが、自然が帰ってくる、植物が生き生きと戻ってくる、カニや小鳥とか、そういうものが戻ってくる、ということが理解できるようによく描かれていた。

「絵がきれいだからといっても、もとの住民が帰ることはない」と言った時のカメラマンの清水大輔さんの悔しそうな表情が画面にとてもよく表れているが、その彼の表情が、自然を写していくうちにだんだん変わってくる。それを捉えるＮＨＫのカメラマンの映し方がとても上手だと思った。

○　「BOSAI」は、データを使って福島の除染を非常に分かりやすく説明していて説得力があった。

第一次産業に従事する人々が風評被害に遭いながらも頑張っている姿を目にして頭が下がった。我々に対していろいろなことを思い起こさせようとしていると受け止めた。

だが、番組内容は防災よりも震災復興の最新状況を提示しているものだった。「防災」をうたうのであれば、今後の大地震などに備えて、東日本大震災の何が教訓になるのかを語ってもよかったのではないか。

また復興に対して海外からどのような支援をしてもらったかなど、もう少し幅広い視点があるとよかった。

一方、「Fukushima TIME/LAPSE」はすごい。このような映像表現ができることは、おおよそイメージできていたが、通常の動画よりも迫力があって印象的だった。自然の美しさを捉えた画像は、日本のすばらしいＰＲになる気がした。

だが、せっかく福島に焦点を当てるのであれば、例えば福島があの震災でどのように被災し、政府として、あるいは国民も含めた日本全体として、具体的にどのように支援をし、復興に向けて何をしているのかを、もう少し幅広く、海外の人に訴えられたらよかった。

○　「BOSAI」は、被災地の食物が安全であることが非常に説得力のある形で示されていてよかった。だが同時に、安全な点だけしか主張されていないと感じた。本当に安全一色だと受け止められる描き方でいいのかと少し不安にもなった。「こういう問題もあるがこの点では安全だ」といった描き方をすると、さらに説得力が高まったのではないか。

「Fukushima TIME/LAPSE」は、とにかくきれいだった。番組をぼんやりと見始めたのだが、あまりにきれいだったので、巻き戻して最初からもう一度見たくらいだ。撮影したカメラマンの清水さんが、撮影相手の人たちに寄り添う姿が非常に印象的だった。被災された人自身が涙していないのに、カメラマンのほうが泣いてしまうところも、彼の人柄を表していてとてもいいと思った。

子どもたちが「あまり覚えてない」景色を、撮影された映像で改めて見て、「こんなにきれいだったんだ」と素直に感動していた。自分たちの故郷への誇りを回復する力があの映像にはあったと思う。この番組はとても好きな番組だ。

○　１本目の番組で「BOSAI」という言葉をそのまま英語で出していく意味は何なのか、この言葉を海外にこれから浸透させたいのか、あるいはすでに浸透しているから使っているのか、と疑問に思いながら見た。「MOTTAINAI」などと同じく、海外に伝える価値がある日本語として発信したいのか。

番組の内容は大変、生真面目で誠実だと受け止めた。

リポーターが「大丈夫、大丈夫、大丈夫」と表現を積み重ねていたが、逆に「本当か」と疑念が生まれた。客観性のあるもう一方の現実をなんらかの形で見せるべきだ。

例えば、ネット上には、さまざまな憶測や誤った情報が氾濫している。そういった風評の実態をリサーチしてから番組化するのが大変重要だと思った。

魚を釣っている場面が妙にはしゃいで見えて、かえって痛々しく感じた。「気にしてないですよ、大丈夫、来てみたら意外と大丈夫ですよ」と、この場面でも人を安心させようとする表現の積み重ねがかえって不安を感じさせた。

「Fukushima TIME/LAPSE」は人々の身の上話を積み重ねて感傷的に現場に寄り添ってはいるが、海外の方がこうした身の上話を聞いて、「So, What？（だからどうしたというのだ）」と感じてしまうのではないか。

撮影手法は非常に興味深く見たし、ナレーションも美しかった。大きい画面で見たいと感じさせるほど美しい映像だったが、この身の上話を積み重ねながら、私たちはこの福島の現実にどう向き合って、それをどう世界に伝えたいのか、もう一度考えざるを得ない番組だった。中長期的にはこの内容自体は非常に意味があると思っていて、１０年、２０年と現場を定点観測しながら映像に残していく意味はＮＨＫとして大変あると思うので、続けてほしい。

○　どちらも非常に優れた番組だと思った。NHKの国際放送は、こんなに優れた作品を作れることを誇ってよいと思った。

「BOSAI（防災）」は、最初「BONSAI（盆栽）」だと勘違いした。「BONSAI」は世界でも有名なので、「BOSAI」という言葉も同じように新しく海外の辞書に入れようと意図したのか。

「An Educational Journey」はとてもいい副題だと思った。

非常によくできた構成で、ナレーターの英語もきれいだった。風評被害に対して、「実はこうなんだ」と事実をきちんと示し、日本政府が自分たちの首を絞めるような世界的にも非常に低い基準値を課して、それをクリアしていることが、「学びの旅」の中で提示されていた。それは非常に重要だと思う。

ただし、「福島はこんなに回復したんだ」という復興のリポートと「防災」という概念との結びつきが問題になると思った。原発問題は政治的にならざるを得ず、再稼働問題と絡んでくる。つまり、この番組を「こういうことがあっても、こうやって回復できるのだから、再稼働していきましょう」と言っていると受け取る視聴者もいるだろう。

もちろん風評被害はあってはならない。それに対して「事実はこうだ」ときちんと伝える中で、原発事故からわれわれは何を学ばなければならないか。その点がもう少し描かれていたら、誤解を招くことのない、より教育的な「学びの旅」になったのかもしれない。

「Fukushima TIME/LAPSE」は美しいだけではなく、そこに膨大な時間、福島に対する愛と敬意、そこに生きている人たちへの尊敬の念が込められている。

○　少し辛口になるが「BOSAI」のほうは「防災」を描いていないと思った。あのようなひどい事故が起こり、私たちがどのように対処したかは伝わったが、では、それを防ぐための手立てを私たちがそこから学んだかというと、学んではいないと思う。だから、これは防災番組ではないと思った。

原発をやめてしまう極端な考え方もある。実際にそう決断をした国もある。だから、日本はそこまで踏み込めるのか、踏み込めないのかの議論も盛り込まれていれば、もっと防災番組らしくなっただろう。

放射能はどうカバーするのかが重要だ。汚染された枯れ葉を拾い上げて袋に詰めて、その辺りに置いた、では意味がない。その袋が放射線を通すか通さないかが問題なのに、その議論がなかった。

現地で大木を切り、その樹皮を取り除けば中の幹は問題なく使えるといって、それで家を建てるのはいいと思うが、その地の樹木が汚染されていたのであれば、その周りの小さな草も枯れ葉も汚染されているのに、番組はそこには何も触れていなかった。そこが疑問に思った。

「Fukushima TIME/LAPSE」は、番組の中心にカメラマンを据えて彼の目から見た福島、あるいは退去もせずに暮らし続けている人たちに出会って番組を制作した点が、福島を扱ったこれまでの番組と異なり、斬新だと思った。

画像は本当にきれいだったが、通常のビデオ撮影をした映像と、タイムラプスで撮ってそれをつなぎ合わせて作った映像とが、美しさの点でどうしてあれほど違うのかが分からなかった。一度コンピューターを通しているからなのか。

ビデオも複数のコマで構成されているが、ビデオで撮ったものからコマを除いていく手法と、あのタイムラプスは違うのか。

○　１本目の「BOSAI」と２本目の「Fukushima TIME/LAPSE」はどちらもいい番組だった。１本目は事実を視覚化していき、２本目は見えているものを時間軸など違う角度から表現している。

１本目は、「防災」というテーマと番組の内容が結び付かないところがあったと思う。

「安全だ、安全だ」と言わんがための番組で、例えば小さい子どもが食べにくそうに魚を食べている風景などを見ていると、違和感を覚えてしまった。

２本目は、映像がとても美しい。作品としてもすばらしかった。コマ撮りの連続撮影の技術で、あのようにきれいになるのか。ただ、このカメラマンの成長ストーリーが強すぎる気はした。

○　福島のことを扱った２つの番組を、違う視点で見られたのは非常におもしろかった。

「BOSAI」というタイトルは本当にこれでよかったのかと、ずっと気になってしまった。これまでも何度か言ってきたが、タイトルの付け方はとても重要だ。これを「防災」番組だと思って見たので、最後までずっとふに落ちないところがあり、自分が獲得したかったものが獲得できないまま番組が終ってしまった。歯がゆさみたいな

ものが残った。

「Fukushima TIME/LAPSE」は、クリエイティブな力で震災に対処することをテーマにしていると思う。映像の力でこういう問題に対する働きかけを行う視点は非常におもしろいと思った。福島の問題を様々な切り口で作っていくと、今後も視野が広がって非常にいいと思った。

○　両番組とも大変いい作品だと思った。カメラワークもよく、ナレーションも上手だった。

ただ、「BOSAI」は、とにかく「安全になりました」とメッセージを発信するための番組で、もう少し、深く掘り下げた報道があってもよかったのではないか。番組の中でも紹介されていたが、放射性物質の基準値が、ＥＵが 1,200 ベクレル、アメリカが 1,000 ベクレルである一方、日本は 500 ベクレルだった。日本だけが極端に低い基準値だったものを、あの震災後に厚生労働省は 100 ベクレルまで落とした。そのためにどれだけの漁業者と農業者が泣かされたことか。

放射性物質の値を測る機器を買う経済力がない漁協も、みんなでお金を工面して買う。それで少しずつ数値が下がってきて、ようやく魚が売れる。

それを乗り越えてきた人たち、当然そこには日本社会の矛盾点も出てくる。そういう点を描くくらいの勇気ある番組にしたら、さらにおもしろくなったのではないか。

「Fukushima TIME/LAPSE」は、誠にきれいな映像だったが、少し長すぎると思った。もう少し短くしたら迫力が増したと思う。

○　「BOSAI」は、データをかなり出していたが、水平比較、つまり「ほかの地域と比べてこうだ」と提示するものだった。あわせて垂直比較、つまり時系列的に「前はこうだったのが、数値がこう減ってきている」と提示できれば、もう少し説得力があったのではないか。

「Fukushima TIME/LAPSE」の映像は非常に美しい。カメラマンの清水さんがやっていたことは、全く新しい手法なのか、あるいはこの手法を取る人はほかにもいるが彼は部品やお金がなくて、あのように独自の工夫をしたのか。

ほかの委員からはナレーションがいいと評価する意見があったが、一般論として、国際放送番組はあまり英国アクセントにし過ぎないほうがいいと思う。アメリカンであり過ぎてもいけない。インターナショナルな英語というものがあるのかどうかよく分からないが、「あ、イギリス人だな」と感じさせないほうがいいと思っている。

（ＮＨＫ側）　まず「防災」を「BOSAI」とアルファベット表記してタイトルにしたのは、「BOSAI」が、今「TSUNAMI」に次ぐ国際語になりそうな勢いだと聞いたからだ。去年１１月に仙台で「WORLD BOSAI FORUM」が開かれ、今後も２年に一度、仙台で国際会議が開かれる。だからこの際、「BOSAI」というタイトルを打ち出したほうがよいと考えた。

この番組の目的は「人々の命と健康を守る」こと。そのため東日本大震災の教訓を世界に伝いたいと考えた。あの震災では津波による被害が大変大きかったが、原子力災害も欠かすことのできない大きな出来事だったの

で、今回のシリーズに加えたというのが正直なところだ。世界にない津波と原発災害の経験から人々の命と健康を守るために日本が学んだことを、世界に役立てられる番組が作れないかと考えて始まったので、こういう形になった。

この原発災害の教訓を広く世界に伝えていく時に、福島のことを漠然としか分かっていない、あるいは知識があいまいな人が圧倒的多数ではないかと考えた。例えば「福島に今、足を踏み入れることができるのか」「水道水は飲めるのか」と疑問を持つ人たちのほうが多いのではないかと思い、短い時間でも全体像を分かりやすく伝えられないかと考えた。

そういう中で、委員の皆さんから指摘された点について答えると、結果的に「安全」を伝える内容ばかり重なっていたという指摘は、その通りかもしれない。心配する人の声を取り上げたり、水平展開だけでなく垂直展開したりすれば、もっと説得力があったと思う。今後の番組作りに役立てていきたい。

制作者側の思いとしては、防災番組として教訓を１つでも２つでも伝えたかった。できるだけ余計なことを言わず事実をたんたんと伝えたつもりだが、番組のメッセージとしては、たとえば、東京電力の担当者自身が「一定の基準を満たしていれば、それで安全と考えていたのが今回の最大の反省点。基準を満たせばそれで安全だとする考え方自体が、世界最悪の事故の最大の原因」と語っていたこと。当事者自身がそう考えていることは大きなメッセージだと思っている。

もちろん、この番組だけですべての事実が伝えられるとは思っていない。そこは、「自らの目で事実を確かめ、知るということが大切」というもう一つのメッセージに込めた。

福島の原発構内を今キャスターが平服で歩くことができるとか、福島県内の大部分の地域の放射線レベルは実は世界と変わらないこと、日本の食品の安全基準は世界よりも厳しく設定されていること。これらは、いずれも事実だ。しかし、知らない人が圧倒的多数ではないかと思う。そして、その部分を強調したのは否めない。

一方で、メルトダウンした燃料がそのままになっていることや、タンク内の汚染水が 100 万トンをすでに超えてしまっていること、飯館村役場の放射線量が 0.27μSv/h（マイクロシーベルト／時間）で、除染をかなり行っても世界に比べるとまだ高いと言わざるを得ないこと、中間貯蔵施設に運ばれた放射性物質は３０年以内に福島から運び出すことになっていることなど、さまざまな課題を番組内に埋め込んだつもりだ。だが、今回の番組では、それらを深めていない。それ以上言及していない。そのため指摘されたような印象を与えてしまったのだと思う。今後に生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）　「Fukushima TIME/LAPSE」のディレクターは、ずっと美術関係のドキュメンタリー番組に携わってきた。震災をきっかけに、人が震災など

に直面した時、美術や芸術がどういう力を持てるのかをテーマに、特集番組を作ってきた。

カメラマンの成長ストーリーが強すぎるのではないかと指摘があったが、今回、そのバランスをどう取るかについては、ディレクターとプロデューサーと私、それからこの番組は、冬のエピソードを付け加えて３月１１日にＢＳ１で放送したが、そのＢＳ１の担当のプロデューサーを含めた４人でずっと議論をして、今回はあのバランスとなった。ほかのやり方もあったのかもしれない。頂いた意見を持ち帰り、今後に生かしたい。

また、こういう身の上話の積み重ね、感傷的な話を伝えることで、海外の人に何を伝えたいのかと指摘があったが、その点も長時間議論した。うまく伝わらなかったかもしれないが、まさにこういう芸術家がどのように社会にものを還元していくのかをテーマに、見てもらえたらいいと考えた。

この番組に対して海外の視聴者から、「自分は災害の当事者ではないが、こういう厳しい状況に直面した人に、こういう形で芸術が喜びを与えていくことが分かった」という声が寄せられた。その点を伝えることができたとうれしく思っている。

ビデオのコマ落としと何が違うのかという技術的な質問もあった。一般的なテレビのビデオカメラは１秒間に３０コマ撮影できる。そのコマを間引いていった映像と、この番組のカメラマンのようにスーパーハイビジョンで撮った写真を１枚ずつ重ねていくのとでは、解像度が違うと思う。２０万コマくらい撮れるハイスピードカメラを持っていったら、もしかしたらタイムラプスでは勝てないような映像も作れるかもしれないが、彼が一人の作家としてやれることが、あの形だった。

タイムラプスの映像は珍しくはないが、多くはカメラを据え置いて撮るスタイルだ。一方、彼はカメラを動かしながら撮る手法を多用するが、それは「ハイパータイムラプス」と呼ぶそうだ。レールなど彼が使う機材は自作であり、どんな対象をどう撮るかを考え、常に新しい手法を模索しているそうだ。

（ＮＨＫ側）　NHKワールド JAPANでは、「BOSAI」を世界に発信していこうと考えている。日本は世界でも自然災害が多い国だ。災害によって亡くなる方、被害を受ける方、家をなくす方が多い日本の公共放送ＮＨＫとして、そういう被害を少なくするために取り組むことは、非常に重要であり、また長年積み重ねてきたノウハウもある。

今回の番組以外にも「BOSAI」という言葉を用いて、災害にあった時に対応するノウハウについて解説する番組も放送している。

○　それならばなお、今回の番組は最後まで、どこで防災について触れていたのかと思ってしまう。だがレジリエンス（復元力）を高めることが災害の被害を小さくすることを意味するのであれば、これはレジリエンスについての番組だったと思う。防災の中にさまざまなものがある中の１つにレジリエンスがあることが、どこかで理解でき

るような構成なら、「BOSAI」という言葉についての違和感を持つことなく、最後まで見ることができたのではないかと思う。

平成３０年２月国際放送番組審議会

平成３０年２月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４４回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センターで９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS－ N. KOREAN ABDUCTIONS：A Global Concern」、「Unfading Memories」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（元駐米大使）
副委員長	大西　　洋	（オフィス タイセイヨウ）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	鎌田由美子	（カルビー㈱ 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア代表）

（主な発言）

＜視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS
－ N. KOREAN ABDUCTIONS： A Global Concern」
（NHKワールドＴＶ　２０１７年１２月２９日（金）9:３０ほか）について＞

○　副題にある「A Global Concern」がこの番組にとって重要な意味を持っていると思った。これをGlobal Concern“全地球的規模の問題”として視聴者に身近に感じてもらうにはどうしたらよいかが難しい点だ。世界に似たようなケースはあるのか。あるいは人身売買の問題と関連づけて、海外の人に理解を深めてもらうようにするのか。タイやルーマニア、フランス、イタリア、オランダでも、北朝鮮に拉致された被害者がいるとのことだが、その場合、拉致された家族の対応は日本と同じなのか。あるいはそんなに大きな運動にはなっていないのか。そのあたりが番組で紹介されたら全地球的規模の問題として捉えてもらえたのではないか。全体的にとても良くできていて感銘を受けたが、北朝鮮の人がこの番組を見ることは想定したのか。もしそうならば、北朝鮮の人がどう反応することを期待したのか。

○　番組をＶＴＲとスタジオの２つで構成した理由を聞きたい。どういう客観性をもってこの構成にするべきだと考えたのかが今ひとつわからなかった。

私は日本人なので目頭が熱くなる部分もあったが、感情に訴えておもんぱかってくれという手法は、外国の人にどう受け止められるのか。そういう視点で見ると、この番組は少し情緒的だ。この人権問題に関して、国際社会に日本の政府として、あるいは番組制作者として何を訴えたいのかよくわからなかったが、番組自体には非常に共感をおぼえた。

○　このようなテーマを取り上げた番組制作はいいことだと思う。

国際的な人権問題という大きなテーマの中で、最初にトランプ大統領が出て来たのは、いろいろ見方はあるとは思うが、影響力のある国のトップが出てきた点でとてもよかった。

拉致そのものは日本だけではなく、ほかの国の方も同じような体験をされているので、その中で、少し情緒的というか、例えば横田めぐみさんのご両親がたくさん出てくるが、少しずつ年齢を重ねていく。もしそのことを示したいのであれば、話は別だが。

めぐみさんの遺骨のくだりで、あのとき日朝間は相当もめて日本側からは科学的な分析結果が提示されたはずで、その説明があればもっと説得力があったと感じた。

文書の文言に光を当てて見せる演出は外国の方が本当に理解できるのか。国連の資料などの重要ポイントに照明を当てて浮き立たせた演出は、少しわかりにくいように感じた。

○　小さいことだが、スタジオの解説記者の発言にネイティブスピーカーの声をかぶせていた。あれは大変いい手法だと思った。あのような方法であれば、いろいろな番組を作るのが容易になるのではないかと思った。

副題にある「Global　Concern」については、あまり言うとかえって押しつけがましくなる。これはこんなに大事な問題なんだ、国際社会はもっともっとConcern（関心）を示せと言うようなものだ。客観的に、４０年前に日本人１７人が拉致されて、１２人がまだ帰って来ないが、またアメリカが北朝鮮と今交渉しているのは5,300人の行方不明者、いわゆるＭＩＡ（戦闘中行方不明兵士）の問題だ。ほとんどは死んでいるかもしれないが、朝鮮戦争のときに２０歳だった若者は今８４歳で、まだ生存しているかもしれない大問題だ。また韓国は帰って来ないＰＯＷ（戦争捕虜）が500人以上いて、さらに朝鮮戦争後に拉致された人間が500人を超えるという。

トランプ大統領が言及しているのは、もちろん日米関係への考慮もあるが、アメリカとして対北朝鮮政策上の思惑があるからだ。だからこれを「Global　Concern」だと言うには北朝鮮全体の非人間性や拉致についてもう少し伝えるべきだ。

在日朝鮮人の帰還事業でも、6,800人だったか、日本人がだまされて向こうへ行って、その後、塗炭の苦しみを味わっている。拉致や、だまされて連行されていった者、あるいはＰＯＷも含め、これだけの問題があり、日本は非常に深刻で非人道的な問題を抱えていると全体状況を示して初めてこれが「Global　Concern」だと説得力が出るのではないか。

○　非常に難しい問題なのでどういうふうにしてこの問題を提示するのかは悩ましいと

思う。

視聴番組に関する事前配付資料にも「日本政府は、国際社会とともにどのように解決を図ろうとしているのか」という言葉があるとおり、日本だけではなく海外の方の拉致問題があることは番組の中でも触れられているが、もう少し具体的に、どのような状況があったのかが示されていれば、タイトルにある「Global Concern」にかかわる形で示すことができたのではないか。その点が重要だ。

○　この番組が誰に向けて作られたのかを尋ねたい。日本人で、拉致について断片的に知ってはいても全体のストーリーを把握していない人がこれを見ると、全体の流れがとてもよくまとまっている。また個人の問題から国としての動きになって世界が一緒に巻き込まれていき、そこにメディアも大きな役割を果たしてきたという、とてもわかりやすい番組になっていると思った。その一方で、他国の状況はどうだったのか。他国は北朝鮮問題をどう捉えているのかが、わからなかった。

当時、金正日総書記が拉致問題について、日本語や日本の慣習を学ぶために日本人を拉致したと認めて謝罪したと説明されていたが、実際は、総書記自身は知らないところで、関係機関が拉致したことを謝っただけではなかったか。

○　拉致問題は大きな問題なのに何十年と解決されない。テレビでは時々見るので日本人が忘れることはないが、なぜここまで解決できないのかとじれったさがずっとしこりのように残っている。その解決策が視聴者に向けてもう少し示せたらよかったのではないか。この大問題について番組は情緒的に訴える力はあったので心には残ったが、解決に向けて将来的にはどんなことが考えられているのかがさらに情報としてあれば、今までとは違った番組になったのではないか。

○　日本にとってはもちろんとても重大な問題だが、海外の方が見たときに、いかにそれを自分に引き寄せて考えられるか、いかにシリアスな問題なのかを、もう少し視覚的に力のある手法で提示できたらいいと思った。拉致する瞬間の映像などはもちろんないのだが、ことの重大さをどう視覚化していくかを考えながら見た。例えば、この事前配付資料には番組に出てくる場面を紹介する写真が３枚載っているが、この番組を１枚の画像で表すならどんな画像になるのか。この問題をどう端的に視覚化していくかという視点で考えると、よりインパクトをもって伝えられるのではないかと思った。

例えば、私たち日本人はずっと拉致問題の経過を見ているので、横田さん夫妻がずいぶんお年を召してしまったなと思うが、夫妻の姿を過去から現在までひとつなぎにして「こんなに時がたってしまった」と見せる手法もあったのではないか。

（ＮＨＫ側）　番組は、「ＮＨＫ国際番組基準」にそって制作している。海外の番組モニターからの報告や視聴者からのメールを見る限り、一定の成果はあったと考えている。情報の取捨選択については、限られた放送時間の中で、日本について予備知識のない海外視聴者の理解をどう助けるかという観点から総合的に判断した。

北朝鮮在住の人たちが視聴することを想定しているかについては、直接受信をすれば見られないわけではないが、北朝鮮では放送していないので、視聴を想定しているわけではない。誰に向けて放送しているのかと言えば、ＮＨＫワールドＴＶが視聴可能なおよそ 160 の国と地域を前提としている。

モニター報告を読むと、拉致問題を知っている人は極めて少数であったので、知らない人たちに知ってもらい、理解を深めてもらうことはできたのではないか。ただし、番組モニター制度は大規模な世論調査ではないので、必ずしも全体の傾向を反映しているとはいえない。

オープニングに、工作船や羅針盤のＣＧなど、抑制しながらも、ある程度、実際にあったことを印象付けるための工夫をした。

スタジオとＶＴＲの構成については、海外の視聴者に最も理解していただける方法として、資料映像が残っているものについてはＶＴＲで見てもらい、現状についての補足や今後の展開についてはスタジオでの解説という形で構成した

たくさん頂いた意見を念頭にこれからも制作を進めていきたい。

（ＮＨＫ側）　ふだんは地上波の「ＮＨＫニュース７」「ニュースウオッチ９」など国内放送を担当している。今回、初めて海外に向けて発信する役割を担ったのだが、スタジオで解説するときに、海外の方に向けて国際放送の伝わるエリアの広さの中で、どういうところにポイントを絞って話をしていけばいいのか、正直、いろいろ悩みながらやった部分があり、また、最初に作っていたものから国際放送で出すまでの過程で、だいぶ差し替わった部分もある。

海外の拉致被害者の状況はどうなのかという質問があったが、そこは今回、ほとんど触れることができなかった。それについても蓄積してきたものがあるので、今後の放送につなげていくことができればと思う。

（ＮＨＫ側）　この番組自体は北朝鮮で見られるのかと質問があったが、テレビは難しいが、ラジオには短波放送があり、朝鮮語での放送も行っているので、この番組ではないが、折に触れていろいろと発信している。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫワールドのラジオ放送には、「コリアンサービス」と言って、韓国だけにとどまらず、北朝鮮でも聴いているかもしれない、あるいは中国の朝鮮族自治州でも聴いているかもしれないなど考えながら、日々、日本の情報を朝鮮語で伝えている。

拉致問題については、バイオリニストの五嶋龍さんが大変心を痛め、大学生のオーケストラと一緒に拉致問題を広く知らせるための演奏会を行うことになり、去年１０月にそれをラジオ番組として１７言語で放送した。

ＮＨＫワールドの「ラジオ日本」は、英語以外の言語でも拉致の問題などを広く投げかけていくことが可能になる重要なツールではないかと思っている。今後も１７の言語で出せる強みを使いながら発信していきたい。

○　日本語や日本の慣習を学ぶために拉致したとか、あるいは北朝鮮の国家機密を知ってしまったから被害者を返せないと専門家が番組の中で説明していたが、本当だろうか。北朝鮮の国家機密を知ってしまったといっても、帰って来た人は何人もいる。そうすると、実は、非常に短絡的なリーダーが思いつきで何かを言い出すとそれに誰も反対できない国の体質があるために、様々な非論理的なことが行われてきてしまっているのではないか。一部のリーダーが思い込んでやってしまって取り返しがつかなくなっていて、困ったと思っている部分が実はあるのではないか。はっきりそうとは言えないにしても、その辺りをニュアンスとしてでよいので出した方がいいと思う。

○　ラジオで幅広く放送しているとのことだったが、拉致問題に対する感情は日本人ならばよくわかるが、ほかの国、日々殺人が起こっているような国の人から見ると、どこまで共感できるのか、腹に落ちる内容なのかなとは感じた。

○　国内放送用に取材してきた映像を中心に編集して、海外向けの番組を作ったとのことだが、国内向けに取材したものを海外に出す時に、どの程度、新しい部分を加えるべきなのかが難しい部分ではないかと思った。記者のインタビューなどはおそらく新しい部分だろう。日本と国際社会との認識の差をどう埋めていけば、国内向けの映像が国際的に説得力のあるものになるか。この辺りを意識して作るといいと思う。

○　私も海外の人と拉致問題について議論したことがあるが、「日本の政府は二国間でなぜもっときちんと対応できないのか、国際社会のコンセンサスを取って具体的に何をしたいのか」というところに行きつく。この問題を情にだけ訴えていくと、最悪の場合、「解決できない日本は何なんだ」と日本の側に批判の矢が飛んできかねない。政府の対応、国際社会への訴え方のあり方に行きつく問題だ。

　トランプ大統領の発言を引用したり、脱北者の証言を加えて事実を積み重ねたりして客観性はあるが、全体的にやはり情感に訴えている。海外の人から見ると、なぜ二国間で解決できないのか、解決できないならアメリカ以外の国と手を携えて何を今どこまでやっているのか、というところがもう少し論理的にドライに伝わらないと、国際社会の共感を得るのはなかなか難しいのではないか。

＜視聴番組「Unfading　Memories」
（NHKワールドＴＶ　２０１８年1月２１日（日）8:１０ほか）について＞

○　まずはとてもすばらしい番組だと思った。この番組の３つの物語はどれも心を打ち、伝えるべきことを伝えていた。

　これは日本人にとって過不足のない形で番組が出来上がっていると思うが、あえて批判的なことを言うと、これが海外の方にどう受けとめられるか少し不安に思った。

　われわれは東日本大震災の映像、津波の映像を繰り返し見ているので、この番組の中にもあった津波の映像を少し見ればさまざまな思い出がよみがえってくるが、海外の方がどこまで、そうした津波のことを知っているのか。被災者の今を伝えるために

家族からの写真とメッセージを募集して作ったというその企画の精神はよくわかるのだが、海外の人たちには「今」を伝えるために、かつて起こったことがこれほどまでに恐ろしいことだったと丁寧に伝えないとわからない部分もあったのではないか。

もう１点は、被災者の方々の「こころ」が重要なのだから、語られた言葉の英訳字幕がもう少し丁寧に作られていたらよかったのではないか。例えば「くやしい」と言った時に「regret and sorrow」と字幕があったと思う。だが「くやしい」は「regret」よりは、「vexing」や「frustrating」が良い。また、「いじらしい」も「frail and beautiful」とあったが、あれで伝わるのかと少し不安に思った。

○　非常に感銘を受けた。一つ一つのストーリーが映画化してもいいほど深いメッセージを持っていたと思う。

番組の中で、震災から６年という年月の意味を伝えるケースをよく発見できたと思う。それまで自分を苦しめてきたメモリーが、この６年の間に新たな出会い、新たな発見があった末に今度は自分を生かすメモリーになっていく。そういう前と後の変貌がとてもよく描かれていた。そしてそれには６年も必要であった。これはほかの国にも伝わることだと思った。回復するには時間がかかる。早急な解決策に頼っても仕方ない。だから長い時間をかけても新たな出会いがあれば、つらい記憶を自分を生かす記憶に変えられる。そういう非常に強いメッセージがあった番組だ。批判するところは何もない。

○　心の回復に光を当てて、被災地の３つのエピソードで、それぞれの主人公たちがどう心のリハビリテーションをしていったのかが、大変よくわかった。

個人的には拉致問題の番組同様に共感するところがたくさんあったが、外国の方々が自分たちも自然災害があったりさまざまな理不尽な状況の中で命を落としたりする中で、情緒的な情報から客観的に何をどのように得られるのか。これは日本国内向けに作られた番組を再構築したものだからそういう情緒的な手法を取ったのかもしれないが、例えば医師からの情報や、心を回復するための手法が海外ではどうなのか。あるいはほかの災害の場で、子どもは自分たちの心をどう復元していくのか。各エピソードの主人公たちは自分たちで心の回復の装置を編み出していったのか、あるいは何か普遍的に全世界でも使える方法で行っているのか。そこが見えてきたら、さらにすてきな番組になっただろう。

番組モニターをどのようにとっているのか。日本にいる留学生ではなく、海外の、親日派でない方々にこれを見てもらって、どう感じるかを調査しているのか。もともと日本に思い入れのある方には見てもらえると思うが、思い入れのない方々へＮＨＫワールドをどう広げていくのかが気になった。

○　非常にいい番組だったと思う。それぞれの被災者が三者三様に表現されていたのがとてもよかった。ただ、被災地の「今」という点では復興は本当にまだまだだ。例えば仮設住宅にいる方なども次回、取り上げていけばいいのではないか。

また、スタジオのキャスターの服装に違和感があった。

○　この番組を誰に見てもらいたかったのかを考えながら見た。被災者が見たら心温まるし、ああいうことがあったが明日からがんばろうと、とても元気をもらえるいい番組だと思うし、構成もとてもよかった。

　ただ、当時者ではない人たちがこれを見たときに、感情的なところは伝わってくるが、「それほど響く番組なのか」と思ってしまった。震災のときのあのにおいだけはどうしても映像では伝わらない。本当に空気を吸い込んだら吐き気をもよおすような、津波の後のあのにおいとか、パチンコ店の長蛇の列、そういうものはほとんどの番組は映さないが、いろいろな現実があり、人々が変わっていく。そこのところが自分の中ではフラッシュバックしてきた。

○　われわれ日本人にとってはもちろん震災のことはずっと思い返していかなくてはならない。ただ、これを海外の人が見たらどう思うのか。先ほど英語字幕の話があったが、あのタイミングで、ああいう言葉を口にするのは、われわれにとっては心のひだにとても響くと思うが、海外の人にはなかなかそこまで伝わらないのではないか。これを見た海外の人に、本当に何を受け取ってもらいたいのかがもう少しクリアだとよかった。

○　この番組は、心に訴えるものがあった。涙なくしては見ることができず、本当によい番組だった。

　ただ、こんな悲しいことが二度と起こらないようにするための解決策は何かを考えた時に、例えば、原子力発電をやめてしまえばよいと思う。ドイツは原発を全部止めて、それは賢いやり方だとは思うが、５０メートルの津波を防ぐことはできない。そこに住まなければいいという意見もあるかもしれないが、番組の最後に出てくる方は、帰郷してそこに住もうとする。また地震は起こるかもしれないからやめておいたらどうですかと言いたいくらいなのだが、奥さんとの生活の思い出があるがために、そこへ帰って行くのだという人間臭さみたいなものが出ていて、考えさせられた。

○　ストーリーはすばらしかった。死者と行方不明者を合わせると２万人以上いて、気の毒な話も多い。海外の人たちに、これほどかわいそうな人たちがいると示して、しかし立派に立ち直っていっていると感動的な物語になっている。そのこと自体に異議を唱えるつもりは全くない。

　だが、拉致の問題もそうだが、これほど気の毒なのだというところまでは、プロであればそれぞれ工夫を凝らした番組を作れると思う。だがそれならばこそ、これからどうするのかと思う。世界の人々にとっては、かわいそうな話だと言うこと以外にテーマがあると思う。なぜ町によって復興のペースが違うのか。行政の能力の差もあるが、町役場の人が半分亡くなったところもある。それから町の復興の基本方針について、行政の中で意見が分かれている場合もある。例えば堤防の高さについて意見がまとまらないなど。

　南三陸町では、町の機能を全部高台に移転しようとしている。陸前高田市はまだ荒れ野が続いているが、女川町はとても速いスピードで復興している。そのような町の復興と、災害から立ち直る姿は全世界の人々の関心事だと思う。

あの震災は世界最大級の災害で、これをどのようにして立て直していくのかに皆が関心を寄せている。ＮＨＫの国際放送で、このようなかわいそうな話以外の東日本大震災に対する番組に、どういうものがあったかは知らないが、いろいろな国の人たちと話をしていると、彼らは個々の悲劇以上に、自分たちが災害に遭った場合にどうなのかと考える。例えば津波をどうやって止めるのか。当時は大金を投じて最新式の装置を設置しようとしたこともあり、一時、かなりの人たちが関心を示したが、あの計画はどうしてつぶれてしまったのか。自分たちの身に引き寄せて考える問題点、課題、エピソードを将来ぜひ取り上げてほしい。

○　まず「いじらしい」などの英訳は、もう少し工夫ができたのではないかと感じたのが一つ。

二つ目は、これは若干陳腐な作りになってしまうが、津波が押し寄せたシーンと、今の平和なシーンとを並べて、だがまだ心の闇がかなり残っていると提示したうえで、３人の方の話に入って行くといいのではないかと感じた。

三つ目は、これからの番組で、世界中が助けてくれたことに対する日本の感謝を表明しながら、国際放送の番組を作っていただくとありがたい。

（ＮＨＫ側）　字幕の翻訳については確かにもう少し練り込めばよかったと思う。毎回、英訳する時にはネイティブスピーカーも交えて意見を聞いているが、少し至らなかったかもしれない。反省を次に生かしたいと思う。

海外の番組モニターについては、公募を行い、国際放送局から要請するモニター制度があり、この番組についても３５件ほどモニターからの回答があった。モニターは親日的であったり、親ＮＨＫであったりはするが、その方々の付けた点数も高く、非常に好意的な意見が多かった。災害の悲惨な状況から少しずつ立ち直っていく様子が個人の問題ではあるがよくわかった、状況がそれぞれ異なる３人を探して番組にしたところは非常に感銘を受けた、という好意的な意見も多かった。

番組モニター以外の人たちからホームページを介して意見を送ってもらう方法もある。この番組に寄せられた意見はどれも好意的なものだった。

スタジオのキャスターの衣装についても、翻訳の問題と一緒で、もう少し配慮して選んだほうがよかったと感じた。

（ＮＨＫ側）　この「こころフォト」は報道局のプロジェクトで、震災後２年目から進めてきた。今回英語版にしたのはそのうちの９本目で、３月１０日に総合テレビで１０本目を放送する予定だ。

海外の人に見てもらうためにどう伝えるべきかといった指摘は、非常に貴重な助言を頂いたと思っている。

当時外国でこの日本の震災を見た方が、どれぐらいの情報を得て、どれぐらいの衝撃を受け、そして、今、どの程度のことを伝えていけば当時を思い出してもらえるかについて、海外にいる知り合い、取材先、今回英語放送を作ったチームとも議論して作った。最大公約数的な知識をどこに定

めるかを悩んだ末、冒頭にあのような映像を使い、何人が亡くなってどういった思いを抱えているのかを提示した。

次回以降、英語版を作る際には、今回の番組を見た方々が、次に何を知りたいと考えるかも踏まえていきたい。

（ＮＨＫ側）　震災によって様々な課題が浮上した中で、被災者に徹底的に寄り添おうと、この「こころフォト」プロジェクトをスタートさせた。２万2,000人という被害者の数字だけではなくて、一人一人の生きた証をきちんと伝えたいと考えた。

海外の方にどう伝えるかは、今回の番組でわれわれも非常に議論した。日本語版では女優の鈴木京香さんにスタジオ部分をお願いしているが、今回の英語版のスタジオ部分はキャスターの話す内容も一から作り直した。特に短い時間の中で原発事故をどう伝えるべきか。一方で福島で今少しずつ農業や漁業が再開されているといった、歩みは遅いながらも復興は進んでいることもきちんと伝えたかったので、どの映像を使うかについて相当議論した。

海外の人にどう伝わるかは不安だったが、世界各地からモニター報告が寄せられ、高い評価を得たので、家族を思う気持ちや夫婦愛は万国共通だと感じた。

私が非常に感銘を受けたのは、１本目に登場する１７歳の少女が、被災地を訪れた高校生に対して最後に「震災って悪いイメージばかりだと思うんですけれども、自分に生きる力や強さもくれる出来事でした」と言う。両親を亡くした当時小学５年生の女の子が今こう話すことに、強く心を打たれた。

震災をめぐっては、指摘のとおり、仮設住宅の問題などいろいろな課題もあるので、ＮＨＫとしては“３．１１”に合わせて、「ＮＨＫスペシャル」、「クローズアップ現代＋」などでそういった課題をどう解決するかについても伝えていきたいし、海外にも多角的に発信していきたい。

平成３０年１月国際放送番組審議会

平成３０年１月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４３回）は１６日（火）ＮＨＫ放送センターで５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「Imphal, The Aftermath」と「SONGS OF TOKYO」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
委　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　員	鎌田由美子	（カルビー㈱ 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア 代表）

（主な発言）

＜視聴番組「Imphal, The Aftermath」
（ＮＨＫワールドＴＶ　２０１７年１２月３０日（土）２３:１０ほか）について＞

○　今回の視聴番組は、３本制作したうちの最後の１本となる番組で、前半の２本は、インパール作戦を指揮した旧日本軍の体質を描いたもので、この３本目は、２人の日本人がこの作戦の行程をたどる旅路を描いた番組である、と事前に送付された資料にある。前半の２本と比べて、どのような違いがあるのか。

（ＮＨＫ側）　１本目と２本目は、１２月１０日（日）にＢＳ１で放送した「ＢＳ１スペシャル 戦慄の記録 インパール 完全版」（ＢＳ１　22:00～23:50）の前編・後編を英語化したものだが、３本目は、ＮＨＫワールドが制作した独自の番組だ。

○　送付された資料をよく読まずにいきなり番組を見て、これはひどいとバッサリ批判しようと思っていたが、よくよく資料を読んでみると３本制作した番組のうちの１本とあるので、残りの２本を見ないと私の批判は的外れになるかもしれないと悩んでいる。ＢＳ１で放送された２本は、８月１５日（火）に地上波で放送された、「ＮＨＫスペシャル　戦慄の記憶　インパール」（総合　19：30～20:43）と大体同じものか。その「ＮＨＫスペシャル」を２本に分けたということか。

（NHK側）　「NHKスペシャル」で放送したときに伝え切れない部分があったので、それも含めて、取材したものを全部見せる形で、ＢＳ１で前編・後編として、２本放送した。

取材地域一帯はなかなか入ることができない場所で、そこを一体どういう道筋で日本軍はたどったのかを示そうと、各方面に働きかけ、全行程を歩いた。それとあわせて現地の人々の視点も存分に入れながら番組を作った。１、２本目でも現地の人の証言は放送したのだが、どういう背景があったうえでの証言であるかがなかなか伝わりにくかったこともあり、NHKワールドで放送するために３本目を制作した。

○　３本目を制作するために、もう一回取材に行ったのか。それとも全て８月の「NHKスペシャル」のチームが撮って来た素材なのか。

（NHK側）　３本目の映像も「NHKスペシャル」の調査取材のときにディレクターが撮ったものだ。現在の視点からしっかりと見るために、事実をもとに多角的な視点で番組を作りたいという気持ちが最初にあって、まずは「NHKスペシャル」のために、まだ入ったことのない現地をしっかり見てこようと考えた。そこで、数名の調査団に同行してもらい、現地に入った。

○　番組に登場する森田勇造さんやマクドナルド昭子さんの映像は、もともと「NHKスペシャル」で使おうと思って撮っていたが、「NHKスペシャル」では使われず、この３本目で使用されたということか。

（NHK側）　もともと森田さんとは1970年代から付き合いがあり、慰霊についてのニュースや番組で撮らせてもらっていた。マクドナルドさんについても、「ニュースウオッチ９」などで放送してきた。その流れの中で「NHKスペシャル」を制作していった。

ただ、取材の過程で日本兵の証言がいろいろと集まってきたため、「NHKスペシャル」では、戦争を体験した人たちの証言だけで十分だと判断した。

○　単独で３本目だけを見た人にとっては、かなり違和感のある番組だ。まだもの足りないところもあったが、「NHKスペシャル」はよくできていたと思う。全体として迫真の番組で秀作だった。

ただ、インパール作戦は非常に特殊な作戦だ。第二次世界大戦を通じて、日本軍が行った作戦の中で、最も愚かで乱暴でずさんな作戦だ。牟田口廉也中将の、盧溝橋事件のときからの自らの功名心が背景にある。インパール作戦は実行される２年も前に立てられた作戦だ。マレー、シンガポールで敵を陥落させた余勢を駆って、インドまで踏み込んで、イギリス軍に一泡吹かせる。そして相手を士気阻喪せしめて戦争から脱落させるというばかげたことを考えた。計画立案時点ですら何の戦略的な価値もない作戦を、２年後にさらに状況が悪化している中で行った。あそこで死んだ３万人の

日本軍の一般兵は、イギリス軍に殺されたのではなく日本軍の上層部に殺されたのだ。それにも関わらず、３本目の番組だけを見ると、両軍よく戦えり、という印象だ。日本から遠く離れたところでこのような戦闘が行われました、たくさんの人が死にました、いまでも白骨が散らばっていますと言って、そこに森田さんが出て来て叫ぶ。「皆さん、今日の日本の平和と繁栄は、皆さんがいるおかげですよ」と。これは戦争の実相とはだいぶ違う。しかし、誰しもこれには感情的にホロリとする。私も森田さんの感情は非常によくわかるが、それを視聴者に伝えてもどうかと思う。そして、あそこで死んだ人たちは国を守って死んだと言うが、一人一人の兵隊はみんなそういう意識だっただろう。家族を守って死んだのだと。しかし、実際には軍の上層部によって強制的に死に追いやられた人たちだ。

最後にマクドナルドさんを長々と登場させる必要があったのかと思う。「この苦悩を後世に伝えることが大切です」と、ありきたりのコメントで締めている。

例えば硫黄島に関しては、作戦上の必要性が敵味方双方にあった。しれつな戦いの中で両軍４万人の死傷者が出て、栗林忠道大将らは玉砕する。もちろん同じ兵隊だから、硫黄島の兵隊がよくて、インパールの兵隊がよくなかったなどということはもちろんない。だが、軍の対応という点では、悲劇性はインパールのほうがずっと大きい。そこをイギリス軍と日本軍を同列に見て、両軍、お互いに故国を離れたところへ来て、美しく戦ったとみなしている。そして森田さんが、「兵隊さん、ありがとうございます」と言う。この３本目だけを見るとそういう印象だ。

第二次世界大戦を通じて最も軍部の構造的な欠陥が現れていたインパール作戦を、そういう安易な、みんなよく戦いました、死にました、こんなに白骨累々です、しかし一部の兵隊さんの間では和解が成り立ちつつあります、という話にしていることに、私はなんとなくやりきれなさを感じた。

○　「ＮＨＫスペシャル」のほうを見ていないので、この番組だけからしかわからないが、戦争をしないことが大事なんだというメッセージは非常によく伝わった。

ただ、やはり疑問が残る。なぜ、そのような作戦だったのだろうかとか、みんなどうしてそんなことをしたんだろう、と。戦争の狂気の中では従わざるを得ないので、難しすぎる作戦でもみんな従ってしまうということなのか。作戦の背景がもう少し詳しく描かれていたら、より理解しやすかったかと思う。

番組の最後に提示された、亡くなった方の数は日本兵３万人、イギリス兵１万5,000人、現地の方は数もわからない、という文字のメッセージは非常に重いのだが、現地の方の苦しみがもっと描かれていないと、その文字の意味が数字を示しているだけになってしまうように感じた。

カメラマンではなく、ディレクターが撮影した映像だと聞いて理解できたが、後半の大学生のコメントのところの音声が聞き取りづらかったので、字幕を付けるとよかったと思う。

○　私は、海外の方がこれを見たときにどう思うのかという視点で見た。慰霊の旅の意味、遺品収集の旅の意味、それが研究対象であれ、ご本人の個人的な旅であれ、そうしたものをとても日本人向けというか、情緒的なものとして見せられた感じがした。

戦死した家族がいる日本人にはすごく距離感が縮まる番組だが、果たして海外の方はこれをどう捉えるのだろうか。これが１本目、２本目でもし戦争の犠牲者ではなく意思決定側を徹頭徹尾、事実確認に基づいて整理しているのであれば、３本目にも１、２本目のそうした部分をダイジェストでもいいので入っていたら、海外の方にもわかってもらえてよかったのではないか。

現地のリサーチャーは、どういった方々によって裏付けられた情報をもとにしているのか、その背景をもう少し教えてもらいたい。

○　全体的にＮＨＫでなければ制作できない番組で、こういう番組をこれからも作り続けていくべきだと思った。

これは３本セットで見てほしいと思って作ったのか。時間的に１本１本がかなり長いので、どれか１本だけを見てもよいように、ダイジェストなどで説明があればしっかり把握できて、よかったのではないかと思った。

インパール作戦は知ってはいたが、現地に行ったことはないので地理的な情報がわからなかった。もしかするとその辺りは１本目、２本目で出てきた話なのかもしれないが、３本目だけを見た人にもわかるような親切さがもう少しあったらうれしい。

インパール作戦が世界でも最も愚劣な作戦の１つとされている最大の理由が、戦争に行ったのに戦では死んでいないところだと思う。軍部の見通しが甘く、反対を押し切ってまで行われた作戦だから、兵士は一部の権力者に殺されたようなものだ。あれだけの人が、疫病も含めて命を落としたことを、むしろ日本人は外国人以上に語り継がなければならないという思いがした。

同時に、若い世代がこれを見たときにどう感じるかという視点が入っていれば、このようなＮＨＫらしい番組が多くの人たちにもっと広がっていくような気がする。そこが少しもったいないと思った。

○　兵士は権力者に殺されたという発言があったが、権力者に殺されるところも含めて戦争だ。権力者に殺されることこそ戦争であることも含めて描いていれば、さらによい番組になったと思う。１本目、２本目と切り離して３本目を見るとそこが理解しづらい。

○　私もこれを見たときに、「なぜこんな番組なのだろう」と思った。事前送付資料を読んで、ああそうか、３本のうちの１本だったからこういうことなのかと思ったが、外国の視聴者も含めてすべての人が３本見るわけではないだろう。この番組を単独で見ても、ある程度はわかるようにするべきだろうと思う。

１本目も２本目も見ていないが、この戦争のいちばん問題だったのは、牟田口中将が、功名心からか、自分の贖罪の意識からか、むちゃくちゃな作戦を立てて、自分の部下など反対する者を更迭してまで、どんどんこの作戦を進めてしまった点だ。日本軍はロジスティックス（兵たん）が最も弱いのだが、それを全く考えないでどんどん突っ込んでしまった。米英軍はロジスティックスがない戦争をやらない。日本軍の最も弱いロジスティックスについては、おそらく１本目、２本目で出てくるのだろうが、そこのところが３本目でも少し出てくれば、もう少しわかりやすかったのかもしれな

い。

興味深く感じたのは、現地の人々がイギリス軍側と日本軍側に分かれていたことだ。その両者はどんな関係だったのか。争ったのか、戦後、しこりが残ったのか、どんな感じだったのかについて、少し説明があるとよかった。

もう１つは悲惨な話だが、下痢をした兵士に呼ばれると、みんな鼻をつまんで行ったという話は、おそらく臭かったのだろう、本当に悲惨だったのだろうとよく伝わった。

また、荷物を運びながら山を登っていくのは大変だという話があり、現地の方が、600 メートルの川を渡る余力が残っていなかったという話をされていた。ふつうは 600 メートルを泳ぐだけでも大変なことだが、渡るためのボートを用意するような態勢もなく、単に泳げと言うだけではほとんどの人が背のうを担いだまま溺れて死ぬに決まっており、そういうむちゃくちゃなことをやっていたことがわかるといいのではないかと思った。

ＮＨＫしか撮れない非常にいい番組なので、なんとかもう少し全体がわかる形にしてあると、もっとわかりやすかったのではないか。３本目だけを見る人もいると思うので、ミスリーディングになる恐れがあると思う。

１本だけ見たのでこのようなコメントができるわけであり、３本すべて見ていたら違ったかもしれない。ある意味では予期せざる効果があったのかもしれない。

（ＮＨＫ側）　１本目、２本目で語り尽くしたような気持ちがあって、３本目を作るときに、頂いた意見のようなことに対する意識が希薄だった。この戦争の無謀さについて、３本目でもしっかり示す時間を設ければよかったと思っている。

あの地域は住民の人たちの話をじっくりと聞いてまわることがなかなかできない場所だが、マクドナルドさんはイギリスのインパール協会の会長をしており、兵士たちを束ねて和解活動をしてきた人で、マクドナルドさんを通してようやく現地でカメラをまわすことができた。さらにＮＨＫのクルーはその地域には入れないので、現地のクルーと連絡をしながら取材をした。あそこで撮れたのは、ほぼ初めての映像であり、それで満足した部分があったのかもしれない。

現地の悲惨さなどが３本目では伝わらず、表面をなでただけのような印象を与えたとしたら、３本セットの番組だとの自覚をもう少し強く持って作るべきだった。

リサーチャーについて言うと、ミャンマーはリサーチャーが１人同行していた。それと調査団についてだが、森田さんは民俗学者で少数民族の取材をずっとされていて、1970 年代にインドのナガ平原というナガ族の地域にたまたま入って、そこで日本語を話す現地の人たちと遭遇し、かすかなルートを作ることができた。このインパール作戦についての取材は全くゼロのまま現地に行き、リサーチャーもゼロから取材をした。バタバタした取材だったので、一つ一つの証言について深入りしていくことが、現地ではなかなかできなかった。

大学生の言っていることが聞きづらかったという意見があったが、字幕のフォローが弱かったかもしれない。

○　現地の人々の声は大変貴重だったと思う。そのうえで作られた「ＮＨＫスペシャル」では、初めて明かされる史実も多かった。死者のうち６割がチンドウィン川を退却した後に亡くなったなど、戦史的に見ても大変に貴重なリサーチだ。

（ＮＨＫ側）　番組は多くの場合、シリーズ全部を見てもらえるわけではなく、ある１本だけを見て判断する方もいる。そうしたことも、今後番組を制作するうえで考えていきたい。

＜視聴番組「NHK WORLD presents SONGS OF TOKYO」
（Part １　ＮＨＫワールドＴＶ　１月１日（月）７：１０ほか
Part ４　ＮＨＫワールドＴＶ　１月２日（火）８：１０ほか）について＞

○　この取り組みを行ったこと自体、よかったのではないかと思っている。個人的にはＪ-POPの番組は見たことがなく、「Perfume はすごい」とは聞いていたが、どうすごいのかが全然知らなかったので勉強になった。ふだんは触れることのなかった人たちに出会え、よさがわかる場合もあったので、世界に発信したことはよかったのではないか。会場に来ている外国の方に出演者のどこがいいのかを聞いているのも、わかりやすくてよかった。
日本文化を紹介する番組であるのならば、日本の番組的な掛け合いとか、相手を少しいじったりすることは特にしなくてもいいのではないかと思った。

○　出演者の幅が広くて、万人受けするかたちに番組が仕上がっていると思った。しかしその一方で、事前送付資料に、「東京の『今』を象徴する音楽を」と書いてあるが、出演者たちは「今」を象徴するというよりは、万人受けする人たちだと思った。むしろ「昔」も相当入っていて、日本らしいからウケがいいのかなと感じた。
もったいないと思ったのは、ある歌手の出番が終わった後に、会場に来ている外国人たちがインタビューに答えていて、とても興奮していたが、インタビュアーが「歌っている最中はもっと興奮していた」と言っていたので、その様子を見たかった。外国の方々の様子は、もしかすると日本人とは違うのかと興味がわいた。
紅白歌合戦は世界的な日本のブランドだと思うが、オリンピックに向けて、紅白歌合戦のようなものをコンテンツとして使うことはないのか。紅白歌合戦は歴史があり、演歌もあり、まさに「今」も入っている。構成がやはりとても工夫されていると思う。Ｊ-POPだけではなく地方のことも入るし、お笑いも入るし、日本の縮図みたいに上手に構成されていると思っている。

○　楽しく見た。音楽もよかったと思うが、知りたかったことがいくつかある。観客席

でインタビューされた外国の方々に違和感を覚えた。ひょっとしたら事前にリハーサルがあって、あなたにこういうことを聞きますと、あらかじめ話がつけられていたのかもしれないと感じた。

今後、この番組は多言語展開する予定があるのかに非常に興味がある。海外の方がこういう番組を見たときに、インターネットで歌手の情報を自分の国の言語で調べようとするだろう。

東京を含め、日本に集まるアジアのアーティストが日本でどう受け入れられているか、どう展開しているか、どういう支持を受けているかについても、世界発信をしていくうえで重要な意味があるのではないか。日本のアーティストだけではなく、例えば台湾や韓国、あるいはタイなど、訪日外国人の興味をそそるようなそれぞれの国のアーティストを取り上げる番組もあればいいなと思った。

○　楽しい番組だった。あまりＪ-POPに詳しくないが、「なるほどなあ」と勉強になった。日本で人気のある若い人たちをどんどん出すことは非常にいいことではないか。ＮＨＫワールドを新しい層に広げることにもなる。

会場で外国の方々にインタビューをしていたホラン千秋さんは水を得た魚のようで、非常によかった。

（ＮＨＫ側）　まず、日本語での掛け合いのようなものが要るのだろうかという意見があったが、あのような軟らかい部分もあったほうが見ている側として楽しいかなという判断もあって入れた。

しかし確かに、興味のない方にとってはおもしろくないところかもしれないので、うまくバランスをとっていくことをこれからも考えていかなければいけないと感じた。

本当に東京の「今」を象徴する音楽なのかという意見も出たが、確かに今回の出演者は比較的評価がすでに定まった方が多い。今回は、出演者を世界でもきちんと受け入れられているかどうかという観点で選んだ。本当の「今」を表現すると、一般視聴者にとってハードルが高いコアな番組になってしまうリスクがある。今回は初めての試みだったが、これが例えば１年に１回ぐらいのペースで何年か続いていくようになれば、もう少し攻め込んだ「今」を象徴する方にもぜひ出ていただきたいし、よりわかりやすい形になっていくのかなと思う。

○　今回の番組の中身はよかったが、「今」という表現はなくてもよかったのではないかということを言いたかった。“Ｊ-POP Now”というと普通に聞こえるが、「今」と日本語になってしまうと、微妙に違和感がある。

（ＮＨＫ側）　人によって受け取り方がいろいろあるので難しいところもあることが、よくわかった。

外国の方が聴いている最中の様子を見たかったという意見があったが、確かに、観客席の前方にいた200人の方々は踊りながら見ていた。そうい

う映像は撮れないかとスタッフとも話したのだが、画面構成の都合もありできなかった。これは反省点だ。外国の方は、踊りが上手なので、そういうところも次回反映させたい。

紅白歌合戦については、男性アーティストと女性アーティストがチームに分かれて歌の技量を競い合う、世界的にもまれなフォーマットで成功している。男女のバトルみたいな形がそぐわない国もあるとも聞いてはいるが、世界中で見られているコンテンツなので、あの形をうまく取り入れながら国際放送ならではのコンテンツを開発していくのもいいかと思う。

観客席の外国の方へのインタビューが、事前リハーサルをしたように見えるとのことだが、これは否めない部分はある。誰のファンであるかを事前に確認したうえで話を伺ったのは事実だ。

多言語化については、非常に強い関心をもって取り組んでいる。この番組は、まず１月４日から英語版と中国語版とタイ語版のＶＯＤを見逃しサービスとして実施している。その後、２月１９日からインドネシア語版、ベトナム語版、韓国語版、スペイン語版、フランス語版を追加して配信する予定だ。

アジアのアーティストでは、アジア圏ではK-POPのアーティストが現状一番人気が高く、その次がおそらく日本になるかと思う。あとは台湾のアーティストが一部アジア圏で大きな人気を誇っているが、そのほかの国や地域では海外にも人気のあるアーティストが少ない。

現在、１年に１回、ＡＢＵ（アジア・太平洋放送連合）の年次総会のときに、１５か国・地域程度のアーティストが集って歌を披露する「ＡＢＵソングフェスティバル」という音楽による文化交流を行っている。そこに委員の言うような「今」の人気者がそろっているかというと、若干微妙な部分もあるが、そういった試みを参考にしつつ、アジアのアーティストについても言及できれば、なお幅の広い番組ができると思う。

インタビュアーのホラン千秋さんは、ＮＨＫワールドＴＶでも番組を持っているので、チャンネルの顔の一つとして出てもらった。

○　視聴番組とは関係ない話だが、大みそかにＮＨＫはいつも地上波で「第９」の演奏会を放送している。自分はＮＨＫホールで生演奏を聴いたが、圧巻だった。指揮者はクリストフ・エッシェンバッハだったが、本当に観客席は興奮のるつぼといった感じで、完璧な「第９」だった。日本人は「第９」が好きなので、ＮＨＫ交響楽団が世界で一番演奏がうまいという話も聞く。Ｊ-POPもいいが、ああいうものは放送できないのか。権利関係もあまり面倒ではないのではと思うが。

（ＮＨＫ側）　昨年５月２１日に、ＮＨＫ交響楽団に関する４９分の特集番組「The Mission : Paavo Jarvi & NHK Symphony Orchestra」をＮＨＫワールドＴＶで放送した。ＮＨＫ交響楽団のベルリン公演や楽団の歴史、主席指揮者パーヴォ・ヤルヴィの横顔などを紹介したものだ。ベルリン公演で、グスタフ・マーラーの「交響曲第６番」を演奏したのだが、その公演

をハイライトとする構成だった。国際放送で放送する場合は、それぞれの曲で使用楽譜の版元や、独唱者を含む指揮者・演奏者それぞれに個別に許諾を得る必要があり、海外と多くの連絡・許諾作業を行った。特集番組を作るうえで初めてわかったが、国際放送の場合、非常に多くの許諾作業が必要になり、なかなか簡単にできるものではないと感じた。

平成２９年１２月国際放送番組審議会

平成２９年１２月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４２回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センターで８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「平成３０年度国際放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたり、説明を行った。審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。ひき続き、視聴番組「Home Sweet Tokyo」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
副委員長	大西　　洋	（オフィス タイセイヨウ）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	鎌田由美子	（カルビー株式会社 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア代表）

（主な発言）

＜最近の国際放送の動きについて＞

○　「パラダイスペーパー」について、「ＩＣＩＪ国際調査報道ジャーナリスト連合にWorld News部からも３人が加わりＮＨＫスペシャルと連動したニュースを出稿。ＢＢＣなどと同時に世界の権力者とカネの問題を報じた」という説明があった。ＮＨＫスペシャル「追跡　パラダイスペーパー　疑惑の資産隠しを暴け」（１１月１２日（日）放送）を見たが、これは相当いろいろな取材をしていると思った。ＢＢＣとは比較していないが、ほかの国と比べても日本の報道はかなり突っ込んだ報道だったのか。この報道の日本の独自性を説明してほしい。

（ＮＨＫ側）　「パラダイスペーパー」はいくつか他社と手分けをして取材をしている。ＮＨＫが取材したのは、日本人が関係する部分と、どうやって税金逃れをしてきたのかという事例を現地で取材したところだ。

○　ＢＢＣの番組も、日本の素材を使っているのか。

（ＮＨＫ側）　ＢＢＣとも情報をシェアしている。ほかのメディアとも協力して、手分

けして取材した。

＜「平成３０年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について（諮問・答申）＞

○　この基本計画の内容とは少し違うかもしれないが、ＮＨＫが国内、あるいは国際的に批判された時の対応は、どうなっているのか。日本の国際組織が海外から批判されることがあり、その時に適切な対応をせず、無視するという状況がかつてからあって、それはよくないなと思っている。ＮＨＫも今後、批判されることも出てくるかもしれないが、そういう時はどう対応していくのか。

（ＮＨＫ側）　例えばＮＨＫワールドの内容についての意見は、ネットや手紙など、さまざまな形で頂いているので、その都度、これはこういうことですとか、これはこういう意図でやっていますとか、大変ありがたく受け止めました、といった反応を返している。

具体的に、例えばある機関から批判があったり、それからこうあるべきではないかと意見があったりした時には、ＮＨＫワールドに限らず、ＮＨＫの立場をきちんと説明して理解をしていただくよう対応している。批判として受け入れるべきものがあれば受け入れるし、きちんと説明して理解していただけることならばそのようにする。国内放送と同じ方針で臨んでいる。

○　１ページ目では「公平・公正で信頼できるニュース」とあり、２ページ目では「公平・公正なニュース」とある。何かセットになったフレーズがあるわけではなくて、場合によって表現が違うのか。

（ＮＨＫ側）　そのとおりで、何か決められたフレーズがあって、それを使っているのではなく、その時、そのところで強調したいことをきちんと述べていく。本質的なところは変わってはいない。

○　ここに書いてあることに特段問題はないと思うが、現在、世界での日本の取り上げられ方を見ると、やはりネガティブなニュースから始まっている。例えば、韓国が大キャンペーンをやっている慰安婦問題についてはますます悪くなってきて、サンフランシスコと大阪の姉妹都市提携解消まできている。さらにいろいろな国に慰安婦像を作ろうとしている。

それから品質問題が日本の製造業の根幹を揺さぶっている。私に言わせれば、あれはもともとオーバースペック（機械や装置が利用者に求められている仕様を超えている状態）なので、実害を受けている利用者はほとんどいないわけだが、でも、それで日本があたかもチーティング（不正行為）の国であると言われる。要するに批判があった場合にＮＨＫとしてどのように対応するのか。いちいち慰安婦問題について真相はこうだと反論をしろと言っているのではない。ただ、もう少しそういうところに対

応するような、日本の物作り文化はちゃんとあって、過当競争でオーバースペックだとか、そういう日本に対する批判に対応するような番組作りは、特に意識していないのか。意識しているとすれば、それはこの基本計画案のどの部分にあたるのか。率直に言えば、日本に対する悪意あるキャンペーンに対してのカウンターキャンペーンの意味合いはあるのかどうか、ということだ。

（NHK側）　字数が限られている基本計画案では、この「公平・公正な」に心を込めたつもりだ。「地域ならではの最先端技術」は、日頃、東京だけで取材していると届かないようなものについても丁寧に地域と連携を密にしながら拾っていく。必ずしも世の中に知られていなくても、世界のマーケットシェアが７割、８割、あるいは９割の技術があるので、このようなものもしっかりと伝えて行こうと思っている。

（NHK側）　補足すると、NHKの国際放送の番組は国際番組基準に根ざして作っているわけだが、その中でもきちんとうたわれていて、ここでもきちんと書いてあるが、日本に対する理解を深めていく。私たちは日本に対する理解を深めるということは、特別なことをするというよりは、世界でさまざまな出来事が起こっている、あるいは日本でさまざまな事件・事故等があることを報道する、それから企画を作る、番組を作ることによって、日本人が持っている一つの価値観、あるいは日本が国として目指している目標、それからこうあるべきだと思っている姿、そういうものをきちんと伝えることによって、日本という国はこういう国だ、あるいは日本人というのはこういう価値観を持って、こういう人たちだときちんと理解してもらうことが、われわれ国際放送の目的、目標であると思っている。

そういう意味では個別具体的に反論するよりは、日本に対する理解を深めてもらう、さらに外国の事情を日本が知って、日本も外国のことを理解していく、そういう一種の正攻法のやり方を通じて国際放送の目的を果たすということだ。

この基本方針の中で、基本的に考えてうたっているのは、そういうことだと理解をしている。

○　これぐらいのボリュームだとなかなか細かいことを書くのは難しいとは思うが、４ページにわたり「2020 年に向けて」という文言が６回出てくる。もし、これが平成３１年度用の基本計画だとしたら、やはり同じような文言が出てくるかと思う。その初年として、その１年間でどういうことを目指すのかが、もう少し見えても良いのではないかと思った。最初の１年で、もう少し具体的にどういうことを考えているかを、口頭で良いので教えて頂きたい。

（NHK側）　われわれも 2020 年に向けた１年目として、これを作ったつもりだ。例えば視聴者の視聴のしかたが急激に変わっているので、本当に５０分連続して番組を見てもらえるかが大きな問題意識としてある。今後は、もっと短

い番組も制作してみて、もう少しこういう番組が良いのではないかとか、この番組はやめてみようとか、トライアルをまず１年やってみようと思っている。それを踏まえた上で２年、３年とつなげていこうと考えている。

○　この基本計画は、英語版も作られているのか。それから、どこまで開示されているのか確認したい。つまりこれは関わっている制作会社やプロデューサーに、どういう形で周知徹底され、どのように理解を深められるプロセスを得るのか。例えば「公正・公平」というのも、いろいろなその先にある実務的な意味で捉えるガイドラインがあると思う。

もう一つ、「日本と世界をつなげる公共メディアへと進化していく」とあるが、もう一度、改めて「公共メディア」の定義を教えて頂きたい。

（ＮＨＫ側）　一番目の質問は、基本的には日本語で、今作っているところだ。もちろん必要に応じて、例えばスタッフに英語しか理解できない人がいれば、もちろんミーティングなどで説明していく場合はあると思う。これは協会内でも共有するし、インターネットで公表して外部の人にも見てもらう。折に触れて、こういうものを基本にしながら番組提案を募っていく。

○　大事な点は、これはＮＨＫワールドに携わっている海外の多くの職員も理解すべきだという発想だと思う。この基本計画がＮＨＫ国際放送のこれから１年間の指針であるならば、簡単なことだから英訳して、仮訳でも良いのかもしれないが、ＮＨＫの各支局等で担当している人に周知したらよいのではないかという趣旨だと思う。

（ＮＨＫ側）　「公共メディア」については、既にこの中にも書き込んだが、放送だけで見てもらう時代ではないので、インターネットやスマートフォンなど、ありとあらゆるツールを通して広げていくことだという思いを込めた。もちろんこれは国内放送もそうだし、海外での放送は特にそうだと思う。特に東南アジアなどはモバイルで見ている人も多いので、そちらに向けてどうリーチしていくか。あるいはＳＮＳなどを通じてどうリーチしていくか。これに向けた試みを進めるということだ。

○　インターネットやＳＮＳが進展し、これだけ世の中の変化が激しく、国際放送と国内放送を問わずテレビそのものの存在意義が今まさに問われようとしている。これは単年度計画なので良いと思うが、長期的に見た時に、おそらく２、３年すると、ＮＨＫがＳＮＳやインターネットでやることは何かということが、とても大きな課題になりそうな気がする。

次の時には、そういうことを課題として認識して提案するとよいと思う。文章には入っているのでこれはこれでよいと思うが、今、国際メディアも国内の放送も全部含めて、若い人たちがテレビ離れをしている中で、どう対応するのかが気になるところだ。

（NHK側）　NHKが何のために公共メディアを目指すのかが、やはり一番重要な部分だと思っている。今、経営計画は新年度からの３か年を策定中だが、その中でも検討課題の大きな柱になっている。やはり公共放送から公共メディアへの進化を目指すのが何のためなのか。そこでわれわれが目指すものは何なのかを、きちんとうたっていかなければいけないと思う。

国際放送の場合も、全く同じことが言える。日本の公共メディアを目指すのであれば、その目指すものは何であるかを探っていかなければならない。それについては、今後もさらに具体的に検討し、また委員の皆さんにもお知らせしていきたい。

○　もう視聴者は５０分などの長い番組には耐えられず、だんだん短い番組を志向するようになってくるだろう。確かにＳＮＳの社会において、みんなかなり短いものを見るクセが付いてくるから、新しい試みは大事だろう。

○　ことばはとても聞こえがよくて、スーッと入って来たのだが、基本方針の大局的な部分と、その次に来る編集方針に具体的なことが書かれているのかと思って読むと、なんとなく基本方針と編集方針とが同じような表現で、丸く包み込むような表現が多いことが気になった。

ワールドＴＶのところは、具体的な説明があるが、例えばワールド・プレミアムのところで、確かにわかりやすくというのは大事なのだが、何回も「わかりやすく」が出てきて、「読みごたえ」とか、「より多くの」とか、ことばの響きがよいので違和感を持つことはないが、次年度の基本で、ここからまた具体策を出していくのであれば、もう少し踏み込んでもよいのではないかと感じた。

もう一つは、短い番組を考える時、誰がターゲットなのかによって番組の長さも変わってくると思った。

（NHK側）　「ことばの響きがよい」と言われると、そうかと思うが、基本的にワールド・プレミアムは国内の放送番組をそのまま世界に流している。2020 年に向けて具体的に何をどう伝えていくかは、プレミアムでもワールドＴＶでも同じ課題だと思うので、国内放送との連携を深めながら、さらに詰めていきたい。

○　それでは、先月の審議会の意見交換も踏まえて「平成３０年度国際放送番組編集の基本計画（案）」は、原案どおり可とする答申をしたいが、よろしいか。

○　異議なし。

（NHK側）　ご承認して頂き、お礼申し上げる。番組審議会で答申を得たので、この後、来年度の具体的な番組編成を決定し、２月の番組審議会で「平成３０年度 国際放送番組編成計画」として改めて説明する。

＜視聴番組「Home Sweet Tokyo」
（NHKワールドＴＶ　２０１７年１１月２９日、２６日、
１２月３日、１０日（日）１３:１０ ほか）について＞

○　第１話の「Safety First」を見た時に、非常に驚いて、これは問題ではないかと感じたが、回を追って見るごとに番組のおもしろさがわかってきた。しかも１５分で上手にまとまっている。逆に全４話で完結しているようだが、もったいない。このまま続けるとよいと思う。英語を話せる俳優・タレントさんにもっと出演してもらい、こういうドラマがどんどんできればよいなと、全４話を見てみてそう思ったが、最初に「Safety First」だけを見たのでショックを受けた。

日本は安全だと思うし、多くの方がそう思っているのだろうが、例えば飲食店でも、物を置いて場所取りすることは慣習としてはあっても、貴重品は置かないように気をつけていると思う。このドラマを海外に発信することで、日本はそこまで安全なのかと誤解されてしまうかもしれない。それは違うということを指摘したい。

それから細かいことだが、イギリス人はビールが好きで、パブで出すエールやラガーは確かに１杯をチビチビ飲みながら２時間ぐらい話したりするが、ピルスナーはキンキンに冷やして飲むので、ビールの種類が違えば冷やす場合もあることは、イギリス人も知っていると思う。そのため、ビールとひとくくりにしないほうがよいのではないかと思った。

特にイギリス人の主人公ブライアンが、日本ではこうなんだとカメラ目線で突然言ってしまう。そのステレオタイピングな表現のしかたに非常に抵抗を覚えた。一般論としてこうだと言った時には、必ずしもそうではない場合があるので、この地域ではこうだったとか、あるいは少なくともブライアンの目線からはこう見えたという物語にしたほうがよいと思った。

今までアメリカ人がブロードウェイで日本人役を出す時には、眼鏡をかけて出っ歯でカメラをかけているという、ステレオタイピングな表現をやってきて、それが大きな批判を受けた歴史もある。日本ではこうだとついやりがちだが、ブライアンの視線からはこう見えた、としたほうがよかったと思う。

ただ話題はとてもおもしろくて、特に第３話の「キャラ弁」はかなり楽しめた。子どもに弁当を作ることはあっても、キャラ弁を作る気力もないし、思いもしないけれども、ブライアンはその状況に立って子どものためにやったのだろうなあと。それはドラマとしておもしろいので、そういう、日本人でも、「キャラ弁って、へえ、そんなことがあるんだ」というそのショックを海外に伝えるのはおもしろいと思う。今までこの審議会でも、物作りの番組はすばらしいという評価があった時は、日本人が見て、「ああ、日本ってすごいね」と、思うようなところをアピールしたものが高い評価を得ていたので、このシリーズでも、日本ってこんなおかしなところがあるよね、と日本人が見てもおもしろく思えるところを伝えられると、さらにもっとおもしろいシリーズができていくのではないか。

○　最初、４コマ漫画の継ぎはぎみたいで、どうかなと思って見ていたが、「a cup of tea」と「カプチーノ」を勘違いする場面で大いに笑った。私も似たような経験があり、ボ

ストンのレストランで、ペーパータオルをお願いしたらペッパーが出てきたことがあって、そのことを思い出しながら見た。
　日本の若者で日本の文化をよくわかってない人がこれを見れば、「えっ、日本ってそうなんだ」ということを知ることができるかもしれないと思った。
　今後のテーマについて考えてみたが、「イエスとノーの使い分け」、それから日本人はよく宗教がないことを自慢する人がいるが、その宗教への態度、あるいは「甘え」。それから「カワイイ文化」。それから電車の中での携帯電話の通話禁止などはどうか。そういうものは海外ではほとんどない。日本ではなぜそうなのか。あるいは、今回は男性がイギリス人で、女性が日本人だが、これを逆転したらどうなるのか、ということも考えた。非常におもしろく視聴した。

○　時代的に、今これを放送するのが今の日本を象徴しているのかと、正直違和感があった。特に第１話については、義理の父は日本でも婿に相当気を使うのに、その辺りの設定も少し違和感があった。カプチーノの場面も、そういうこともあるかもしれないが、１０年前、２０年前と今では日本も英語の力について、ずいぶん状況が変わってきているので、あの場面は昔の日本らしいと思った。
　よかった部分を挙げると、古きよき家族的なところは日本の文化でもすごくよいところがあると思うので、ユーモアたっぷりだが、ホロリとさせるところも伝わって来た。
　しかし、インターネットで何十万回も再生されるほど話題にならなくても、一部の人が見てくれればよいのかもしれないが、やはり日本文化を伝える番組を作るからには、もう少し今の時代に即している方がよいなとも思った。
　一方でキャラ弁やマナーとか、習慣の部分も上手に取り込まれてはいたが、日本人でもやっていない人たちもいる。それを取り上げるのだったら、日本人でもやっていない状況にもっとフォーカスしたほうがスパイスが効いてよいのではないか。

○　本当にすっとふに落ちる感覚で、頭の中をゼロにして海外の人が見たらおもしろいのではないかと思う。私は総合テレビでの放送を先に見たが、日本人として見てもおもしろかった。
　日本人の文化をもう少し強く出してもよかった気はするが、非常におもしろいのでこういうシリーズは続けていくとよいと思う。

○　大変おもしろく、興味深く見た。特に出演している俳優が皆さん個性的で、女の子もとてもかわいいなと思った。
　ただ、１点、本当にそうなのかと「キャラ弁」について思った。まず小学校という設定だが、幼稚園ならばらありえるとは思うが、公立の学校はたいてい給食が出ており、例えば何かの都合で１週間お弁当を持って来なさいということが実際にありえるのかどうか。きちんと給食費用を払っている母親はおそらくかなり反発するのではないか。
　小学校で何年生の設定なのかはわからないが、１年生ならキャラ弁はまだありえるかなと思うが、３年生ならばないかもしれない。それでいじめがあるというのも、お

そらく事実を反映していないのではないか。
　また、小学生の女の子が自分で貯めたお小遣いを一生懸命数えておにぎりを買っていくシーンがあるが、小学生が登校途中に一人でコンビニに寄っておにぎりを買っていくことを先生が許すかどうかも疑問に思った。

○　素直に楽しんだ。「えっ、こんなことあるのかな」と思うところも、ストーリーをおもしろくするためならよいのではないか。俳優も皆さんうまいと思う。
　第４話は大変感動的ではあるのだが、最後の終わり方が全くちんぷんかんぷんだった。主人公たちが和解する大団円のよい場面なのに、主人公の妻役の木村佳乃さんが怒った顔で不吉な音楽とともに出てくる。あれは何を見せようとしているのかよくわからない。
　それからトイレが非常にたくさん出てくる。あれはシャワートイレで水だらけになってしまうことを見せたいのだろうが、シャワートイレは外国にはあまりない。そのため日本にいる外国人の目から見てみればユーモアのタネになったとしても、外国の視聴者はトイレで悪戦苦闘してビショビショになっているところを見ても、なんの話かわからないと思うし、ズボンまで脱がせる必要があるのかと思った。少しこだわり過ぎではないか。
　それから、それぞれにキャッチフレーズが一つずつ登場するが、「甘いものは別腹」ということばをどうして外国人に教えなければならないのか。
　英語に、その民族に特有の特徴のことを指すイディオシンクラシーという言葉があるが、もう一段ハードルを高くして、イディオシンクラシーを込めたものにチャレンジしてほしい。例えば宗教観など、なぜクリスマスイブに教会へ行って、大みそかに除夜の鐘を突いて、翌日には神社へ行ってかしわ手を打っても平気なのか、など。これは日本人のイディオシンクラシーとして、なんでも包摂する面と、プリンシプル（原理原則）や宗教心がない面、その辺りはどういうふうに併存しているのかなど。
　ごみの分別は、ドイツでもできるという人もいるが日本しかできないと思う。そして日本人は非常に秩序が好きだ。東京ではみんな通勤電車に乗るのに列を作って乗る。乗るとおばあさんが来ても若者は譲らない。関西ではみんなゴチャゴチャと乗るけれど、車中では率先して若者が老人に席を譲るという話を聞いたことがある。とにかく一つ規則ができると、みんなそれにワッとなる。
　おかしなやつらだということではなく、それは日本人の普遍性であり、「ああ、なるほど」と思わせるようなよい部分を集めたシリーズを作ってもらえればよいと思う。ぜひチャレンジしてほしい。

○　やさしく理解を深める異文化交流ドラマの観点から、一つ一つ楽しく見た。どこでどういうふうに笑いが取れているのか、既に海外からの反応があるのなら知りたいと思ったし、どれぐらい見られているのかについても知りたい。
　個人的にはテーマの選定をどのようにされたのか、ほかにはどのようなテーマ候補があって、それをどう選んだのか興味があった。
　これからもチャレンジするのであれば、もう少しドラマとしての映像言語、カット割り、編集のリズム、画（え）のおもしろさなどがあると、もっとおもしろくなるの

ではないか。
　さらに物語の面では、怒りや悲しみや苦しみなど、ユーモアのセンスとは対極にあるような感情の起伏のようなものが盛り込まれると楽しくなると思う。こういうチャレンジングなドラマを国際発信していくことをぜひ続けてほしいと思う。

○　率直な感想としては、ユーモアの感覚がイギリスのコメディー映画や、スラップスティックのような感じでわかりにくい感じがした。
　また、なぜオープニング曲にフランス語の歌が使われていたのかということと、イギリス人の主人公の英語が聞き取りにくかったことが気になった。もう少し普通に話したほうが、イギリス向けだけでなく世界全体でわかりやすいのではないだろうかと感じた。木村佳乃さんの英語力には感心し驚いた。

○　主人公の英語については同感だ。何回か見直さないとわからないところがあった。

（NHK側）　ほかにどのようなテーマがあったかというと、「本音と建て前」、「無礼講」の文化、整理整頓や掃除、日本の祭りなど、いろいろなテーマの中から選んだ。
　フランス語のオープニング曲を選んだ理由は、今回、特にイギリス的な番組にしようとか、純粋に日本的な番組にしようという意図はなく、この家族の雰囲気、明るくて包み込むようなお互いを思う気持ちと、女性のボーカルがとても合っていたので、結果的にフランス語の歌になった。
　正しく伝えることの重要性はおっしゃる通りだが、コメディーでもあり、演出的に「本当にこんなことがあるのか」というシーンが多々あったかと思う。その辺り、どこまで正しいことを情報として入れながら、笑いも妥協せずにやるかはチャレンジだとは思うが、いろいろなシチュエーション、例えば給食のことについても、「こんなことってあるのか」と調べた。いろいろな小学校に連絡をとり、給食施設の都合で１週間ほど給食が出せない時はお弁当を持って来てもらうことも、公立の小学校であったと聞いた。コメディーなので若干フィクション色が強くなるかもしれないが、事実関係を調べたり、なるべくいろいろな情報を入れたりした。その辺りのバランスは今後も引き続き研究していきたい。
　キャッチフレーズについても、ことわざで全部統一しようと考えたが、「甘いものは別腹」ではそれができなかった。ただ、反応としては、キャッチフレーズの文字情報を出したのは好評だった。日本語を覚えたいという人が、アジアや欧米にも多くいる。さらに英語での意味も字幕で入れた。
　第４話の終わりには、ユーモアを入れた。義理の父親との関係などで、最後が少ししっとりというか、シリアスな感じになったが、コメディーなのでバランスを取った。見た方の中では、あそこがおもしろいねという方もいらっしゃった。もちろん意味がよくわからないという方のご意見も分かる。持ち帰って演出の者とも共有したい。
　スラップスティックのようだという指摘があったが、もともとイギリス

人が書いた脚本に、日本人の演出家が、自分の視点を盛り込んで書いたものなので、いろいろなもののせめぎ合いはあると思う。見た人が、「ここがおもしろいけど、ここはいまいち」とか、「ここはいまいちだけど、ここはおもしろい」というようなことが出てきている理由だと思う。

平成２９年１１月国際放送番組審議会

平成２９年１１月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４１回）は２１日（火）ＮＨＫ放送センターで１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「平成３０年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「MIATARI Finders」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
副委員長	大西　　洋	（オフィス タイセイヨウ）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	鎌田由美子	（カルビー株式会社 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	小林　栄三	（伊藤忠商事㈱　会長）
委　　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）

（主な発言）

＜「平成３０年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について＞

○　今、東京都医師会はオリンピック・パラリンピックを契機に何か未来に残すものを考えたいと主張している。その一つとしてたばこ対策を挙げているが、ＮＨＫとして何かそういう未来に残すものを考えているのか。もし何かあれば伺いたい。

○　この基本計画（案）が出されたことは非常に重要だと思う。この平成３０年度の基本計画（案）のほかにもっと長い長期戦略のようなものが存在するのかどうかを伺いたい。例えば2030年に向けて長期戦略があって、それが環境にやさしい日本を訴えていくのであれば、オリンピックの情報を発信する上でそういった切り口に焦点が当たる可能性が高いかと思う。

そのほかに三点ある。１ページ目に「最高水準の放送・サービスを提供していきます」とあるが、最高水準はどのように言語化されているのか。二点目は、「多様」や「地域と世界をつなぎ」というところが非常にいいと思った。これをもっと進めてもらえると、先進国として日本が求められている役割を果たせるのかなと思っている。三点目は、ジェンダーにフォーカスしたところが含められるとさらにいいと思った。

○　「国内連携強化と番組の選択・集中」というところに、「働き方改革を推進し」と書いてあるが、ここのところの意味が把握できないので、もう少し詳しく説明していただきたい。

○　１ページ目の二番目のパラグラフに「世界の視聴者の期待に応える、公平・公正で信頼できるニュースや多様で良質なコンテンツを発信し」とあるが、具体的にどういうものが「世界の視聴者の期待」になるのかを聞かせていただきたい。
　それから、「強化していく」とは何かをプラスアルファしていくことだが、そこで何が減少したか、打ち止めになったか、というような変化、あるいは推移のようなものがもし何かあれば教えていただきたい。

○　2020 年のオリンピック・パラリンピックに向けて世界にメッセージを発信するのであれば、その一つは、「環境」が大きなテーマだと思っている。
　今回のオリンピック・パラリンピックで、資源が大きく変わるきっかけになっていると実感している。例えば前回の東京オリンピック・パラリンピックまでは天然資源だったところが、今回はメダルなども再生可能で持続可能な資源に変わってきている。これも、日本のオリンピック・パラリンピックから世界に発信していける要素にもなると思うので、ぜひこういった情報を含めていただけるとありがたい。

○　細かいところは別にして、この基本方針の内容を自分なりにキーワードだけ拾ってみる。まず「地域と地方」。日本の本当に地方にある文化や歴史を紹介していく。次のキーワードが「文化・芸術」。それから「2020 年」。そして「アジアにおける存在感」と「ＳＮＳ、インターネットに対してどう対応するか」だが、まず文化・芸術については、これから 2020 年のオリンピック・パラリンピックと並行して日本の文化を海外に向けて発信していく絶好のチャンスになっている。ＮＨＫしかできない文化・芸術発信をぜひ外に向けてしていただきたい。
　それと 2020 年に向けて変わっていくものを紹介するとあるが、それは街なのか、ヒトなのか、モノなのか、コトなのか。そこまで事細かに分けて情報発信をする。アジアでのＮＨＫの存在感は大きいので、そこを具体化していただければいいのではないかと思う。

○　内容そのものに関してはそんなに違和感なく、またコンテンツに関していろいろ工夫していることはよく理解できた。
　一方で、いいコンテンツがどのように実際の視聴者に届くのだろうか。川上から川中、川下に例えると、川上はコンテンツの供給者、川中はそれをどのように届けるか、川下は視聴者がそれをどういうふうに見るか。その辺のいろいろな仕組みをそろそろ系統立ててやったらどうか。例えばインドネシアだったら、インドネシアとどういうパートナーシップを結んで、どういうところに実際に供給していけばいいかということ。どうすればもっと国民に認知してもらえるかだ。
　昨今、海外へ行って見ていると、以前よりもＮＨＫワールドを見られるようになっていると思うが、まだまだその地域住民にこれだけの良いコンテンツが行き届いてい

ないように思う。川上でコンテンツを作って流したら終わりではなく、それがどう届くかを、ＰＤＣＡ（Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善））の観点で確認をしてもらえればいいといつも思っている。

○　この基本計画（案）はとてもいいと思う。ただ一方で、日本ほど、海外の人々に受け止められているイメージと実態とが違う国は珍しい。特に中国、韓国が日本をどう見ているか。日本にいれば、本当にこんなに親切で、礼儀正しくて、真面目で、時間に正確で、こだわりがある国民はいないと思うが、全くそれとは違う受け止め方をされるところも海外では多い。

　例えばＢＢＣが以前行った調査では、ドイツが日本に対してよいイメージを持っていないという結果のこともあった。また、韓国がアメリカで反日キャンペーンを行っていたりもする。そういう状況にわれわれはどうやって対応していくのか。日本がどういうふうに世界から見られているかを知っておく必要があると思う。

○　編集方針に関してはとてもすばらしいと思う。いろいろ新しいことをやっていかなければならないのは大変だと思うが、ぜひ頑張っていただきたい。

　二点、伺いたいことがある。一つ目は「働き方改革」とは具体的にどういうことか。二つ目は、インターネットは今後ますますメディアとして大きく開かれていかなければならないところだと思うが、テレビとインターネットで、例えば放送法などで、コンテンツがどうしても違わざるを得ないといった、苦労する点がいろいろあるのではないかと思う。その点に関して少しコメントをいただければと思った。

○　部門別編成比率でいうと基本的には報道と情報番組が非常に多いと思うが、実はＮＨＫは私たちの印象では娯楽番組も大変強く、いいドラマをたくさん作っている。情報番組だけでなく、娯楽番組から日本人のイメージができていく部分がもちろんあるわけだ。ドラマ「おしん」もあったが、日本ではみんなイギリスのドラマ「ダウントン・アビー」を一生懸命に見ていたので、今後、少し娯楽番組も比率として考える余地がないのか。それを伺っておきたいと思う。

（ＮＨＫ側）　先ほどの未来に残すものについての質問があったが、そういうものをやる必要性はわれわれも感じていて、今いろいろな番組提案が上がって来ている中で議論をしている。

　どんな番組を放送したら、どういうふうに視聴者に見ていただけるのか、あるいはネットに掲載すればヒット数が分かるので、どれぐらい反響があるかも分かる。このニーズも踏まえながら進めていこうと思っている。

　長期戦略に関する質問があったが、われわれも必要性を感じている。

　それから各国別の対策も、われわれは北米とアジアを重点的にやることを掲げているが、経営資源が限られているので、今一度、どの国や地域を戦略的にやるのかを考えたいと思っている。

　また、ジェンダーの話もとても重要な問題であり、頂いたご意見を今後の番組に生かしていきたいと思っている。

（ＮＨＫ側）　働き方改革は、今、ＮＨＫが直面する最も重要な経営課題の一つと位置付けている。４年前に女性記者が亡くなり、過労死と認定された。それを受けて、われわれは今、働き方改革を積極的に推進している。国際放送局も働き方改革を推進する中で働く環境を整え、働く人の健康を第一に考え、そして働く職場の環境をさらに良くする取り組みを進めていきたいので、基本計画（案）に入れた。

○　これが、国内連携との関係でのポイントなのか。

（ＮＨＫ側）　働き方改革の文脈でいうと、効率的に番組のソフトを提供する点で、地方のパワーと東京のパワーを効率的に運用しながら、なおかつ地域の情報を世界に発信したり、あるいは地域が足りないところを東京が支援したりと助け合うことで、働き方についてもかなりパワーを軽減できるのではないか。そういうことを狙いながら連携していこうと考えている。

（ＮＨＫ側）　東京オリンピック・パラリンピックに向けたわれわれの取り組みだが、ＮＨＫ全体として 2020 年に向けて、単なるスポーツを伝えるだけではなく、文化・芸術という総合的な日本の情報発信の機会になると考えている。ロンドン・オリンピックでＢＢＣがまさにそうした役割を果たしたと言われている。ＮＨＫも 2020 年に向けて組織全体で取り組んでいきたい。

その中でジェンダーの問題、ダイバーシティ（多様な人材の活用）の問題、それから環境問題、持続可能性を追求する問題など、いま、世界が直面するさまざまな課題についてＮＨＫがどう考えているかを積極的に発信し、日本に対する海外の理解をさらに深めていきたいと考えている。

○　2020 年か、2025 年か、2030 年かわからないが、長期計画ではどんな感じで予算や全体の姿を見ておられるのか。

（ＮＨＫ側）　今策定しているのは来年度からの３か年計画で、2030 年を見越した長期ビジョンはまだない。ただ、新しい経営計画の中で目指すものは今書き込んでいる。ＮＨＫが目指すべきことを、３年間の経営計画に盛り込んでいる。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫワールドでは今年、ドラマを初めて編成した。今月、１１月はドラマ月間として４回シリーズのドラマ「Home Sweet Tokyo」を、ＮＨＫワールドのオリジナル番組として放送中だ。

それから佐賀放送局が制作したドラマ「ガタの国から」がある。その主人公に、人気のあるタイ人の青年俳優を立てたところ、非常に話題になった。こちらも１１月２６日に、英語版と合わせて、タイ語字幕も付けて放送する。

権利上の難しい問題もいろいろあるが、日本の娯楽性の高いものを理解

してもらう観点からも、ドラマはどんな効果があるかを検証したいと思う。
　それから、総合テレビで放送した「眩（くらら）~北斎の娘～」についても英語で放送した。

（ＮＨＫ側）　国際放送は多くの人に見てもらう努力が必要だと思うので多言語化を一つの大きな目標として取り組んでいきたい。ネットで展開するオンデマンドについては、字幕を付けて多言語化を図ることもやっていきたいと思っている。

○　先ほど委員の言ったことは、2030 年という数字にこだわるのではなくて、もっと一般論として長期的な視点を持つべきだということだと思う。それは３か年計画とは別に、少し長いものを目標値として持って、私どもの立場からいけば国際放送番組の予算も少し多めにだんだんなっていくように、目標値を定めるのがいいのではないだろうか。もちろん質の高さも大事だが、委員が言われたプラスとマイナスのこともあり、プラスが出るとマイナスができてしまうのはあまりよくないので、今あるものはできるだけ維持しつつ、それに上乗せしていくような形で、私たちはむしろＮＨＫの国際放送を後押ししたいという気持ちだ。

＜視聴番組「MIATARI Finders」
（ＮＨＫワールドＴＶ　１０月２８日（土）８:１０ ほか）について＞

○　今回は日本語の音声に英語字幕をつけている番組なので、ちょっと実験をしてみた。どういう実験かというと、日本語音声を消して英語字幕だけでストーリーを追っていった。途中で主人公が家に帰るシーンがあり、魚のコイに話しかけたり、あるいは奥さんの写真にごめんなさいと言ったりする。そのシーンがそれまでのストーリーとうまくつながらない印象を持った。しかし、次に日本語音声を聞きながら見直していくと、なんとなくつながってしまう。英語字幕だけを追っていくとロジックでストーリーを追うことになり、何か違和感を持つ。ところがなぜか日本語音声を聞くとロジック・プラス・アルファの要素が加わって、すんなり理解できてしまう。そういう問題があるのかなと感じた。
　全体の話としては非常におもしろかった。

○　とてもすばらしい番組だった。ミアタリというものを知らなかった。高い特殊能力を持った方々がいて、日本ではこういう捜査もしているのだと海外に発信する意味でも、非常に意義のある番組だったと思う。
　ナレーションなしの番組に英語字幕を付けていくのが、非常にうまくいっていたと思う。おそらく言っていることを全部字幕で表現してしまうと、大変見にくいものになったと思うが、字幕の量を適度に減らしつつ非常に見やすい形になっていたので、とてもよかった。
　１点だけ言うと、日本人が見るときには、まさに主人公の自宅での独白のようなと

ころがある種の見せ場になるのかもしれないが、海外に発信するときには、ちょっと違うのかもしれない。だから、発信する際には番組を視聴者のターゲットに合わせて少し編集し直すこともあり得るのかなと思った。

○　とても興味深く拝見した。番組として楽しかったが、スマホのアプリで見る人もいる番組だと思うので、字幕の内容はいいが、文字のサイズが小さいのでないかとかなり心配になった。日本語を理解しない視聴者は英語字幕と画像しか頼りになるものがない。極端に言ったら画像だけで理解できるような番組だったら、あの小ささの字幕でもいいと思う。

個人的な興味としては、海外にもこういうものがあるのかが知りたくなった。日本語の放送をそのまま、編集しないで字幕だけ付けたものだと理解している。その節約精神はすごく好きだが、同時に海外ではこういうミアタリみたいな仕事があるのかないのかを、それこそ字幕でいいので、ひと言説明してもらえると、さらに興味深かったと思う。

○　私も素直に感動した。私もミアタリを知らなかったのだが、「すごい！職人だな」とストンと感動した。これだけ厳しいというか無機質な仕事に向き合っていく人間性みたいなところが、家庭の場面でもホロリ、ホロリと出てくる構成のうまさに、引き込まれたのかなと思う。

同時に、よくわからなかった部分がある。警察手帳を返さなければならない引退の場面が、日本の場合は、ちょっと海外と違うような気がした。会社人生を送ってきた人にとって、退職すること、イコール、人生を失うぐらいの重さをあの中から感じた。そこに共感している男性も日本人にはすごく多いと思うが、「この感覚は、外国の人はわかるのかな？」と思った。番組自体はすてきだし、日本人はとてもわかるのだが、そこだけ、ちょっと教えていただきたいと思った。

○　とにかく素材がすさまじいものなので、この番組は大変感動的なものとして見た。こんなことはもちろん、日本人にしかできない。だからほかの国にあるわけがない。日本の職人は金型を作るときに手で触っただけで 100 分の１ミリまで指の感覚でわかるというが、あれと同じだ。

しかし、これは訓練によってここまで行くのかどうか。この人だけではなくてチームみんながこういう捜査をやっているわけだから、人間の属性として磨けばこういうものが出てくるのかなと。そういうことであれば、これは人間の能力の開発という意味で、結構、世界に通じる素材であるかもしれない。

英語字幕も感心した。「善人で生まれても、いろいろ人生の波にもまれるうちに」とこの主人公が述懐する。「人生の波にもまれる」に対する訳語が、“Life will throw you curveballs.”となっていて、いい訳を付けるなあ、と感心した。これはどこかＢＢＣとか、ほかのところの電波に乗せて、もっともっと見せられるのではないかなと思った。

非常に小さい点を指摘すると、担当の警部さんがいろいろな人の写真の目だけを提示されて、これは誰の目だ、誰の目だと当てていく場面がある。だがそのうちの一つだけわからない。あれは非常に大きなヤマ場の場面だが、リポーターが「それは私の

目です」と、つまらない抑揚で言っているうえ、それを訳した“It’s me.”という字幕も１秒ぐらいしか表示されないので、あそこはいったい何が起こったのかかがわからなかった。

○　私もこれを見て、本当におもしろくて非常にエキサイティングなことだと思った。ただ一方で、海外の方がこれをどのように見るのだろうかと思うと、例えば日本の犯罪捜査は全部職人芸なのか。科学捜査はやっていないのかとか、あるいは、そうか、日本は結構ごみごみしたところでこんなに犯罪が多いのかとか、ちょっと違ったメッセージが伝わるのではないかと、多少心配になった。

だから、冒頭に、例えばこれは職人芸と科学捜査とを併せてうまくやっているとか、犯罪の発生率は世界的にものすごく低いのだが、でもこういう職人芸もやっているのだと、もう少し説明があったほうが、海外の視聴者にはわかりやすいのかなと思った。

携帯などで見るときの字の大きさは気になったが、内容はおもしろかった。

○　ある側面では刑事ものの映画を見ているような気がした。それと同時に、アナログに徹底していること。いま、これだけ顔認証がトレンドになっている中で、あえてアナログで徹底的に努力をしていく姿。職人と言えるかどうかわからないが、そこのところが、日本的なメッセージとして外国人の方には伝わるのではないか。

感じたのはカメラマンの撮り方で、被写体に迫っていく感覚とか、ものすごくわかりやすくて人情味があったと思う。

英語字幕では、森本警部が「そうだ、そうだ」と自信をもってうなずいた場面に“Absolutely.”と表示されたが、これも外国人に意図がよく伝わったと思う。

やはり日本人の持つ、最初に言ったようなアナログ的なものが、結構日本にはたくさんあるので、こういうものを取り上げるといいのではないかと思った。

○　非常に楽しく拝見した。２５分は結構短いなと思った。

徹底的にアナログでやっている。いま、スマホも顔認証になる時代に、顔認証は導入していないのかとか、もっといろいろと知りたいところがたくさん出てきた。しかもアナログなあの写真は手作りか。ああいうものが支給されているのか。

（ＮＨＫ側）　指名手配犯の写真を集めた手帳みたいなものは各自の手作りだ。

○　そうだと思ったが、あれが警察から支給されているのか、手作りなのかとか、そういうディテールにもっと切り込むと、あの凄みがもっと伝わったのかなと思った。

あとは、ちょっと細かいことだが、最初、番組が始まったときにダイジェストで番組の主だった場面が提示される。そこに逮捕の瞬間を入れてしまっていいのかなとすごく思った。ああいうのが入らないと続けて見てもらえないのかもしれないが、最近、ネットで動画を見ていると、すごいスピードで動画を見るくせがついていて、あそこで逮捕の映像がパッと出た瞬間に、一瞬、興味を失った。何か、全部見終わったような気がしてしまうというか、ＮＨＫのドキュメンタリーだと、最初のところにパッパッパッパッと短い映像をつなぐことがあると思うが、ああいうものがネット世代の子

どもたちだと、逆に、もうわかった、というふうになってしまわないのかなと思ったりした。

しかし、もっともっと深掘りしてもらいたいなと思うぐらい、カメラワークもすばらしかったし、すごいクオリティーの番組だった。

英語のことは、そんなに細かいことはわからないが、犯人を見つけたときに、“Bingo！”と訳しているのはおもしろいと思った。こういうのが響くのかなと思った。

○　本当におもしろく見た。ありがとうございました。

２５分のかなり短い番組に二つのテーマがあったと思う。一つはミアタリという職業を伝えること。それはとてもプロフェッショナルで、無機的で冷たいところがある。もうひとつは、ハイ・プロフェッショナルな人でも定年があるというところ。人情に訴える有機的なところがあって、それが二大テーマとしてあったと思う。それが２５分にしてはちょっと盛りだくさんだったかなと思った。もう少し人情に傾かないところ、職業を伝える場面の割合が時間的にもう少し多いとよかったかなと、何となく思った。

視聴者として三点感じたことがある。一つ目は、大阪府警がバリバリの関西弁だったところ。日本人が聞いていてとてもおもしろく、引き込まれるところがあるのだが、あれがもし東京の警察の方だったらどうなのかなと感じた。

もう一つは、いま、かなり質の高い人たちは６５歳で定年退職させるのではなく、組織に長く置くようなシステムを作ろうとしているケースもある。ミアタリのような仕事は、本当に人に頼るところがある。そういうとてもプロフェッショナルな人たちを、本当に年齢で区切ってしまうことになんとなく理不尽さを感じて、その点はどうなのかと思った。

三点目は、逮捕される方が手を出すのがとてもおもしろかった。

○　また再放送されるのであれば、「ミアタリ」は、“Miatari literally means look and hit.”とか何とかやらないと、外国の視聴者の中にはミアタリという変な日本語がいつまでもわからないままになるので、ミアタリの意味を加えていただけたらと思った。

○　私は実は日本語の番組のときにもこれを大変おもしろく見た。今回は二回目の視聴だ。ナレーションがなくても、素材がすばらしいとこんなにおもしろいんだなと思って、二度も、三度も、全然退屈せずに見た。

細かいことだが、質問がある。誤認はあまりないのか。もしたまにはあるのだったら、そのこともちょっと入れるとよかったかなと思った。

番組としては大変いい番組だったと思うし、皆さんからも大体共通して非常に高い評価だったと思う。

（ＮＨＫ側）　この番組がなぜノーナレーションなのかというと、テレビの原点とも言える、わかりやすくなくてもいいから映像から伝わってくるもの、音声から伝わってくるものという、テレビの創成期のころにあったような映像の力や音声の力をもう一回、ちゃんとみんなにわかってもらうための番組を

作りたいという思いから、「ノーナレ」という番組が作られている。
　刑事の自宅のシーンだが、普通の番組だと家へ帰る歩きのシーンなどの映像があって、そして家の中に入ってという具合に、分かりやすさを優先して編集するが、あえてそこは、そういう説明的な映像がなくても視聴者は想像力で分かるのではないかと考えた。実験の意味も含めてこれまでの編集の方法とは違う形でやっている。
　この字幕の量で、海外の人にどこまでわかってもらえるのかだが、字幕については、総合テレビで作った日本語版の後に、翻訳スタッフともかなり議論をしながら作った。実際に海外の人が見たときにどう思ったかは、まだ直接聞けたわけではないので、そこのところはこれからの検討課題だ。映像も見てもらいながら伝わっていくものにできるかどうかは、試行錯誤していきたいと思っている。
　ミアタリという職業は、今のところ、われわれが調べた限りでは日本固有のもので、外国にはないようだ。このミアタリを番組にしようと思った一番大きなきっかけは、二つある。一つは、先ほどから委員の皆さんから「職人」という言葉が出たと思うが、日本の職人をいろいろ取材しているときに強く思うのは、それは日本人のよさだと思うのだが、例えば仏像を彫るときに彫る木の気持ちになれる。相手の気持ちに同化できる感性、想像力は、日本人には非常に優れたものがあるということだ。
　ミアタリの人も、「自分の中に呼び込んでまう」と言っていたが、あれは、相手の写真と対話しながら犯人の気持ちに同化していくことをあの人はずっとやっていて、その中で「今、お前は２０年も逃げてるんやけど、どこにおるんや」みたいなことを自分の中で想像して作っていく。対話の中から生み出していくことにおいて、極めて日本人的な感覚で行われる捜査だなと思った。
　海外の人からすると「何をやっているんだ？」と思うぐらいの、ある種、スピリチュアルなものに見えたかもしれないが、そういうところを日本人のよさとして、日本人文化として伝えることができたらと思って、国際放送番組の制作に取り組んだ。
　二つ目のテーマは、ＡＩ、まさに顔認証みたいなことが発達していく時代に、いろいろな番組の中で、果たしてＡＩにどれだけ人間の仕事が奪われるのかや、ＡＩが発達したらもう人間の仕事はないのかについては、番組を作っていても、常々テーマとして出てくることだ。ＡＩの開発研究者にもインタビューをしたが、映像に対して顔認証のＡＩが認識するのは、一対一では、精度において人間はコンピューターに全くかなわないが、群衆の中から直観的に見つけ出すことにおいては、ＡＩもまだ人間にはかなわない部分がかなりあると聞いている。それはなぜかというと、人間の脳が持っていることなのか、直感的な何かなのかは説明できないということだ。その説明できないところがまたおもしろいと思った。そういう意味では人間の本分、人間の可能性はＡＩが発達した中でもきっとあるのではないか。番組を作っていてそういう希望を持てる番組だったということが、

一つある。

○　それから定年というテーマもあったのか。６０歳か６５歳かわからないが、主人公は警察手帳を返還しなければならなくなる。それもミアタリというアナログ的なことと、ある警察官がずっとそれをやってきたが、一定の年齢になると定年になって辞めなければならない。非常に寂しい思いをして彼は辞めるのだが、そういう非常に日本的な一種の哀感みたいなものを伝えようとしたのか。

（NHK側）　大阪府警の中であの人は、ミスター・ミアタリと言われているような存在で、普通、ミアタリ捜査員は顔出しはできない。あれだけ顔が出ると、指名手配犯が見つけて、「あ、逃げろ」となってしまう。引退するから顔を出せた。

○　逮捕の瞬間が番組冒頭に出てくることについてはどうか。

（NHK側）　それは、まさに鋭い質問で、なかなか悩ましいところだ。すごく迷ったのだが、そういう逮捕の瞬間も見られる番組なのねと、見ている人に期待感を持って見てもらうことを考えてあのようにした。

今回の番組は、ノーナレーションでもあり、強い映像から先に並べていこうと考えて映像をつないでいった。

そういう意味で言うと、スマホで見るような若い人に見てもらうときに、あの逮捕映像で満足感を得て、その後はもう見てもらえないかもしれないことについては、確かにごもっともな指摘かと思う。今後、その辺りは考えていきたい。

平成２９年１０月国際放送番組審議会

平成２９年１０月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６４０回）は１７日（火）ＮＨＫ放送センターで９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「多言語コンテンツの多言語化への取り組み」について説明があり、意見交換を行った。続いて、視聴番組「Painting with Soul」について、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
副委員長	大西　　洋	（オフィス タイセイヨウ）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	鎌田由美子	（カルビー株式会社 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア代表）

（主な発言）

＜「ＮＨＫワールド 映像コンテンツの多言語化への取り組み」について
参考番組「Easy TRAVEL Japanese」（英語、中国語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語）
「つくってまもろう」（ベトナム語）＞

○　それぞれの国によって、さまざまな隠語があるし、文化的な背景も異なる。テレビを見る人はいろいろな人がいるので、そういう意味で、言葉のチェックをどういうレベルで行うかは気を付けたほうが良い。例えば、現地のテレビ局と連携し、言語監修を行ってもらうなど、そういう工夫も必要ではないかと感じた。

「つくってまもろう」のベトナム語版のネット動画は、見ていてとても楽しい番組だった。再生回数が多いのも納得できた。ただ、各番組は約３０秒と短いので、１回見ただけでは動画が紹介している物を自分では作れないと思う。再生回数が多かったのは、作りたいと思った人が何度も再生したのではないか。

韓国のホテルで、ＮＨＫワールドＴＶが見られると聞いて、さっそくチャンネルを回したところ、「Discovery Asia」になっていた。その「Discovery Asia」は、英語の番組に韓国語の字幕が付いていた。こういう多言語の展開が今後、可能なのかも検討したらどうかと思った。英語が得意でない韓国人でもその英語の番組を理解できるだろう。

ＮＨＫワールドＴＶの番組にはアメリカで非常に好評だったものがあるが、そういうものを、たとえばタイ語の字幕を付けてタイで放送する方向性もあると思った。

○　多言語化の対象になかったアラビア語はどうなのかを、まず伺いたい。またこの１つの映像コンテンツにどんどん違う言語を付けていくコンセプトはとてもいいと思ったが、それがどの国や地域でも通用するかどうかの検証をしているのかが、少し気になった。アラビア語圏用に最初から豚のイラストを使わないなど、そういう配慮はあるべきだと思う。元の画像、動画を作るときに、どの段階でそうした配慮をしているのか。もしそれがかなり早い段階から配慮しているのであれば、そのノウハウを積み上げていけば、財産になるのではないか。

「つくってまもろう」に関しては、とても興味深く、もっと活用したらいいと思う。

○　こうした多言語化の取り組みを、海外のメディアがどのように取り組んでいるかを研究しているか聞きたい。ＢＢＣやＣＮＮなどさまざまな国際メディアがあるが、知り得る範囲では、それほど多言語で展開していたのかと思うところがあり、そもそもＮＨＫワールドがどこまで多言語化に踏み込むべきなのかが、議論の対象なのかもしれないと思う。

つまり、パンドラの箱を開けたようなもので、結局、取り上げない言語があると、そこに不平等性も生まれる。国連の公用語に限る方針でもないようだが、どういった基準を設けて言語を選んでいるのか。とりわけ、多言語での展開となると、文化的背景などをチェックしていく方法をいかに担保するかがもう１つ非常に重要な課題になると思う。英語以外の言語にしたとき、思わぬ誤解を招くような表現があった場合、なぜそれを前面に出したのかと疑問を持たれる可能性をコンテンツそのものが持っている危険性を感じた。

そして字幕か吹き替えかの点で言えば、これはコンテンツそのものの属性によると思う。例えば、ニュースのような、より正確性が求められるものは字幕できちんと行ったほうがいいのではないか、という議論もあると思うので、問題提起しておきたい。

その上で、これだけＡＩやテクノロジーが進化しているので、自動翻訳に委ねて、あるいは言語が話されている現地に言語面でのサポート体制を設けて、そこと連携していく考え方もあるのではないか。

最後に言いたいのは、全体の労力の問題もあると思うが、予算はどこから来ているのかが重要だ。それがバランス上、非常に大きな負荷になっているのであれば、労力だけではなく、予算の配分も考えなければいけないことに発展するのではないかと思う。

○　多言語化をどういう基準でこれから進めていくのか、私も興味を持った。世界の話者人口でいえばスペイン語などの話者が多いが、むしろ多言語化はアジアに特化していくのか。

自動翻訳は私もときどきコンピューターで使ってみるが、まず使い物にならない。試験的に使うのはいいが、これは試験的であることをどこかでわかるようにしておかないと、まるで意味が支離滅裂な訳文ができるかもしれない。やはり最後は人間の目

でチェックすることがどうしても必要だと思う。自動翻訳はまだあと１０年くらいは使い物にならない気がする。簡単な文章ならいいが、特に人間の感情のひだを表すような表現などは、まだまだ自動翻訳には任せられないと個人的には思っている。

○　先ほどＢＢＣの話が出たが、３年ほど前にＢＢＣは、動画と字幕にシフトしたと聞いたことがある。字幕にして読ませるのか吹き替えにして聞かせるのか。吹き替えはとても重要だと思う。吹き替えのほうがＮＨＫワールドの若い対象者にはいいと思うが、そこは考えるべきキーポイントのような気がする。

それから、どの言語にするかだが、これをやり出したら、本当にきりがなく、どんどん広がっていってしまうので、現在行っているように、アジアとヨーロッパの言語からいろいろと試していくのがよいのではないか。

またＩＴは、われわれが想像できないくらい、今とても進歩しているので、従来型の自動翻訳とは別の次元のものがもしあるならば、今後そういうものを活用していく道はあるのではないか。

○　多言語化はこれからどんどん進めていくべきことだろうなと思っている。今回初めて知ったが、インドネシア語、タイ語、ベトナム語を選択したのは、ＮＨＫワールドのウェブサイトにアクセス数が多い国のリスト、そして訪日外国人の出身国・地域の順位リストに基づいているとのことだ。われわれは、英語以外の言語というとフランス語やドイツ語がつい思い浮かんでしまうが、いま実際にＮＨＫワールドや日本にアクセスしている人たちに、よりよくアクセスしてもらうためにはこういう多言語化の取り組みが必要だとわかり、なるほどと思った。おそらく今後の時代は多言語化をどんどん進めていくべき時代なのかなと思った。

多言語化をどう進めるべきなのかを考えたとき、字幕か吹き替えかの課題でいうと、字幕のほうがどんどん作れるのではないかと思う。作れるほうから進めていってもらいたい。吹き替えは視聴者には優しいが、伝えるべき日本文化が視聴者から遠のく可能性はあると思う。だから、もともと英語で作っていたものを多言語化しているが、もしかすると、最初に日本語で作って、それを多言語化する発想があったほうが、日本文化としての日本語を知らしめるためにはよりいいのかもしれないと思った。出演者に英語話者がキャスティングされているが、出演者を全部日本人にしたほうがふさわしいかもしれない。

自動翻訳に関して言えば、英語の自動翻訳ですらとても使えるものではないので、使うときは、それぞれのネイティブスピーカーの最終チェックはどうしても避けて通れないことだと思う。

動画「つくってまもろう」がとてもよかった理由は、視覚的にアピールするものなので、ベトナム語字幕が読めなくても動画が伝えようとする内容はすべて理解できる点だ。あのようなものがどんどんできるといいと思う。つまり、言語を介さなくても、日本から知恵を発信していけるもの。たとえば折り紙の折り方も一例だし、この「つくってまもろう」を１つのやり方として、どんどんこういう方向で進めていくといいと思った。

○　字幕か吹き替えかについては、やはり実際に見ている、あるいは聞いている人たちの意見を拾うことも大事だと思う。そういう意見を拾っているのかどうか、意見があまり寄せられていない場合は、ＮＨＫ側からどういうふうに意見の収集をしていくべきだと考えているのか聞かせてほしい。

ある国際会議で、日本のアニメのポスターを作ったところ、若い女の子だけを使ったために、まず性的偏見があるとアメリカ人が言ったという。また、アニメポスターのキャラクターの顔の２分の１が目である点を指摘された。この話に照らすと、今回の動画のイラストを見ても、男性は実態を反映していると思うが、ちょっと女性は違うなと思った。

「つくってまもろう」は、かなりコンパクトで、ビジュアル的にもきれいだ。色が抑えてあっていいと思った。だが、防災を想定したペットボトルの活用のくだりについて言えば、はたして空のペットボトルが身近にある視聴者が海外にどれくらいいるだろうか。それから実際、それでどれくらい守れるのか、少し疑問を持ったのも事実だ。

○　多言語化について大事な点が５つ出されたと思う。チェック機能はどうなっているのかが１点目。それから２点目は、言語をどのように選んでいくのか。３点目に外国の放送局はどういう多言語化を行っているのか。４点目に字幕か、吹き替えかという議論。５点目に自動翻訳についての議論があった。いまの時点でよく見る自動翻訳は少なくとも下訳であって、間違った翻訳をする可能性が非常にあるので、使う場合には、当然見直さなければならない。自動翻訳について、今後どうしていくのか。

（ＮＨＫ側）　どういう基準で多言語化を展開するかは、ＮＨＫワールドオンラインに対する各国からのアクセス数に準拠しながら考えている。また中国語と韓国語も近隣諸国という観点から入れてあり、現在、中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、スペイン語などを番組に応じて発信していくことを考えている。

たとえば「Wild Hokkaido！」という番組も中国語、韓国語でのビデオ・オン・デマンドを始めているが、これは北海道がアジアからの観光客の大きな目的地になっているので、そういう番組は多言語化していくなどニーズに応じて展開していきたいと考えている。

訪日外国人客が多くなっているが、その多くが非英語圏から来ているのが実情でもある。英語をベースにしながら、現実に合わせ、多言語で字幕あるいは吹き替えで展開できないかと考えている。

字幕か吹き替えかという話があったが、現在、ＮＨＫワールドＴＶでは、中南米の放送に対して、スペイン語の字幕を表示・非表示を切り替えられない状態で付与する、いわゆるオープン・キャプショニング事業を、ニュースを除く多くの番組で展開している。

一方で、アメリカでは、切り替え可能なクローズド・キャプショニング方式で英語字幕を入れている。

各国の衛星受信事業者が、クローズド・キャプショニングでの字幕付与

などの施策に対して、ニーズがあるのか、ないのかを、現在、アジア各国で調査しようと考えている。ニーズがあれば、個々の事業者に対して、個々の言語で字幕を付与していくことを考えるが、英語放送もまだ２４時間放送は１０年もたっていない中で、英語以外の言語でどこまで行うかの問題を考えていかなければならない。いずれにしろ、字幕を付与することについては、われわれも研究をしているところだ。

吹き替えに比べると基本的には字幕の方がはるかに生産性は上がる。来年３月までに 160 本ほどの多言語コンテンツを作る予定だが、来年度は 1,200 本作るような業務フローを検討中だ。多くは字幕の共通化によって、音声は一緒だが、字幕を選択することができるようにしていく。一方で、吹き替えに対するニーズもあるので、個別にうまく展開していきたいと思う。

自動翻訳については、おっしゃるとおりで、これをそのまま生放送に展開するのは、現在はまだ困難な状況だ。これはまさに下訳として作業を簡略化するために使い、最後は人間の手で推敲する。通常はひとりの人間が下訳して、それを別のネイティブスピーカーが推敲する作業なのだが、これをまず機械が下訳する形にして、できるだけ作業を簡略化したいと思っている。

ＡＩ、自動翻訳は、現在、ＮＨＫ放送技術研究所のヒューマンインターフェース部が研究しており、特に英語と親和性が高いスペイン語、そして日本語からの翻訳精度が高い韓国語などを意識しながら研究を進め、できるだけ下訳の面で活用するよう展開していきたい。

（ＮＨＫ側）　補足すると、先ほどの多言語化について、ほかの放送局、たとえばＢＢＣでは、日本での放送で一部、日本語の字幕を付けてサービスしているものもある。またフランスの放送局では、英語、アラビア語、フランス語の３チャンネルで２４時間、サービスを展開している。また、「ロシア・トゥデイ」というロシアのグローバルチャンネルは英語、スペイン語、アラビア語でサービスを行っている。ＮＨＫが今の英語放送と同じように、同時に複数の言語によるチャンネルを設けるような道をとるには、人とお金が相当かかるので、まずその手前の段階で番組を選んで多言語化をして、それをどれだけ見てもらえるのかを、まず見ていこうと始めたところだ。

先ほど委員からアニメの描写の誇張に関して、男性と女性で目の大きさが違うという指摘があった。正直、多言語化はまだ始めたばかりで、これがどの国の人にどういうふうに見えるかまでは、正確にフォローできていない。これからそういう観点も含めて、ただ、元のアニメを作る制作者の思いもあるので、そのかたの意向もくみながら考えていかなければいけないと思っている。

また、そもそも日本語から多言語化したらいいのではないかと指摘があった。私もそのとおりの部分があると思っている。例えばフランス人などに聞くと、英国と戦ってきた歴史が長いので、英語では聞きたくない、日

本語の音声で流して、フランス語の字幕を付けてくれればいいという声も、直接聞いたことがある。この可能性もこれからの道のりだと思う。だが、ＮＨＫとして世界に出せる作品をまずは英語から共通化して、しかも人気ある作品を厳選してそこから進めてみようというのが、第一歩だ。

チェック機能の問題については、通訳や最初のリライターなどと２、３回、やり取りをしている中で、タイ人、ベトナム人などネイティブスピーカーも入ってチェックをしている。

もちろんわれわれがいま英語で出しているものも、世界に向けて出しているものだから、作り手は必ずいろいろなものに配慮しながら制作しているし、編集もしているのだが、これが個々の言語に変えたときに、それぞれの地域の視聴者にどう受け止められているかまで考慮して行っているかと言われると、まだ始めたばかりで発展途上だ。まず英語で出すことを前提に番組を作っているが、多言語化していく番組については、制作担当者に徹底させながら考えていこうと思っている。

○　自動翻訳をすぐにやりましょうというつもりで言ったのではなく、今後使っていくことを目指さないと、多言語化は手間がかかって大変なのではないかということだ。自動翻訳の研究が行われているということだったが、例えば３年後を目指すなど、期限を決めて開発を進める方向を探ってもらえないかと思っている。

（ＮＨＫ側）　ホームページについては、自動翻訳を来年度から導入し、多言語化を行っていく。ただ、放送と同時にライブで自動翻訳していくのは、一番難しいところだ。

○　今の説明は非常にわかりやすかったが、もう一度確認したいことは、多言語化を、サイトへのアクセス数や訪日外国人客のデータを論拠にする部分があるとすると、やはり日本にいらっしゃるお客さま、オンラインにアクセスする方々がターゲットということになる。だが、そもそも国際放送の目指すことは日本に来る旅行者のためのサービスだったかどうかが、論点になるのかなと思った。

ＢＢＣは、イギリスやロンドンにお客さんとしていらっしゃる方、あるいは関心を持っている方に関して言語対応をしているのではないような気もする。ニュースなどを海外に放送していく場合に、より多くの人たちに向けて日本の情報を多言語で発信するのであれば、まずたくさんの方が話している言語に注力することになるのではないかと思う。多言語化の最終的な目的を聞きたい。

（ＮＨＫ側）　いろいろ指摘を頂きありがたい。多言語化は、国際放送局として取り組まなければならない課題である。放送法に定められた国際放送は、外国人向けの国際放送であり、英語放送に限っているわけではない。英語だけではなく、ほかの言語でも放送すること、多言語化への取り組みをわれわれは求められていると言えなくもない。ただ、英語以外の言語を放送で使っていくのは、非常に労力と予算がかかるので、とりあえず、ビデオ・オン・

デマンドの中で見ていただけるものに字幕をつけていくのが予算的にも、そして労力、時間からいっても、実現可能性が一番高いので、取り組んでみようということだ。

委員の皆さんから意見を聞いたり、実際に利用されている方々からいろいろな意見を聞いたりして、試行錯誤しながら、多言語化への道を少しずつ進めていきたい。吹き替えはもちろん便利かもしれないが、やはり字幕のほうが費用的にも労力や時間的にも負担がかからないので、まずは始めたところだ。

インバウンドで 2020 年に 4,000 万人もの外国人が来ることが期待されることは、日本にとって非常に大きなチャンスでもあるので、日本に来ていただける方から、ＮＨＫワールドを知ってもらって、世界に広めてもらうような１つの機会として、2020 年を捉えている。日本に来る外国人向けだけに行っていくのではなくて、むしろそういうチャンスを 2020 年に見出しているということだ。

＜視聴番組「Painting with Soul」
（ＮＨＫワールドＴＶ　１０月７日（土）８:１０ ほか）について＞

○　添付されていた番組に関する資料を読まずに番組を見たがそれがよかった。なぜなら、このプログラムで２つの意外性を発見することができたからだ。一つ目は見始めた当初、“ヤンキーなペンキ屋さん”の話かと思っていたら、いきなり途中で杉原千畝の話が出てくる。「ええっ、こんなつながりがあるのか」という驚き。そうして二つ目は、見続けていくと、主人公が在日韓国人で、昔は暴れていたという。それもまた大きな意外性だ。そういう意外性を発見することがあって、ずいぶん楽しむことができた。

そのほかにもメッセージとして、立派な人しか人を救いたいと思っているわけではない。学歴がなくても、職歴がどうであっても、人を救いたいと思っている。そのために自分はいるんだという非常に強いメッセージが出ていて、ここは一番感動したところだ。というのは、最貧国の１つのネパール、紛争下のガザ、あるいは東南アジアの貧しいラオスなど、そういう国や地域が、日本が災害に遭ったときには温かいメッセージを熱心にくれたり、募金したりして、助けようとしてくれる。それに通じるものをこの番組から読み取り感銘を受けた。

○　ペンキ職人の方の出自の話が出てきたので、とても深くいい番組になったと思う。その話が出てくるまでは最後まで見られるかなという気持ちで見ていたが、そこから話が深まったので、もう少し掘り下げてもよかったのではないかと思う。しかし、この番組は日本の中にも民族差別があることを知ることができる。その人たちがこの杉原千畝と結びついていることが非常によいメッセージになった。視聴番組で見られてありがたい。

○　非常に感動した。杉原大使やリトアニアとのつながりを表現した作品として興味深く見られたが、この題材をどのように見つけて、どのように取材を組んでいったのかを、興味深いからこそ聞きたいと思った。

作品としての完成度は非常に高いと思うが、あえて言えば、彼らだけで事をなし得たように見えてしまっている番組に見えたのは自分だけなのか。つまり、彼らのこの活動をリトアニアに持っていった、あるいは協力した、という黒子に徹したいろいろな団体を番組の中で見落としているのかもしれないが、そういった協力体制がないと、おそらく彼らだけであそこまで行って、全部成し遂げることができたのかどうか。全体像をなんらかの形で知る方法がなかったのかと思った。

そして主人公の出自の部分、在日韓国人であることが、あの分量であのような説明で、議論の的となっている歴史的部分も含めて、世界の人がどれだけ理解できるのか。あるいはユダヤ人のホロコーストと関連して在日韓国人の話がポンと番組の中でつなげられたときに、どういうふうに世界の視聴者に伝わるのか、そこは若干疑問に思った。

○　いろいろな形のボランティアがあることを日本の人たちも違う目で見られる番組であったと思う。一貫して感じたのはペンキ職人の方々の意志の強さだ。自分たちに学歴も職歴もなくても、それでも結果を出していけるという、この強さが言葉にしなくても番組全体から伝わってきた。非常にいい番組だった。

その一方で、日本は単一民族の国というイメージが世界にはある中で、こういった在日韓国人の話が、短い時間で、英語で聞いている人たちにどこまでわかるのかは疑問に思った。

また、リトアニアの人たちとの交流場面が少しあったが、杉原千畝さんのこのミュージアムが生まれ変わることを地域の人たちがどのくらい喜んだかについてはあまり触れられていなかったように思う。

またペンキ塗りにロールが使えなくて、ハケで塗ったがゆえに、余計仕事が大変になった一方で、最後に連帯感を生むことにもつながっていたようにも思うが、なぜロールを使えなかったのかの説明がなくて、ちょっと唐突感があったり、なんとなく中身的には違和感を覚えたりするところがあった。だが、感動を与える非常によい番組だった。

○　委員の皆さんも大変絶賛していて、私も非常に良い話だと思ったが、すでに良いところは言われているので、あえて引っかかったところだけ申し上げる。

現地とのコミュニケーションがどの程度、とれていたのか。たとえば、そもそもリトアニアのボロボロの記念館を直そうと現地に向かったが、実際に行ったら、これは歴史的建築物だから、勝手なことをするな、上だけを塗ればいい、と言われてしまった。そこのところで、現地リトアニアがどういう形で日本のボランティアを受け入れてくれて、そして、日本側のしたことがどれほど感謝されたのかが、少しわかりづらかった。主人公が、初めは「なんだ、こんなの目をつぶっていてもできるよ」というふうなことを言っていたが、結局ローラーを使ってはいけないとなったときに、彼自身がたばこを吸って、「俺もイライラしているんだ」と言っていた。現地とのコミュニ

ケーションができないことのフラストレーションが伝わってきてしまう。
　言葉の壁があってペンキ職人の人々と現地の若者たちとの話が全然かみ合わなかったところも、コミュニケーションギャップを強調してしまったような感じがした。せっかく一生懸命日本側が熱意をもって取り組んだのに、リトアニアがどういう形でそれを受け入れてくれたのか、なぜこんなにコミュニケーションギャップがあり、伝わらないのだろうという思いがちょっと残ってしまった。でも、これは敢えて言うことなので、とてもいい番組であることには間違いない。

○　率直に言って驚いた。とてもいい番組だ。今回のように、いい番組だからもう１回見たいと思ったのは初めてだ。登場人物がいい。それで、在日韓国人だというバックグラウンドと結びつけられたのもよかったし、もちろん杉原千畝もよかった。
　敢えて要望を出すと、杉原千畝は、ユダヤ人コミュニティーの間では有名だが、それ以外の世界では知っている人は少ない。オスカー・シンドラーのほうがもちろん有名だ。ところがオスカー・シンドラーが救ったのは1,100人くらいで、杉原さんはビザの数だけでも2,400ほど。それは番組の中であまり解説されていない。杉原さんの息子さんが演説の中で言っているだけだが、ビザは一家族に一枚だから救われた人は膨大な数だ。
　もう少し言うと、あのペンキ職人のメンバーたちをすばらしい日本人として世界に投影するだけではなくて、世界に知られていない偉大なことを成し遂げたこの杉原千畝を知ってもらう非常によい機会だったので、もう少しそこのところの解説を、あと３０秒でも加えてほしいと思った。
　１点だけ、批判したいのは、暴走族を「ギャング」と訳しているところだ。若気の至りで暴走族だった人間をギャングと言うことによって、まるで犯罪者集団の構成組織みたいな、そんな感じを与えてしまうのは、非常に残念だった。モーターサイクル・アウトローズとか、そういう訳ではないか。その点を見逃してしまったのは残念だったが、感動的な番組だった。

○　すばらしい番組をありがとう。こういうボランティア団体があることを知らなかったので勉強になった。感想だけ言うと、２８分と短い時間なので、主人公たちは新聞を見て、こんなすばらしい記念館が今朽ちている、それを直しに行こうと、飛び立って、すぐ何でもできたという印象を与えてしまったところもあるのかなと少し懸念したのも事実だ。たぶんこの活動の裏には、いろいろな交渉もあっただろうし、たとえば、私たちがどこかの国へ行って、建物の状況がひどいからペンキを塗れるかというと、もちろんできないことなので、そういった背景もどこかに組み込まれているとよかった。
　個人的な興味だが、こういう団体を維持していくことの苦労がいろいろあるかと思う。そこにも興味を持ったので、またどこかで知ることができると良いと思う。
　１つ気になったのは、ペンキを塗るときにマスクもせず、自分たちを防護する手立てをしていないのは、ちょっと驚いた。塗る手が痛い、体が痛い、皮膚が痛いという話が出てきて、あれが事実なのだろうとは思ったが、それも視聴者としての感想だ。

○　本当にとても良い作品だったと思う。振り返ってみて、なぜよかったのかを考えると理由が３つある。

一つ目の理由は登場人物の顔の表情だ。大きなミッションをやり遂げたときの顔つきや、最後に涙を流す男の人たちの表情、それから現地の人たちの、要所要所で紹介される優しさが良かったのではないか。

二つ目は、言葉の数々にパンチがあった。特にリーダーの池田さんの心の中に、人種差別的な辛い思いをしながら必死に生きてきた事実があって、それが言葉に出ているので、とてもパンチを感じた。

最後に三つ目の理由は、これは情緒的なことになるのだが、番組を通してみると、優しいまなざしであったり、ほほえみで話し合ったり、温かい言葉でやり取りしたり、自分の体を使って人のためにとにかく何かをするんだとか、思いやりというと当たり前だが、これは仏さまの教えに近いものがあり、日本人として見ていてよかった。

１つだけ付け加えると、番組に出てこない大変なことがもっとたくさんあって、ペンキ塗りにロールが使えないということ以上に、ものすごく大変なことがあったのだろうが、それがもう少し提示されているとよかった。

○　リトアニアに行った方は全部で何人くらいか。最終的にハケで塗った方は１０人だったと紹介されていたが。

（NHK側）　リトアニアに行ったのは家族なども含めて６０人で、そのうちペンキ職人は４０人ほど。その中から最終的にメンバーをえりすぐって１０人が塗った。

○　こういうボランティア活動をするのはすばらしいことだと思った。特に今回、落ちこぼれだった人たちがこういうふうに大きなことに取り組む。そして、あの１枚の表彰状をもらってあんなに喜ぶ姿に、これはすごいなと感じた。

ただ、よくわからない点は、４０人のペンキ職人が行ったが、結局、ハケを使わなければいけなくなったので、１０人だけ選ばれて、その方がずっと作業をやり続けた。残りの３０人は相当不満があっただろう。リーダーの池田さんは選ぶのが大変だったし、選ばれなかった人も高いお金を出して、自分で行っていたのだから、選ばれなかったことに対して、どんな思いを抱いたのだろう。「お前、わかってくれよ」と言ったというような人間ドラマがないのかなと感じた。３０対１０のところが、自分が３０だったらどんな気持ちがするだろうかと思った。また、せっかくお金出してやってきた人の中から１０人だけを選んで、「お前たちだけだよ」と言い渡した時の池田さんの苦悩が出ているとよかったと思った。

もう１つわからなかったのは、こういうときは現地の日本大使館がいろいろなサポートをするのではないか。最後は慰労会も開催するだろうし、その間に通訳などもするだろう。どのような関わりがあったのか伺いたい。

（NHK側）　まず題材をどう見つけたかだが、はじまりは小さな新聞の記事だった。今年の４月ごろに新聞記事でこういう人たちがリトアニアに行くと読み、

ディレクターがこれを取材したいと言ったところからスタートした。
　これは職人たちだけでなし得たのかという質問だが、実際には、例えばペンキやハケは、彼らの活動に賛同している塗料会社や資材会社の仲間が寄付をしている。ハケでしか塗れないペンキもその人たちが調達したものだ。
　当初は記念館全体を彼らが修復する計画で始まった。屋根の傷みが一番ひどかった。ただ、彼らはペンキ職人なので屋根の修理まではできないので、クラウドファンディングで300万円の寄付を集め、それでまず屋根を直した。もちろん彼らだけの力で行ったものではない。そこまでは番組の中で説明しきれなかった。
　在日韓国人が日本でどういう立場に置かれているかを、どう伝えればいいかと、私たちも非常に考えたところだが、考えても考えても、在日韓国人たちはこれこれこういう理由で差別を受けてきたということがなかなか短時間ではうまく説明しきれなくて、最終的には池田さん自身のインタビューの言葉で説明するにとどめた。そこは確かにわかりにくかったかと思う。少し力の及ばなかったところかと考えている。
　現地の人々とどのくらいコミュニケーションがとれていたのかという点だが、池田さんは１年ほど前に１人でリトアニアの杉原財団の人たちのところに出向いて、ぜひボランティアでペンキ塗りをさせてほしいと頼んだ。杉原財団は日本との関わりのあるところなので、日本語の堪能な人が一人いて、その人を窓口としてずっと交渉してきた。
　ただ、やはり最初は、本当に飛行機代も自己負担で、ペンキ代も仲間うちで負担してくれるのか、怪しい人たちなのではないかと、なかなか信用されなかったようで、そうこうしているうちに、これは文化遺産だからと文化庁が絡んできたり、どのペンキを使うのかについても、彼らも何度も尋ねても、なかなかはっきりしなかったりして、結局は現地に行ってから、実状が分かった次第だ。
　また私たち取材者も、どのような行程で、何をするのかを取材のためにも事前に知りたかったので、リトアニア大使館とか、杉原財団に直接、池田さんとは別ルートで何度も確認をしたのだが、お国柄というか、なかなかはっきりした答えが得られないので、もう行くしかないと、ペンキ屋さんたちとともにわれわれも現地に行った。
　職人の人たちと現地の人々とのコミュニケーションがうまくいかなかった点については、われわれが海外で仕事をするときも、いつもそういうことは付き物なので、そこをどうやって乗り越えていくかが、むしろ番組としては描きたかったところではあった。
　それから、「ギャング」という言葉についてだが、これはネイティブスピーカーのリライターと相談して、短い字幕だったので、短い時間で理解してもらえる言葉ということで、暴走族については「バイクギャング」という言葉を使った。それと「ギャングメンバー」と言っている人たちもいるが、あの人は暴走族ではなくて、暴力団の準構成員だった人で、実際に

ギャングだったということだ。

　それから、ペンキ塗りに選ばれなかった残りの３０人の人たちだが、このリトアニアプロジェクトは記念館だけではなく、周辺の学校や体育館などの施設の塗装も行うことになっていた。だから、残りの人たちはそういう建物の修復、ペンキ塗りの作業に当たった。ただ、せっかく行ったのだから、最後には全員が少しだけは杉原千畝の建物にペンキを塗った。

　また、このプロジェクトは当初から大使館も関わっていたが、ペンキ塗りという技術的なことなどがいろいろあるので、最終的には杉原記念館の人たちとペンキ屋さんとのやり取りに任されていた。大使館は支援していたがプロジェクトを仕切ったということはない。

○　大変立派な仕事をしたプロデューサーに申し訳ないが、ネイティブスピーカーだからといってギャングという言葉をそのまま鵜のみしたのはいただけない。これは明らかにニュアンスが違う。そのネイティブスピーカーは日本の暴走族カルチャーのことをよく知らないのだろう。ギャングと言われれば、完全な無法者、もっとひどい組織的な暴力団のことだ。だから、それは「アウトロー」という言葉にすべきだったと私は信じている。厳しい言い方になるが、ネイティブスピーカーの語学力と文化の理解力は、やはり制作者側がきちんと見分けるべきだと思う。

平成２９年９月国際放送番組審議会

平成２９年９月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６３９回）は１９日（火）ＮＨＫ放送センターで９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS －OUR LIVES IN FUKUSHIMA」、「Rescuing the Lost Battalion － The Story Behind the “Heroes”－」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
委　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　員	鎌田由美子	（カルビー株式会社 上級執行役員、事業開発本部本部長）
委　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　員	小林　栄三	（伊藤忠商事㈱　会長）
委　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア代表）

（主な発言）

＜視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS －OUR LIVES IN FUKUSHIMA」（ＮＨＫワールドＴＶ　８月５日（土）８：１０ほか）について＞

○　大変すばらしい番組だ。福島の復興に対する人々の思いを描こうとする気持ちが伝わって来た。どのような思いで皆が取り組んでいるのかが分かり、主観的に報じているところが良かった。しかし、同時に主観的な部分が中心になったために、もう少し客観的なフォローアップもできると良かったのではないかと思った。

イギリス人英語教師のアンソニー・バラードさんがクローズアップされていたが、子どもたちのほうに焦点が当たっていたため、アンソニーさんが今復興にどう関わろうとしているのかが見えなかった。そこは少し残念に思ったが、非常によい番組だと感じた。

○　記録を残す意味でも、こうしたテーマを番組にして残すことはとても重要だ。福島第一原発の除染作業をする人たちが２０キロ離れた町に寝泊まりをして、現地へ行って仕事をするところを描いていたが、現地の状況のおどろおどろしさが伝わった。

だが、少し意外に思ったのは、線量計の話が初めの１５分ほど全く出て来ないとこ

ろだ。放射線の恐ろしさはまさにそういう自分を守るための線量計を身に着けて毎日見ていくことにある。それがなかなか出て来なかったことが意外だった。釜石などのように大きな津波で被害を受けた地域と放射線の影響を受けた地域とを同じに見てしまう視聴者がいるのではないか。それではもったいない。チェルノブイリと同じようなことが起こってしまったことが番組の中でもう少し描かれていると、さらにすばらしかったのではないか。

○　被災地のことを忘れず、現状を伝えるという意味で、大変すばらしい番組だと思った。６年たって現状はまだこうだと伝えていくのは、意味がある。
　もう少しメッセージなりテーマなりがはっきりしても良かったのではないかと思ったものの、ぜひ、これからもこういう番組を続けていってほしい。

○　このテーマを取り上げてくれたことに大変感謝したい。
　タイトルに「OUR LIVES」とあるが、どんなLIVESなのかについて、キャスターの主観的な意見が出ていたらもっと良かったのではないか。
　番組の最後に全員のメッセージが出てきた。あれは、この番組全体をまとめる非常にいいメッセージだと思って見ていた。ただ、その中に番組の最初のほうで１０分ほどかけて取材していた原子力発電所の労働者のメッセージが入っていなかった。となると、「あの１０分はなんだったのかな？」と感じた。非常に力を入れてあの労働者を取り上げたと思うので、彼らの声も入っていたらもっとまとまりがついたのではないか。
　それから現地に暮らすアンソニーさんの話があったが、英国に暮らす彼の家族の話も非常によく連携して描かれていた。そこはやはりＮＨＫならではの強みなのだろう。逆にこういう人が例えばＢＢＣなどで取り上げられないものなのか。海外のメディアでも彼のような人が取り上げられるような働きかけを、もしＮＨＫができれば、それはまたおもしろい展開ではないか。

○　私も非常にいい番組だったと思う。特に、全国から集まった作業員の立場、地元で頑張る旅館の人の立場、外国人英語教師の立場などが非常にうまく組み合わせられていた。ただ、見ていて全体にちょっと忙しかった感じがある。彼らに一貫していたのは、故郷に帰りたい、故郷を復興したい、そして自分たちの経験を忘れないでほしい、ということ。それが痛切に受け止められた。
　ぜひお願いしたいのは、復興の進捗（しんちょく）状況をきちんとどこかで示すこと。震災から６年たって、われわれはどういう状況にあるのかをわかりやすく示してくれれば、地元の人や視聴者を鼓舞することになる。
　また、引き続き定期的にきちっと追加取材をして放送することが非常に大事だ。

○　とてもいい番組だった。すばらしい。ただ、除染作業の進展具合は、今はどういう状況なのか。われわれ日本人の間では大体わかっているようなことも、海外の視聴者には初歩的な情報・知識もない。除染作業について、非常に長くかかると番組内では報じていたが、もう少し詳しく丁寧に述べるとよかった。

番組の最初に出てくる作業員たちの情熱に圧倒された。だが、彼らは何のための作業員で、どういう作業に従事しているのかがわからない。彼らの仕事にからめて、どこまで仕事が進んでいるのかを言うことは可能だったはずだ。

アンソニーさんのような人はまだほかにも被災地にたくさんいる。そういう人たちをまとめた番組を制作して海外に売り込むとか、彼らの目を通した日本社会の実相が伝えられるようになったらいい。

○　非常に共感を呼ぶ番組だった。ともすれば年数がたって忘れられがちな日常がよく描かれていた。アンソニーさんの視点も出てきたのは、構成上メリハリがあって良かった。

その一方で、ちょっと盛り込みすぎた印象がある。農産物の話も少し出てきたが、これだけ除染など未解決の問題が多い中で、農産物についてまで触れる必要が本当にあったのか。個人的には少し疑問だ。

○　私も大変興味深く見た。とりわけ作業員が大人用のおむつを着けていなければいけなかった点など、実際に取材をしないとわからない現場の声が切り取られていたことは重要だ。これまでは地上波の番組制作チームと連携した番組が多かったと思うが、今回はＮＨＫワールドの取材班が独自取材した番組とのことで、非常に興味深い。

独自取材する中で限界を感じることがあったかを制作者に聞きたい。また、こういったテーマではさまざまなアプローチがあると思うが、今回は外国の視聴者に何を伝えたいのだろうか。私たちはどうしても日本人の視点で考えがちだが、外国の視聴者はこれを見終わった後に、やっぱり日本はまだ危険だ、福島は大変だ、除染はなかなか立ち行かないのだな、と考えるだろう。冒頭のチェルノブイリとの比較も含めて、外国の視聴者にどういうメッセージをどういう風に伝えたかったのか、何に重きを置きたかったのかについて知りたい。

また政府や復興庁、東京電力との間でどういう連携があるのかなど客観的な情報が、あまり盛り込まれていなかったような気がする。

そして、作業員の悲哀にフォーカスしたいのか、被災者が抱えている現状を伝えたいのか、そこに寄り添う外国籍の人の生き方、生き様を伝えたいのか。いろいろなことが盛り込まれていたが、海外の視聴者は、もう少し客観的な情報、除染の状況や廃炉へのプロセスといった情報も欲しかったのではないか。ジャーナリスティックな視点で客観的に盛り込むことが必要だったのではないか。

○　私も「忘れないでほしい」という現地の人々の思いが非常に大事だと思う。東京オリンピックの話題などで震災のことがどんどん流されていくことに人々が不安を感じている。だからこういう番組を定期的に制作するのはとても大事だ。大変いい番組を放送してくれたと思う。

詰め込み過ぎだとの指摘があったが、私は意見が異なり、実によくできていると感じた。日本人、外国人、男、女、高齢者、若い人、労働者、などを全部うまく盛り込み、パズルのようによくできていた。人間性がよく出ていた。イギリスにいるアンソニーさんのお母さんが心配していることなどを取り上げていて、なかなかよくできて

いた。除染の現状や復興の進捗具合なども大事だが、同時に昔の映像、震災から３か月とか半年が経過した時点と比べるとどんなに変わってきたかが少し見えるといいと感じた。

この番組には２つの見えないメッセージがあるのではないか。日本人はかなり精度が高くワーカホリックの人たちが多くて、そういう人たちが除染作業をきちっとやっているところを見せながら、作業の後は皆で酒を飲んでワイワイやっているところも見せて、非常に人間味がある感じが出ていた。それが１つ目のメッセージだったのかもしれない。

もう１つは、農産物で食の安全に非常に気を遣っている点。ＥＵの放射線量の基準値のさらに１０分の１程度の低い数値を目指して日本人は取り組んでいることが隠れたメッセージで、だから日本は徐々に安全になってきていますよと伝わるのであれば、これはいいことではないか。

（ＮＨＫ側）　貴重な意見をいただきありがたい。私たち制作者側も現地の復興の進捗状況などのファクトを報じる部分と、人の感情やその人の人生に焦点を当てる部分とのバランスについて悩んだ。だが、ファクトの部分に向かうとそればかりがどうしても強調されてしまうのではないか。つまりいろいろ説明する事柄が多くなり、視聴者はお勉強をさせられる感じになってしまう。今回はそれを避ける道をとることに落ち着いた。

農産物の状況などを番組の間に盛り込みながら、今福島に住んでいる人、つまりは福島県民の人、外から来ている人、外国籍の人、若い子、いろいろな立場の人たちの生活で起こっている事実のフォローアップを心がけて描いてみようと考えて、今回の番組を制作した。人々の生活を見てもらうのだから、タイトルにも「OUR LIVES」に決めた。

６年たった今、現実にこうした生活があることを見せるため、複数の視点を取り上げた。

最後のまとめの部分では、取材相手それぞれのフォローアップだけではなく、最終的に本人たちが希望を持ってどうやってこの先へ進もうとしているかを描こうと考えた。広野町のオーガニックコットンの話が最後だけ出てくるが、このことを深く描くべきか、もしくは最後の希望という形のみで描くかを悩んだ。最終的には、今回は細かいことは描かずに、希望の部分だけに特化して描くことに決めた。

子どもたちがバラを育てているとか、今暮らしている人たちが何か１つ希望を持っているとすればどういうところなのかを、あえてナレーションを付けずにテロップ処理だけで最後に説明したが、あれが、私たちが最終的に選んだ描き方だ。

海外の視聴者が日本の現状を見るにあたって、自分たちの生活と何かしらつながりを持ちやすい視点が入っている方がいいのではないかと思った。私たちはこの前に１つ、震災以降の復興を取り上げた番組を作っていて、その中でも外国人の目線を入れてみたところ、そういうところにつながりを持ちやすいと感じる海外の視聴者がいた前例がある。今回もそうい

う人がいればと思ってアンソニーさんを取り上げた。彼とは取材している中で偶然出会った。しかも彼はイギリスに戻らずにずっと双葉に残る選択をしていた。私たちはそこに素直に寄り添う形で取材した。

私たちの方から彼にこうしてほしいとお願いすることはほとんどなく、番組には彼の思いが全面的に出ている。

（NHK側）　先ほどご指摘のあった取材者としての限界についてお答えしたい。東京から出かけて行って福島の人の中に入り込んで話を聞くこと自体に限界があったといえるかもしれない。もともと福島から電力を受ける側だった東京在住のわれわれが、事故後に福島に行って、その事故で現に苦しんでいる人たちに何を聞くのだろうということは、番組の取材者全員が悩んだところだ。

もう１つの限界は、東北の皆さんは比較的口が重いところ。福島の人は非常に我慢強くて、最後のあの女の子が「もうしかたないことだから」と言っていたが、そんな風に耐えて、どんな苦しみがあるのかをあまり言葉にしない傾向がある。現地の皆さんと関係を築いて、語ってもらうように取材者全員かなり頑張ったが、やはりどこかに限界があると感じた。これは長く定期的につき合っていくよりほかにない。これからずっと足を運んで言葉を交わしていくよりほかにないだろう。

廃炉のプロセスだとか、新たなロボットが入ったことだとか、凍土壁が今はこんな風になっていることなどは日々のニュースで取り上げているが、現地では実際にどういう人たちがどういう思いで取り組んでいるのかについて日々のニュースでは全くといってよいほど取り上げられない。そこにフォーカスを当ててみたいという思いが、出発点にあった。冒頭の作業員の人が居酒屋に行って見せる顔は、担当ディレクターの思いがこもった映像だ。

○　アンソニーさんとの出会いは偶然だったそうだが、高校生が自分の家に帰るシーンで、近所の人と会うのも偶然だった気がする。そういう偶然がとてもリアルなものとして伝わって来た。今後も、そういう偶然性を価値あるものとして描けるといいのではないか。

＜視聴番組「Rescuing the Lost Battalion － The Story Behind the “Heroes”－」（NHKワールドＴＶ　８月１９日（土）０：１０ほか）について＞

○　日系人部隊にいたイケダさんの横顔が心に残った。タイトルが「The Story Behind the “Heroes”」、この“Heroes”に引用符が付いていて、ただの“Heroes”ではないことを思わせるようになっている。イケダさんのことをヒーローだと言う人もいるかもしれないが、イケダさんは、「私はヒーローなんていうことばは嫌いだ」と言う。このことばを伝えるためにこの番組があったと感じるほど、このシーンがとても心に

残った。
　ベトナム戦争についてかつてベトナム人と話し合ったことがある。ベトナムはアメリカに勝ったよねと私が言った時に、そのベトナム人が「戦争において勝者なんかいない、誰も勝ちはしないのだ」と私に言った。それに通じるものがこの場面から見えてきた。あのシーンを構成することができたのはとても良い。
　こういう番組は昔もあったろうし、これからも作られるのだと思うが、教育用のコンテンツとしてはとても有効だ。例えば戦争に関するアーカイブスや、原子力発電所に関するアーカイブスとか、そういうものがあればより有効に使えるようになる。

○　私は国内放送のＢＳ１で、この番組の１１０分バージョンを見た。その時にとても集中して見て、すばらしい番組だと思った。今回、視聴したのは半分以下の短い４９分で、見終わった時に１１０分を見た時ほどの充実感はなかったが、何がもの足りなかったのかと考えてみた。編集する時に、焦点を当てるところを変えたのだろう。元の番組では、４４２部隊の兵士たちはアメリカ人であることを証明したいがために危険なところへ突入する。私たちはアメリカ人だという思いにずっと焦点が当たっている。例えばハワイで生活している彼らの自宅が映り、今アメリカ人として生きている彼らの生活が紹介されていた。だが４９分版では、失われた部隊を救出することに物語の焦点が移っていて、４４２部隊が抱えていたアイデンティティー・クライシスがぼやけてしまったのは残念だった。
　しかし、非常によい番組だ。二度見て、やはりよい番組だと思った。

○　この番組は現実を映した映像、過去を再現したドラマ、そして個々の元兵士たちのさまざまなインタビューでうまく構成されていて非常に迫力のある内容だった。非常に重い内容で、特に戦争の悲惨さに加えて偏見、差別に日系人は非常に苦しんだことを見せていたが、実際にこんなことがあったのだなと、改めてわかった。
　最後にレーガン大統領の時代にようやく日系人たちの名誉が回復されたことが描かれた。だがそれが非常に簡単に紹介されている。そこに至る過程、例えばアメリカ国内でこれに関してどんな議論があったのか、こういうことはもう絶対にやめようとか、議論があったかどうかもわからないまま、結論が唐突に描かれていた。日系人に対してアメリカ政府は「悪かったからごめんね」と非常にさらりとした謝罪しかしていなかったように見えた。日系アメリカ人が苦しんだことを思えば、もう少しこの場面を熱く語ってほしかった。

○　感銘を受ける部分がたくさんあったが、私は一つ問題提起をしたい。この番組をリアルなドキュメンタリーと考えて見ていて、証言を聞いて涙する人や、ことばに詰まる人、あるいは高齢者の目の動き、ことば、そういったことにのめり込んで集中して見ていたところ、突然再現ドラマが始まって違和感を覚えた。本当に伝えなければならない崇高な事実が、フィクショナルなものと交じり合ってしまっていた。視聴者層を広げるための手法としては理解できるが、フィクションでやるのならもっと本格的に徹頭徹尾フィクションでやった方がいいのではないか。ドキュメンタリーとして伝える番組に、再現ドラマが差し挟まれることに違和感を覚えた。一切再現ドラマがな

かったほうが良かったと思う。
　制作者には、再現ドラマのありようをもう一度見直す時期なのではないか。

○　重いテーマの番組で、再現ドラマとわかっていても見るのがつらいところがあった。
　すばらしい番組ではあるが、この番組は何を伝えたかったのか。それは「戦争」ではないと思う。日系人が受けた、いわゆる「人種差別」だと思う。しかしこの番組では、そこに重心が置かれていなかったのではないか。人種差別がもう少し前に現れてくるような番組の作り方であっても良かったのではないか。
　また日系人歩兵と敵側の兵士の動きが何となくテレビゲームのような作りになっていた。これも１つの手法ではあるが、その場面に至るまでの重たかった雰囲気が急に軽くなってしまったような印象を何度も受けた。もう少し工夫があっても良かったのではないか。

○　何度も目をそらしてしまったぐらい、心が痛む内容だった。もっと多くの日本人に知ってもらいたいと感じた。
　戦闘場面は非常に細やかに描かれていて、その苦しさがよく伝わってきたが、日系人が置かれていたあの時代のアメリカの社会背景などがもう少し丁寧に描かれるとよかったと思う。
　この日系人たちはアメリカ人としてどのようにプライドを持って生きていたのかが大変明快に伝わってきて、とてもよい番組だった。

○　世界各地で緊張が高まっている中でこの番組を見るといろいろ思うことがたくさんあった。歴史的な資料映像と再現映像、そしてＣＧと、３つの映像手法を組み合わせていた。私も最初の再現映像が出てきた時、作り込んでいるので逆に違和感を持ったが、結果的には良かったではないかと思い直した。ゲームのようにわかりやすくて軽いＣＧ映像の後に再現映像が現れた。子ども向けの戦争ゲームやシューティングゲームがあるが、リアリティーが欠けたものを今の子どもたちはたくさん見ている。ゲームが描いていることは本当はこの再現ドラマが描いているようなことだと対比して描いている。多くの人には分かりやすく伝えられたのではないか。表現のバランスの取り方としておもしろい。
　また、海外の視聴者がこの番組にどういう感想を持ったのかをぜひ聞いてみたい。

○　私は単純に大変感動して見た。ただ、２００名の兵士を救出するために４００名の日系人兵士を犠牲にしたアメリカ人将校は、人種差別主義者だったのか。「なんでもいいから味方の兵士を救出しろ」と言う彼が、この日系人部隊に対してどう感じていたのか。第三者の感想でもいいから証言が出てくると、アメリカの市民も粛然とした気持ちになると思う。
　アメリカは日系人の強制収容所について国内で相当議論して、最後にブッシュ大統領の時代になってから、心を打つ謝罪文が発表された。しかし、この話はアメリカ人もほとんど知らない。アメリカ人に分かってもらうためには、再現ドラマを使うほうが分かりやすいのではないか。アメリカ人を視聴者として意識して番組を作る場合は、

こういう作り方の方がインパクトがあるかと思う。
いずれにしてもすごい番組だ。こういうのをまた作ってほしい。

○　再現ドラマはいいと思うが、戦闘シーンが長すぎて繰り返しが多かったのではないか。特に、上官が「突っ込め」と言う場面が何回もあった。１、２回で済むのではないか。
そして、日系人兵士を危険な場所に投入しようとした上官が人種差別主義者であったことを示す、何か証拠があれば非常に有効な話だったと感じる。日系人兵士が危ないところにあれだけ投入されたのは、人種差別があったのではないか。
非常におもしろい話だと感じ、これが多くの人に伝わればいいと思ったのは、ルーズベルト大統領がプロパガンダとして日本に対抗するために日系人兵士を使ったことを示す書類が出てきたことだ。非常に説得力のある資料を見つけてくれた。
もう１つ、解放されたシーンで彼らが助かったと言っているところで握手し合っているのが白人ばかりで、日系人はどこへ行ってしまったのか。あのフィルムしか残していなかった当時のアメリカというものの姿を示している。
それから非常に重いと思ったのは、戦後になっても記念式典に行かない人がいることを示す場面だ。何十年たってもやっぱり重すぎて行けないのだと言う。そのことが示す意味は大きいと感じた。

（ＮＨＫ側）　日系アメリカ人のアイデンティティーの問題をどこまで描くかについてお答えしたい。主にアメリカで見られることを想定した国際放送版と、国内放送版とでは、対象とする視聴者がもつ知識の量が違う。国内放送版は、今のアメリカにいる日系人のリアルな姿を比較的丁寧に描いたが、国際放送版はそうした場面をある程度カットしても視聴者に基本的知識があるので、分かるのではないか。悩んだ末にそう判断した。
日系人が名誉回復するに過程についてもどう描くか非常に悩んだ。番組のメッセージを、英雄といわれる者の裏側にある戦争の過酷さ、戦争が結局、何をもたらすかに集約させていくうちに、日系人のアイデンティティーの問題や、その名誉回復がどう成し遂げられたかについては割愛せざるを得なくなった。そのためどうしても淡白な扱いになってしまった部分はあったかもしれない。そこは私たちも作りながら、最終的にどこを残すのかについて悩みながら選択していった。
再現ドラマを使うことにしたのは、歴史や戦争にあまり興味がない若い世代にも届くような手法がないかといろいろ考えた末のこと。再現シーンの一つ一つに一次資料の裏付けを取った上でドラマ化することをルールにした。
演出手法で若い人を引きつけるために、どこまで過剰な表現が許されるのか。歯止めがなくなるときっとこの番組のリアルな重さがなくなってしまう可能性があるので、一つ一つの所作、起きていた出来事を米国公文書館の資料に基づいて映像化した。若い人が見た時に歴史を体感できるような形で映像化しようと再現ドラマを作った。あの程度の表現ならば私たち

の目的を果たせるのではないか。

戦闘場面がゲームのように見えるのではないかと指摘があったが、若い視聴者の興味を引ける手法を目指して、ふだん目にしているテレビゲームの画面のようなものにうまく似せて作った。

ただし、実際にやってみると確かに軽すぎる印象を与えたかもしれない。迷いの中で作った表現だ。

歴史はどんどん単純化される。戦争で起きた出来事を「あれは英雄的な行為だった」と歴史家や後を継いだ人たちが単純化していくが、その裏側でどれだけ多くの物が失われ、多くの者が傷ついたかを、あのタイトル「The Story Behind the “Heroes”」に込めた。まさにそれが伝えたかったメッセージだ。

平成２９年７月国際放送番組審議会

平成２９年７月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６３８回）は１８日（火）ＮＨＫ放送センターで８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「CYCLE AROUND JAPAN」、「SATOYAMA Café」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
副委員長	大西　　洋	（元 ㈱三越伊勢丹ホールディングス 取締役）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア 代表）

（主な発言）

＜視聴番組「CYCLE AROUND JAPAN」
－KUMAMOTO　DISCOVERING A LAND OF VOLCANOES
（NHKワールドＴＶ　４月８日（土）９:１０ ほか）
「SATOYAMA Café」－Revitalizing Japan from Grassroots Spaces
（NHKワールドＴＶ　６月２５日（日）８:１０ ほか）について＞

○　今回の２つの視聴番組のリポーターはどちらも日本人慣れした外国人だった。だから極端なことを言えば日本人より日本人化した外国人による視点が紹介されている感じがした。つまり日本をあまり知らない外国人が感じる意外な驚きを見つけにくいのではないか。また、どちらも男性なので、女性の視点に欠けているところが共通している。

「CYCLE AROUND JAPAN」は“隠れた場所”を発見する自転車乗りの視点が大事だと言っているが、ときどき空からの映像があって、どの程度、自転車の視点を強調しているのかと疑問に感じた。また、いろいろな映像が、たぶん車から撮影されているのではないかと思うが、自転車でなければ入って行けないところからの映像をどの程度を出すのかが今後の課題になると思う。

もう１つ、企画立案の段階で外国人が参加しているかどうかが気になった。ひょっとしたら日本人だけが企画して、この外国人を登場させているだけではないか。

さらに、宿を偶然見つけたように見せていたが、あれは本当に偶然なのかも伺いたい。本当の偶然であればさらにおもしろいと思うのだが。

○　「CYCLE AROUND JAPAN」については先ほどの委員と似たような感覚を得た。外国人ならではの視点はどこなのかが分かりづらく感じた。随所に見えた美しい景色には本当に魅せられ、すばらしいと思った。番組を見ながら、これは景色を見せたい番組なのか、各地でいろいろな取り組みをしている人たちを伝えたい番組なのか、そこが疑問に感じた。番組の最後では人々のつながりをキーワードにしてまとめていたが、そのつながりの部分をもう少し突っ込んで描いていたら、ふに落ちやすかったと思う。

熊本だから災害に触れないわけにはいかないが、この番組を通して熊本にもう行っても大丈夫だと安全性をアピールしたいのか、それともまだまだ危ないと伝えたいのかが分かりづらかった。安全ではないかもしれないが、でも行くことはできると伝えたいのか。一番伝えたかったことは何かを尋ねたい。

まだ震災から１年しかたっていない熊本における人々の復興への取り組みをもう少し突っ込んで描いていれば、美しい景色がより映えたかもしれないと思った。

○　自転車の旅にはメリットとデメリットの両方があると思う。メリットは思わぬものに出くわすとか、ふだん見えないところに行くことができて驚きを感じるところ。そういう点は、日本の優れた物作りだとか、日本が持つ季節などを通じて表現できていたと思う。

取材地は熊本だが、九州を初めて見た人や、日本を知らない人が見たときに、九州の位置付けみたいなものが提示されていたらよかったと思う。

たまたま旅館が２つ出てきて、宿泊費は7,500円と１万4,000円だったと思うが、その差についてもう少し表現できていればよかった。

取材地が熊本なので、番組の始まりが震災で、最後も震災で締めていて、たぶん熊本城の、２０年、３０年かかるけれどもこだわって直していくことを表現したかったのかなと私は受け取った。

それから、日本の四季や情緒、おもてなしや日本人が持つ心を海外の人にわかってもらうのは、とても重要だと思うが、今、世の中はものすごい勢いで進歩していて、海外に紹介できる日本のテクノロジーはたくさんあると思う。だから、欲張りかもしれないが、日本は、今回のような地方の情緒的な側面とは別にテクノロジーもあることが紹介できるといいのではないかと思う。

○　どちらの番組も日本の良さをアピールできていて、非常にすばらしい作品だと思った。「CYCLE AROUND JAPAN」の良さは、旅人のマイケル・ライスさんをフィーチャーして、彼の視線から日本を見ている。その彼の走っている様子とか、坂道を登るのはつらいとか、そういうことまできちんと描くことによって彼が見ているものを明確にしていて、非常に分かりやすいし、親しみやすい作品になったと思う。物事は誰の視点によって見ているかによって、対象の意味が変わってくる。例えばその美しさを示すにしても、それは誰が美しいと思っているのかを常に明確にしないと、

その意味がきちんと伝わらない。

だから、日本に詳しい人の視線ではなく、全く日本のことを知らない人が見たらどういう番組になるかという意見が先ほどあったが、そのような視点はもちろんあってもいいと思うが、この番組の良さはマイケル・ライスさんの見方をはっきり提示したことが逆に魅力になっている。だから、これはこれで続けていけば良い作品になっていると思う。

そういう点から言うと、「SATOYAMA Café」のほうはアレックス・カーさんという、非常に独特な見方を持っている人の見方を紹介しつつ、同時に、そのカーさん以外の日本人の視点を絡めながら見せていくために、いったいどこがどういうふうに同じ視線になるのか、あるいは違う見方になるのかが明確ではなかった。そこがちょっと残念だ。そのカーさん自身が古い日本の家屋を宿屋に変えていく試みがあったと思うが、それと、里山の自然の中で生きようとする日本人たちとはまた別であるところもたぶんあると思うので、その辺りが明確になるとさらによかった。

さらに「CYCLE AROUND JAPAN」に関しても、ライスさんの視線を明確にするためには、本当に地元の人々と偶然の出会いがあったのかどうか、どれぐらい制作者側のお膳立てがあったのかも、実は気になった。もし本当に偶然だったのなら偶然で、つまりどういう演出をすると、見ている人にライスさんの視点だと伝わるのかということに対する配慮がもう少しあると、さらにより良い番組になったのではないかと思った。

○　両方とも大変見応えのある番組ではあった。「CYCLE AROUND JAPAN」は、内容を日付に分けてつなげていくところや、旅人の視点に沿って見られるところは、この審議会の視聴番組として見た旅番組の中でも骨太で見応えがあった。だが、他の委員からも指摘があったが、誰が設定して選択した内容なのか。旅人であるリポーターが設定したのか。あるいは事前に番組側のプロデューサー、ディレクター、リポーターが協議をして設定していったのか。あるいは本当に偶発的に進めていったものの集大成なのか。

さらに具体的に言うと、自転車で長距離を移動する中、本当に映っているだけの荷物でリポーターは移動したのか。スーツケースはなかったのか。一般の視聴者はそこまで考えない可能性はあるが、こういった旅の体験番組を提案する場合、どこまでがテレビ的演出で、よく言えば削ぎ落としたものなのか。情報番組としての基本に立ち返って、その部分は具体的に提示してほしい。

海外から来た人が、駐輪場がどうなっているのか、レンタサイクルはどうなっているのかなど、もっと知りたくなってくることがたくさんある。見ていて迷いを感じ、私自身も疑問に思うことがいくつかあった。

○　１つ質問するが、この２つの番組は単発番組か。それともこれからシリーズとして放送していくのか。もしシリーズであれば、何回ぐらい放送する予定か。既に何回か放送が進んでいるのか。

（NHK側）　「CYCLE AROUND JAPAN」はシリーズ。もう、放送が進んでい

る番組だ。

（NHK側）　年間に１０本制作予定で、今月までで４回放送している。あと６回放送予定。ほぼ月１回のペース。去年までは不定期に何本か作っていたが、今年から年１０本に増やした。「SATOYAMA Café」は単発番組だ。

○　私も視点が気になった。また、荷物はどうしているのかも気になった。これはドキュメンタリー番組なのか、情報番組なのかが少しあいまいで、見ていてリアリティーを信じていいのか。そこがあいまいになってしまうと説得力に欠けるので残念ではないか。

映像としては疾走感もあって、歩いてまわるような旅番組とは違うある種のスピード感も気持ちよさもあるので、企画としては非常におもしろいと思うが、自転車でなければ本当に行けないところは説明があると、さらによかったと思う。

○　私は大変楽しませてもらった。自転車はいい。人間が歩いているのをずっとフォローしていると、ちょっとだれてしまうところがあるが、自転車だからちょうどいいスピード感だ。私も、この旅人はナップザックを背負ってないのかと思ったが、そういう疑問点を越えて大変よくできた番組だと思った。これは「ブラタモリ」に匹敵するのではないか。ぜひ日本中を旅してほしい。

「SATOYAMA Café」は、外国人の意識になり代わって見てやろうと思って見ていたが、カーさんの視点は外国人にとっては非常にわかりやすい。自分の母国語で、自分たちの視点も入れて、それで日本を非常によく知った人が連れて行ってくれる。だから両方とも非常にいい番組だと思った。

○　だいたいほとんどの委員が言ったことと重なるが、基本的には今回、英語が非常によかった。“アジアのＢＢＣ”であれば、無理して日本人の英語ではなくこういう外国人の英語でやることも１つの大事な点なので、よかった。

私は「CYCLE AROUND JAPAN」については正直言って「鶴瓶の家族に乾杯」のように全く本当に偶然の出会いで描いているのか、そうではなく、ある程度セットアップされたものなのかが知りたい。例えば曲げ物用の木材を運んでいる人が突然出て来るのはどうも考えにくい。何も偶然を装わなくてもいいのではないか。この地方には曲げ物の名人がいるので、その人のところを訪れてみることにしましたと言えばいい。偶然を装うと、ＮＨＫへの信頼を持つわれわれはみんな「あれっ？」と思ってしまう。そういうことをあえてする必要はないと感じた。

最後に細かい点だが、他の委員が言っていたが、熊本や長崎とはいったい何なのかを紹介する際、外国におもねる必要はないが、例えばスイスよりちょっと小さい九州の５分の１ぐらいの大きさですとか、あるいはアメリカで一番小さいロードアイランド州の３倍ぐらいの大きさでウェールズの３分の１ぐらいですとか、熊本と言ってもその規模がわからない人に、比較して説明する手はあるのではないかと思った。

（NHK側）　まず場所の設定については、今回に限って言うと、熊本の震災から１年、

それからその前には阿蘇山の噴火もあったので、熊本と言っても天草も含めいろいろ楽しめる場所があり、風評被害に苦しんでいる人もいるので、「CYCLE AROUND JAPAN」で応援したいと、熊本を選んだ。この番組は３年前から季節ごとに１４本、制作している。竹富島や奄美大島の金作原とか、車道がなく自転車でしか行けないようなところへも、今まで旅をしてきた。

○　一応シナリオを作ってそのとおりに人が出て来るような感じなのか。あるいは本当に偶然だったのか。後者のほうは考えにくいと思うのだが、なぜ偶然性を装わなくてはいけなかったのか、というのが委員の皆の意見だ。今後は、説明を入れるなど、変えられるか。また、災害の件についてはどういう視点から安全だと言うのか。

（NHK側）　場所の設定については、シナリオを作っている。その中には旅人の意見も入れて行ったことのない場所、訪ねてみたい場所を決めている。

３日間の旅の行程の中で、実際に全部偶然に出会いを作っていくのは非常に難しい。ある程度リサーチをして、その人たちと旅の中で出会うシーンを作るのだが、今回はたまたま曲げ物の職人との出会いのシーンが演出不足で、放送したようなシーンしか撮れなかった。

旅をアレンジしましたと説明する形でこれからは演出していけると思う。それは改善ができると思う。

災害については、風評被害もあるし、阿蘇山の噴火、熊本の地震などの中で本当に旅することができない場所なのかを実際に自転車で確かめてみようと考えた。だから、行ける場所は安全を確保できる場所として紹介し、その中で楽しめるポイントを海外の方々に紹介した。

○　荷物の話はどうか。

（NHK側）　映っていたのが実際に持っている荷物で、ヒップバッグ１つで行っている。今まで１４回放送した中では、何を持って行くか、かばんの中の持ち物も細かく全部紹介している回もある。何回かそういう紹介を繰り返したので、今回は、できるだけ番組の中身に時間を使おうと考え、そこは割愛した。

○　主人公は衣装を変えていたが。

（NHK側）　衣服は小さく折り畳んで、全部バッグの中に入れられる。

○　東京から映っていたままの荷物で出発したのか。

（NHK側）　東京からは若干の手荷物はあるが、熊本出発の時点ではあの荷物だけで行っている。途中、人吉から列車に乗ったりしたが、輪行バッグも全部、

中にコンパクトに入っている。下着類は、彼は宿で全部自分で洗っている。本当に自転車だけで旅をする人たちを選んで走ってもらっている。

走り手としては今まで男性が４人、女性が２人、出ている。今回はアメリカ出身の人だが、チェコ、オーストラリア、イギリス出身者に走ってもらっている。

○　自転車でしか行けないとは言っても、車で追っているわけではないのか。

（NHK側）　車ではなくバイクで追っている。マラソン中継に使えるようなバイクだ。少し座席を高くして、画面がぶれないようにバイクにジャイロを付けてある。

○　そのバイクを画面に登場させる回はないのか。つまりどういうふうに撮っているのかを少し知りたいと思った。

また、マウンテンバイクではなくてロードバイクなので、大丈夫なのかと思ったが。

（NHK側）　ロードバイクでも若干のマウンテン・トレイルも大丈夫だ。ロードバイクは少し太めのタイヤを履いている。山の中を走る回もあるので、そのときにタイヤは太めを選んでいると紹介している回もある。

○　番組制作の根幹だと思うが、演出上のガイドラインはどうなっているのか。旅番組は民放でも視聴者からいろいろな意見を言われる可能性が高いが、私自身は暗黙の了解というか、視聴者との間できちんとした約束事があれば、フィクションなのか、ノンフィクションなのかも含めて、最終的に誠意を持った番組作りであればいいと思う。いちいち間にいろいろな説明を入れて、視聴者の了解を得て、画面に映っていることは実際とは違うのだと言い訳をしながら番組進行しなければいけないものはちょっと興ざめなので、いかがなものかと感じるところはある。やはり、旅番組ならば、道路交通法で車の入れない場所に入って行って走って本当にいいのか、実際にそれを真似して入って行って現地の人から叱られないのか等々、番組上の演出のガイドラインを作ることが、重要なのではないか。

先ほど言い忘れたが、この番組の中でも、経験できることと、テレビ上アポイントメントを取ってインタビューしているところとが混在しているが、これも誤解を招くところだ。番組の最後に、これは経験できますということが補足されているが、ではほかのところはどうなのかというと、これも明示しなくてもわかると理解はできるが、海外に発信する場合は、丁寧な説明が必要だと改めて思う。

○　リポーターは、日本を驚きを持って初めて見る外国人なのか。それとも日本をよく知っている外国人なのか。

（NHK側）　基本的には、日本語でコミュニケーションのできる方を選んでいる。

○　「SATOYAMA Café」についてだが、里山の定義について少し勉強したところ、日本里山協会がこう定義している。里とは生産活動の場。それから消費と交換の場という概念も加わる。山は畏怖の対象、スピルチュアルな場としての山、それが合わさったのが里山。いろいろな集団が継続的に共存できる場である。あるいは継続的に自然からの恵みを維持できるシステムがそこにある。このビデオの中でも里山の定義、あるいは里山カフェの定義が最初に簡単に出てくるが、そこをもう少し詳しく紹介してもいいのではないかと思った。日本全体の動きも多少紹介したらおもしろかっただろう。

こういう定義に基づいてこの「SATOYAMA Café」の中で里山らしい特徴がよく出ていたのが、福江アイランドのソトノマだったと思う。スローフードやスロータウンづくり、そういう雰囲気が非常によく出ていると思った。ただ、全体的にはいろいろなケースがあり過ぎて、広く、浅くで終わっているような感じを抱いた。もう少し里山の深いところを福江アイランドの例のように深く掘り下げたほうがおもしろかったと思う。

スローフードはイタリアで始まったものだが、里山の動き自体が世界に発信できる非常に強いメッセージ性を持っていて、これこそ、さらに１０回、２０回と続けて放送をしてもいいのではないかと思った。極端なことを言えば、もしまだ英語の辞書に入っていなければ、SATOYAMAという日本語をオックスフォード辞典か何かに入れるような動きもあってもいいように感じた。

○　私の好みとしては、この「SATOYAMA Café」はとても好きな番組だ。いま、他の委員が言ったように、いろいろなことに触れているが、もっと深く突っ込んでいればなお良かったが、里山の意義をきちんと描いていてわかりやすく、楽しめた。

ただ、タイトルが気になった。登場したカフェは２軒ぐらいで、あとは宿などさまざまだ。たぶん番組を貫いているものは最後にカーさんが言っていたNothing specialをアピールしていくことなのかと思うが、例えて言うならば、邦題がしっくりしないばかりにすばらしい外国映画がヒットしなかったみたいなことになりかねないのが少し心配になった。少なくともこれは“里山カフェ”の番組ではないと思う。違うタイトルを付けていたらよかった。番組自体は私もシリーズ化していただきたいぐらいいいなと思った。

○　とてもいいテーマだと思う。この里山というものに私が非常に感銘を受けたのは、十数年前に「ＮＨＫスペシャル」で特集されたときと記憶している。この里山という概念を掘り起こしたのはＮＨＫだ。その中でいま、ほかの委員からも里山の定義の説明があったが、日本人でもきっと里山のことをよくわかってない。もっと里山のことを番組の中で説明していったほうがよかったのではないか。ただ今回は東京や京都にある古民家や民家をどう活用していくかという課題にテーマが移っていってしまって、焦点が２つできてしまった。それが少し残念だった。

里山については継続して、日本人にも見てもらいたいものをＮＨＫの国際放送でも放送してもらいたい。

○　やはりタイトルが本当にこれでいいのかと思った。私は、番組のタイトルはとても重要だと思っている。番組をどうネーミングするかで伝わり方が変わってしまう。番組を見ていて、「これは里山なの？」と途中で何度も思ったし、「これはカフェじゃないよね」、「カフェってもうちょっと概念的なことを言っているのかな？」と考えて、番組にスーッと入れなくなってしまった。日本人の私が「これは里山なのかな？」「里山ってこうなんだっけ？」と思って見ているくらいなので、海外の人がそれを理解できるのかと疑問に思った。

おそらくタイトルにもっとふさわしいものを選ぶべきで、このタイトルならば編集の仕方が違うと思う。実際のコンテンツとタイトルがずれている。その点はとても大きな問題だと思った。非常にもったいない。

○　里山というコンセプトでカーさんを通じて見えてくる日本のいい点、あるいは海外の方から見て日本のいい点に関する取材のプロセスみたいなものを見せたいのか、それとも最終的に帰結したものを海外の視聴者、観光客の潜在的なインバウンドにつなげるための材料としたいのか。

要望をひとつ言うと、イスラム圏の方々がハラル料理の食べられる場所などの情報を非常に欲しがっている現実がある。できるだけそういった情報も今後の番組の中で紹介してくれるといいと思う。

○　私は、カーさんは大変おもしろいと思った。

彼が言っているコメントについて２つ気になったことがある。１つは、日本の宿屋に行くと豪勢な懐石料理が出てくるのが一般的だが、むしろそうではなくて地場のものを出していこうという動きが出てきているという話。もう１つは、ヨーロッパやアメリカでは1980年代ぐらいから、古い家を全部建て替えるのではなく、中だけを変えて外を残していく、あるいは一部を残していく動きがあるが、日本はそうしたことを全然やってこなかった。今やっと始まったのだという話。その２つを念頭に置くと、実は今われわれが里山だと自慢しようとしているものは、ほかの国ではずっとやってきていることで、われわれ日本人が非常に遅れて今やろうとしているのではないか。こうした議論をそのまま受け止めていいのかわからないが、ある意味では、シチリアに行けばシチリアの料理が出て、スコットランドに行けばスコットランド料理が出るのに、日本だとどこへ行ってもマグロとエビの懐石が出る状況から今やっと変わってきている。古民家の利用もそうだ。だから、ああそうなのかなと番組を見て思った。

そうするとあの「SATOYAMA Café」の里山は、基本的にはローカル色、地方色を生かしましょうという１つのことに煎じ詰められる。われわれはいま、そこへ１周遅れで回帰しつつあるのかと思う。その辺りのことを印象深く思った。番組は若干ごった煮的なところがあるが、おもしろいものだなあと受け止めた。したがって、外国人よりは日本人向けに非常にいい番組なのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）　里山の定義やタイトルが違うという指摘については、迷いながら作ったのが正直なところだ。里山という概念はもともと比較的狭義で、かつしっかりした、人間と自然が一緒になって人間が自然の手伝いをしながら、か

つ生産の場と生きる場、自然の保護みたいなことが一体となっていることだと思う。その概念を少し広げながら、そこに現代的にも人が暮らす場、それから人が集まる場を、概念的にも、ことばとしても示した。

里山カフェとか里山暮らしというとほんわかしているが、経済のためには役に立たない場合もあり、人口減少の歯止めに効果があると思っていたが実際には効いていない場合があり、その辺りのところが、共通して見られる問題だ。そういうところに外国人の観光客も来てもらえないか。カーさんの宿も含めて、まだ外国人観光客が来るところまでは至っていないが、かなり人が集まってきている。そういうことも、ＮＨＫを含めてどのメディアも情報として発信しているようで発信していないと私は思う。

今回は、そのような捉え方を表現する方法がないかと探るためのトライアル番組だ。タイトルが違うと言われると、なるほど、そうだなあと思ってしまう。

地域のことを大切にしようとすると、目の前にある資源は結局、里山、里海、里川しかない。よそからものを持って来るのではないのが里山だ。その辺りのところを、ないまぜにして作ったので、いろいろな意見を頂いたのだと思う。意見を伺いながら、どういうタイトルにし、どういう具合に番組を固めていくと今後可能性があるのかを考えていた。

○　先ほど来、皆さんの意見を伺っていて、視点が鋭いなあ、厳しいなあ、これは言われるほうの皆さんも結構大変だなあと同情しながら聞いていた。

日本のいいところ、本当に胸を張って彼らにプレゼンしていけるところは、日本の原風景、地方の人情だと私は思う。現代風のいろいろなファッション、それから技術などいろいろあるが、二番煎じのものがあったり、その裏に哲学や人間の風土を欠いている部分も多かったりするので、日本の地方の隅々の情景を世界に発信していくのはぜひ続けていただきたい。

○　「SATOYAMA Café」の番組が皆さんから大変好評を得た理由は、里山という概念が非常に重要で、今後ともこの概念を日本人も含めて世界にアピールしてもらう必要があることを、皆さんが認識したからだと思う。たぶんタイトルとしてSATOYAMA Café と里山にカフェを付けてしまったところがいけなかった。里山が前面に出る必要があったのだろう。たぶん里山という概念は資本主義に対立する概念なのではないか。発想を変えて、里山はもっと大きな概念なのだというスタンスで番組を作ると、さらにアピール力が増すのではないか。

○　里山という、非常にローカルな場所で起こっている出来事をグローバルな視点で見る。あるいはグローバルにつなげることによって、里山が一時のブームで終わらない。より持続していける。日本の中でとどまっていることによる限界をグローバルにつなげることによって突破できるのではないか。

それから、この里山がネットワーク化してもっとお互いに刺激し合えるようになれば、小さな島の一地域の成功で終わらないと思う。これをいかに日本全体に広げてい

くか。あるいは世界にいかに紹介して、世界とつながりを持っていくか。そういう発展性が出てくると非常におもしろいと思う。

（NHK側）　貴重な意見を頂きありがとうございました。番組タイトルは本当に難しく、われわれも関わっている中で、当たったタイトルもあれば、そうではなかったタイトルもある。指摘を踏まえてさらにわれわれも一度考えていきたい。

里山について、里山自身のコンセプトを広げていくべきだというのはそのとおりだと思うので、今後もさまざまな形で日本の情景を世界に発信していきたいと思っている。

（NHK側）　この審議会では、いつも番組制作の根幹に触れる意見を頂き、私たちは本当に参考になるが、きょうは情報番組、特に旅番組における演出とドキュメンタリー性をどのように伝えていくかについて、非常に大きな問題提起を頂いた。

誰の視点かということは非常に重要だ。誰の視点で番組が作られているのかを明確にすることも含めてさらに番組作りを検討していければと思う。

それから番組のタイトルの重要性はわれわれはいつも考えている。本当にこれがいい番組として伝わるタイトルなのかを深く検討していきたい。

きょうは貴重な意見をありがとうございました。

平成２９年６月国際放送番組審議会

平成２９年６月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６３７回）は２０日（火）ＮＨＫ放送センターで９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のＮＨＫの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS～ Lt. Onoda's Return:The Untold Story of a Japanese War Straggler」、「Hibakushas'Stories ～ A Historic Presidential Visit, One Year On Sunao Tsuboi: Long Journey for Peace」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
副委員長	内永ゆか子	（特定非営利活動法人 ジャパン・ウィメンズ・イノベイティブ・ネットワーク 理事長）
委　　員	大西　　洋	（㈱三越伊勢丹ホールディングス 取締役）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）

（主な発言）

＜視聴番組「NHK NEWSLINE FOCUS
～Lt. Onoda's Return:The Untold Story of a Japanese War Straggler」
（小野田元少尉の帰還　極秘文書が語る日比外交）
（ＮＨＫワールドＴＶ　４月１６日（日）8:10 ほか）
「Hibakushas'Stories　A Historic Presidential Visit, One Year On
Sunao Tsuboi: Long Journey for Peace」（平和への長い旅　～坪井直～
オバマ訪問から一年）（ＮＨＫワールドＴＶ　５月２７日（土）8:10 ほか）について＞

○ 「NHK NEWSLINE FOCUS～ Lt. Onoda's Return:The Untold Story of a Japanese War Straggler（小野田元少尉の帰還　極秘文書が語る日比外交）」は、メッセージが非常に明確に届き、とてもよい番組だと感じた。世の中に完全な善人はいないし完全な悪人もいないという、人間の本質を極めて明確に伝えている。しかも戦争の加害者と被害者は互いに許し合うべきだというメッセージがとても伝わってきて、よかった。

「Hibakushas’Stories A Historic Presidential Visit, One Year On Sunao Tsuboi:Long Journey for Peace(平和への長い旅 ～坪井直～ オバマ訪問から一年)」は、ナレーションがおどろおどろしく感じられ、番組に気持ちが入っていきにくかった。

主人公の坪井さんがオバマ大統領と会ったあとの１年間をどのような苦悩の中で過ごしていたのかという点がもう少し伝わる形になっていたらもっとよかった。

○　２番組とも総じて非常に良く、何回も繰り返して見たいと思った。

小野田元少尉の番組はわれわれが認識していたものとはまた違う元少尉の側面を見せてもらった。インタビューに応じたカナルス氏は、自分の親族が元少尉の被害にあっているにもかかわらず、最後には「許すけど忘れない」という気持ちに変わっていったことを、一生懸命我慢しながら語っている。これはテレビでなければ表現できない点だと思った。

小野田元少尉の番組と被爆者の番組には共通した点がある。主人公の坪井さんの人格や生き方の裏には日本人が持つ思いやりや優しさがある。小野田元少尉の番組のカナルスさんと坪井さんは、どちらも相手を理解しつつ話していることが非常に印象的だった。

戦争に対しての見方はさまざまだと思うが、この２つの番組は、われわれの世代だけでなく、日本の若い人たちにも、そして海外の人たちにも、非常に有意義な番組だったと思う。

○　小野田元少尉の番組は私も大変良い番組だったと思う。元少尉がフィリピンの住民たちにあれだけ損害を与えてきたことを、われわれは実はあまり知らなかった。そこをえぐり出している。これは外国にも見せなければならないと同時に、日本人にもっとよく見せなければならない番組だ。

日本が支払おうとしたフィリピン側被害住民への見舞い金をマルコス大統領が結局断るが、地元では相当失望が広がったはずだ。もう少し住民感情を伝えてもよかったと思う。あれはやはり外務省の失策だと思う。私自身は当時の経緯を知らないが、見舞い金を渡す方法はいくらでも考えられたはずだ。

○　見舞い金は民間団体で受け取るということではなかったのか。それとも結局、断ったのか。

（ＮＨＫ側）　フィリピン側に受け取ってもらうという前提で日本大使が調整していたが、マルコス大統領が土壇場で受け取りを拒否した。外交文書によれば、マルコス大統領側から鈴木善幸氏側に、ラウレル氏を長とする日比友好協会を受け皿にして財団形式にしてくれないかと話をしている。３億円の見舞い金そのものは直接住民には行かなかったが、財団が運用して留学生の支援などに使われた。

○　日本からフィリピンの財団へとお金は渡ったけれども地元には届かなかったという

点が番組を見ていてわからなかった。もしそうならば、そこを明らかにすべきだ。

○　私も２つの番組を非常に興味深く見た。小野田元少尉が日本に戻ったころ、彼は日本では英雄視されていた記憶がある。カナルスさんが小野田少尉の捜索活動に参加したのは、元少尉に復讐するためだったという話は全く覚えていない。小野田元少尉を偏った情報の中で私たち日本人は見ていたのではないかということを感じた。

この事件が日本でも、フィリピンでも、政治化された様子が描かれていた。市民レベルでこの出来事がどう取り組まれていたのかを紹介すれば、フィリピンの人々が憎しみをどういうふうに和らげていったのかがわかったのではないか。

小野田元少尉の番組の最後の場面に「人間は互いに許しあうべきだ。誰しも罪を犯すものだ。そうでない人などいない」という言葉があった。その言葉の示す例として広島の被爆者の番組を見ることができた。

主人公の坪井さんは奥さんと一緒に自殺を図ったことがあり、そこから回復していくプロセスで許しの心が芽生えてくる。そのあたりのストーリーは非常に心を打つものがあり、とても良い番組だと思った。

○　２つとも、とても良い番組だった。この２つの番組は日本の中にあるもの、特に広島の場合は２０年以上の取材の記録が基になっている。日本でしかできない番組だ。良い国際放送はぜひとも国内でも放送していってもらいたい。

戦争と平和をどのように伝えていくかというテーマについては、戦争被害者と私たちの間にギャップがあると思う。被爆者の坪井さんが抱えている怒りを、戦争体験のない私たちが理解するうえではこういう番組はとても大切だ。こういう惨事を起こしてはいけないということを伝えるためには、子孫に“怒り”を残すのではなく、こういう“記録”を残していくのが重要だ。ぜひこういった番組を今後も作り続けてほしい。

小野田元少尉の番組のタイトルは、日本語と英語とで差があり過ぎる。日本語のタイトル「小野田元少尉の帰還　極秘文書が語る日比外交」は「外交」が特にキーワードになっているが、英語の「Lt. Onoda's Return:The Untold Story of a Japanese War Straggler」はそうではない。英語のタイトルにもう少し工夫があってもよかった。

○　人に焦点を当てて問題を浮き彫りにする番組の手法がすばらしい。いろいろ心にしみいってきた。

私も、この小野田元少尉の話の極秘文書のことは知らなかった。この番組をフィリピンの学生に見せたときのニュース映像を見た。フィリピンの学生は、小野田元少尉の話を知った日本人はどう思ったかを、知りたがっただろう。その点は番組の中に組み込めなかったのだろうか。

内容的にはすばらしいが、あえてビジュアルの視点から言うと、現在のインタビュー映像と昔の資料映像との間に、あまりメリハリがなかった。そこにもう少し表現のメリハリがつくと、より情感が出るのではないかと思った。

○　２番組とも大変すばらしい番組だった。実際に戦争の被害にあった人たちの声がしっかり撮れている。被爆者の坪井さんは９２歳だし、小野田元少尉に父親を殺された人も亡くなってしまうと、こうした声は私たちに届かなくなってしまう。こうやってきちんとした形で残したことで、歴史を学ぶことのできる非常に重要な番組になっている。

被爆者の番組では、ナレーションがとてもかっこよすぎたところが気になった。そのナレーションのかっこよさによって、主人公の坪井さんがある種美化されている感じがした。もちろん坪井さんはすばらしい人で、そしてまた許す気持ちに至るまでに彼の中にあった葛藤の大きさは想像を絶するものだったろう。この番組は“劇化”という演出が加わっている。物語を伝える側の中で、おもしろくしなければいけないという思いと、事実をそのまま伝えるのだという気持ちをうまくバランスをとっていくのは難しいことだろう。

さらに言うと、われわれは広島、長崎の被爆の実態はよく知っていることだが、世界の人たちはその実態を全然認識していないか、核爆弾は必要悪であったという認識をずっと持っている。外国人が実態を知らないことを非常にもどかしく感じる。だから原爆資料館を訪れる外国人のインタビューを紹介するだけではなく、原爆被害の実態はこうだったのだと、もう少し紹介したほうがよかったと思う。

フィリピン英語がちょっとわかりづらかった。日本で放送するときに日本の方言に字幕を入れるように、そうしたわかりづらい英語に字幕を付ける配慮があると少し理解が深まる気はした。そうすることが失礼なことなのかどうかは分からないが。

○　２つの番組を見終わって感じたことは、大きな政治的な暗闇が根底にあって、私たちが聞かされたり、見せられたりしている事柄は、ある種の作られた、美化されたものである場合があるという点だ。

小野田元少尉の番組は、フィリピン側のことをかなり赤裸々に紹介していたが、小野田元少尉側の視点はあまり出てきていない。結局、両方とも被害者だ。この両方とも被害者であるという結果を作ったものは何だったのか。

フィリピンの地元住人に見舞い金を渡そうと思えばできなくはなかったと思う。政治的な事情がいろいろとあったのか。もう少しそういった政治的な闇のようなものに対して、視聴者が何かを感じるような情報提示をすることも大事なのではないかと思った。

○　小野田元少尉の番組にはいろいろと知らない事実が多く描かれ、私も大変勉強になった。これは外交を勉強する人にとっての教科書みたいなところがあると感心した。

私が問題点だと考えるのは３つ。

１つ目は、若干、繰り返しの部分が多かったところ。

２つ目は、番組では見舞い金は日本からフィリピンへ渡ったが、それは民間団体に渡ったのであって現地には行かなかったと説明していた。もしそれが学生の留学などに使われたのであれば、どういう団体が使ったのかまで掘り下げればおもしろかったのではないか。

３つ目は、小野田元少尉に当時の田中角栄首相は会っているが、天皇陛下は確かお

会いにならなかったように思う。そういうことも紹介すると、日本国も全部でバランスが取れていた部分、特に皇室はバランスが取れていたことを示せるのではないかという感じがした。

被爆者の番組で良かった点は２つ。

戦争に関する記録を２０年以上にわたって撮り続けていて、さすがNHKだなと感じた。また、坪井さんが自宅で息子と一緒にテレビを見ている親密な場面も、よくそこまで入り込んで撮影したな、NHKならではだと、感心した。

もう少し掘り下げてもいいのではないかと思ったのは３点。

１つ目は、スミソニアン博物館を訪れたときに坪井さんはエノラ・ゲイの説明が足りないと当初非常に怒っていた。すると一人の女性が出て来て、いや、私たちも非常に苦しんだ経験があるのよと言ったら、突然坪井さんが納得してしまう。なぜこの程度で納得してしまうのか。この女性がどんなふうに坪井さんに説明したのか、彼女が戦争にどう苦しんだのかがきちんと説明されていれば、もっとわかりやすくなったはずだ。

２つ目は、オバマ元大統領とトランプ大統領を比較して、「オバマはいい人」、「トランプは悪い人」と単純化している気がした。実はオバマ大統領のときに核兵器は一番削減数が少なかった。背景に対ロシア問題もあったのだが、反核団体からは、オバマ大統領は口では言ったけれども何もしなかったと言われている。トランプ大統領は確かにずいぶん乱暴なことを言っているが、一方が善玉で一方が悪玉だと明確に言えるほどのことだろうか。

３つ目は、今年議論された核兵器禁止条約に日本は参加しないという結論を出したことについて。国際放送では焦点を当てるべき事柄だ。トランプ大統領は悪い、と言うだけではなく、日本も実はこういう点があるのだと説明するべきではないか。

（NHK側）　小野田元少尉の番組の基になった外交文書の存在は、広島市立大学の永井均教授と話している中で知った。元少尉が亡くなって２年近く経っていたころだ。永井教授が外務省に情報公開請求しようと考えて請求したところ、外務省が開示してきたので、永井教授とチームを作って独自に外交文書を分析した。

（NHK側）　スミソニアン博物館での出来事は坪井さんの中ではかなり電撃的なことだった。あれだけの思いを抱えてエノラ・ゲイと対面した後に、あの女性に、「いや、私たちも同じだ」と言われてショックを受けた。そして坪井さんは旅程を変更して真珠湾に行った。直感的に行かねばと思った、と坪井さんは言っている。

それからオバマ元大統領とトランプ大統領を単純に善悪で評価してはならないというのはそのとおりだが、オバマ大統領は広島へは来てくれた一方、直前にトランプ大統領は核兵器政策をどんどん推し進めていくと宣言していた。それに基づいて坪井さんは両大統領を比較している。そのことを一つの記録として番組に収めた。

核兵器禁止条約については、日本政府の対応には被爆者も非常に心を痛めている。だが、たとえ核兵器を使うことに日本が肯定的になろうがなるまいが、被爆者たちはとにかく揺るがない。必ず核兵器をなくせるという希望を持ってやっていく。体験者としてのその意思の強さを視聴者に感じてもらえれば、少しでも世界がそちらの方向に向かうのではないかと思う。

私は坪井さんを２４年来取材してきた。坪井さんは圧迫骨折で療養しながらずっと証言活動を続けている。坪井さんをはじめ一人でも多くの被爆者の言葉を残していけるよう、これからも取り組んでいきたい。

○　小野田元少尉の帰還にまつわる外交文書はそもそも公開されていたものではなく、情報公開請求した結果出てきたものだとのこと。そこは、一番おもしろい部分ではないか。なぜ番組でそこに焦点を当てなかったのだろうか。

（ＮＨＫ側）　被爆者の番組は、ＮＨＫワールドＴＶだけではなく、日本語化してＮＨＫＢＳ１でことし８月に国内でも放送する予定であることを補足しておきたい。

平成２９年５月国際放送番組審議会

平成２９年５月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６３６回）は１６日（火）ＮＨＫ放送センターで８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、視聴番組「Anime Supernova」、「＃TOKYO」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	藤崎　一郎	（前駐米大使、上智大学特別招聘教授・国際戦略顧問）
委　員	大西　　洋	（㈱三越伊勢丹ホールディングス 取締役）
委　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　員	佐藤可士和	（クリエイティブディレクター、㈱サムライ 代表取締役）
委　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア代表）

（主な発言）

＜視聴番組「Anime Supernova」

第１回　Tomorrow’s Worlds,　From Today’s Rising Star
－ Yasuhiro YOSHIURA（吉浦 康裕）
（ＮＨＫワールドＴＶ　４月　８日（土）１３：４０ほか）

第２回　The Road to “Your Name.”　－ Makoto SHINKAI（新海　誠）
（ＮＨＫワールドＴＶ　４月１５日（土）１３：４０ほか）について＞

○　番組自体はとても楽しく仕上がっていたが、第１回「Tomorrow’s Worlds, From Today’s Rising Star」と、第２回「The Road to “Your Name.”」は、深さが違うように感じた。同じぐらいの深さだと、より興味深くなったのではないか。第２回はいろいろな形の分析があったが、第１回は、作品を見るところにずいぶん時間をかけていた。

○　第２回では、「君の名は。」に最終的にたどり着くまでの道のりが非常に詳しく紹介されていた。そしてエンターテインメントの持つ深い意味が、監督自身の経験に合わせて紹介されていた。エンターテインメントによって自分は救われたという監督の思いを込めたという意味で、深みがある番組だと思った。

○　導入としては非常におもしろくできていたと思う。アニメが日本の文化のとても深

いところから現代に来ているような、そういうことを海外に伝えられたら、日本という国の理解がより深まるのではないかと前々から思っている。１か月ほど前に海外を回って日本文化の話をしてきたが、皆さんがアニメのバックグラウンド、なぜ日本はそうなってきたのかということに強い関心を持っていた。

番組の演出について言うと、作品を枠に入れて見せたり、途中でフルスクリーンになったりしたあたりが若干わかりにくかった。「Anime Supernova」という番組タイトルは、もっとインパクトのあるデザインにした方が、日本のアニメの強さのようなものが伝わるのではないか。

○　アニメをいきなり海外発信するのではなく、アニメを流しながらアニメ監督をクローズアップすることで、結果的にアニメというコンテンツを海外に発信していくのがベストだと思う。「クールジャパン」という旗印で日本が海外に持って行くコンテンツ産業の中で最も有力なのはアニメだと言われて、もう４～５年たっている。しかし現実には、これがビジネスモデルにはなっていない。

いまの時点では、アニメを見て、とにかくおもしろいエンターテインメントだと感じてもらうために、この番組がスタートしたということが共有化されるといいのではないか。

また、日本の３０代、４０代のアーティストには世界で戦える人たちがたくさんいるので、そういう人たちをクローズアップすることで、日本のその人たちが関わっている産業なりコンテンツを海外に発信していくという役割も、非常に重要ではないかと思う。

○　大変興味深く２本の番組を見た。ちょっと迷いが見えると思ったのは、誰に向かって放送しているかだ。映像に関わる人やアニメのオタクと言われるような人たちに向かって放送したいのか、あるいは一般向けにしたいのか。

第１回は、作品が英語の吹き替えだったが、これはＮＨＫが作ったのか、あるいはもともと制作されていたものだったのか。

番組の作り方としては、前半の分析の部分と、中盤でアニメをフル画面で見せる部分が若干長く感じた。

日本人が作った番組を海外の人が見たときに、伝えるべきことが的を射ているのかどうか、外国の人を制作チームに入れて作ったのかどうなのかが気になった。

１つ要望だが、映像作家たちが何に価値を置いているのかということに、海外の人々は非常に興味がある。取り上げた作家たちが注目している海外のアーティストには、どんな人がいるのか、加えてほしい。

○　非常によくできた番組だと思う。アニメはやはり日本を代表する文化の１つなので、今回のように若い作家を毎回出していくのは非常にいい企画だと思う。

最近、日本の大学院を志望している中国の研究生たちと話す機会があったが、その中にもアニメを研究したいという人たちがいた。アニメは研究するに値する芸術だと感じている人たちにとっても、この番組は非常に有意義だと思う。

第２回は見応えがあった。これはたぶん、新海監督自身がさまざまなテクニックを

使っていて、それを、いわば素直に全部出していったというのがわかりやすかったこと。そして画面もきれいなところを集めたこと。第１回も、監督の言葉だけに頼らずに、別のアプローチで迫れば、同じように見応えのあるものになったのではないかという気がする。

○　監督の意見を伝えるための番組だとすると、第１回はよくわからなかった。短い紹介番組の中で、作品の背景にあるロボットＳＦのルールをわからせようとしても、なかなか無理だろうと思う。だから映像としてもう少しきれいなものが欲しかった。

○　３点申し上げる。１つ目は、日本がいま売り出そうとしているアニメや旬の作家を選んでいるのは非常によいということ。２つ目は、１５分という長さが視聴者を飽きさせないという意味で適切だということ。３つ目は、番組の冒頭にイントロ的なコーナーがあって、手塚治虫、宮崎駿から始まった日本のアニメはこのように発展して来たのだということを示して、それから旬の人の話が始まる構成にしたらいいのではないかということだ。

（なお、欠席の委員より、文書で次のような意見が寄せられた）

○　作者のアーティストとしての根幹に触れることができて非常にいいと感じた。アニメについて予備知識を持ち合わせない視聴者にも、作品の内容が簡潔に説明されて理解しやすい内容になっている。
　海外の視聴者の関心もアニメについては高いはずで、国際放送番組にふさわしい題材と言える。

（ＮＨＫ側）　たくさんのご意見、ありがとうございました。これを踏まえて今後の制作を進めたい。
　制作については、ひと言で言うと「権利との戦い」だった。ＮＨＫワールドＴＶでアニメをやるべきだという声は、ＮＨＫの内外でこれまでもあった。しかし日本のアニメは国内向けに作り、その評判がよければ特定の国や地域向けの権利を追加でクリアしていく形になっている。
　そういう状況の中で、ＮＨＫワールドＴＶで放送する場合は、同時におよそ 160 の国と地域の非独占の衛星放送権をクリアしなければならないため、これまでとは全く違う作業になる。
　去年大ヒットした「君の名は。」はぜひシリーズの中に入れたかった。現場から最初に出た案では「君の名は。」ではなく、新海さんの初期作品を取り上げることで権利クリアを容易にするという方針だったが、その方針を変更して、権利元である映画会社との交渉をまとめた制作現場の皆さんに感謝している。
　プロモーションについて言うと、「The Road to “Your Name. ”」はアメリカとアジアのアニメを愛する人たち向けにＳＮＳを使って、ターゲット広告的な発信もした。ＶＯＤ視聴では特に台湾など、アジアからの視

聴も多かった。こういった事例を積み重ねながら、アニメ番組が、ワールドＴＶを見てもらうある種のきっかけづくりになればと思っている。

（ＮＨＫ側）　かつて、「デジスタ」（ＮＨＫＢＳ２、2000 年～）という番組を立ち上げた時に、大学に在籍していたアマチュアアニメ作家が、１５年ほどたった今、第一線で頑張っている。そういう人たちを何人か取り上げるとおもしろいのではないかという、非常に素朴な発想で始めた番組だった。

今年度は半年で１２本作るところまで決まっているが、後半は新たな企画を提案したい。例えば、日本のアニメ作家が影響を与えた気鋭のアジアの作家たちを紹介するのもいいのではないかと思う。

例えば中国では、「君の名は。」を字幕版で放送するなど、国によって戦略の違いがあるが、今ではなるべくオリジナルのものをそのまま使うようにしている。

（ＮＨＫ側）　先ほどのご質問にお答えすると、第１回の作品の英語吹き替え版は、もともと吉浦監督が独自に作ったもので、それを採用させていただいた。

先ほどご質問にあった評価の件だが、この番組についての海外からのモニター報告はかなりの数が来ていた。全部読んだが、非常に好評な意見がある一方で、１５分では短いのではないかという意見も多数あった。

参考だが、ＶＯＤ視聴について言えば、ウェブでの再生は、この「Anime Supernova」が１位だった。通常は「Trails to Tsukiji」という和食の食材を扱った番組が非常に強いが、この「Anime Supernova」が、それを抜いて１位に躍り出ているということで、海外からのアクセスも非常に高い状況だ。

一般的にネットのアクセスは、大体５分から１０分ぐらいで変わってしまうので、あまり長いコンテンツは好まれない。しかし「Anime Supernova」では、ネットの滞在率も非常に高い。放送権のクリアは非常に難しいが、ネット等も含めたアクセスでは好調な状況だ。

＜視聴番組「＃TOKYO」－ Gardens
（ＮＨＫワールドＴＶ　４月２９日（土）９：１０ほか）について＞

○　非常に興味深く見た。外国人旅行者が増えて行くと、こういう番組は非常に有効だと思う。同時に日本の若い人たちもこういうものを見ると非常に勉強になって、若い人たちが、外国人に日本を紹介するときの材料にもなる。

日本人も含めてのワールドだと考えて、日本の若い人たちも、こういうふうに日本を紹介できるという発想を得ていく番組ではないか。

○　この１か月でバンコクや台湾を訪ねたが、どちらの土地でも桜に対する憧れが日本人以上に強い。せっかく日本に行ったのに、桜の時期を逸して帰ってから桜が咲いた

とか、そういうことを言っている人がバンコクにも、台湾にもいた。こういう情報はひょっとしたら３か月ぐらい前、航空券を取る前にお知らせしてもいいと思った。
　先ほど委員が言われたが、桜に込めている日本人の思いというものが、ちょっとした「うんちく」として入るといいのではないか。
　この番組は、ＶＯＤでアーカイブ化して、公開してほしい。

○　海外から来た観光客が有効に使える情報番組というイメージで拝見した。その目で見ると、せっかくある情報は、ずっと出しておくといいと思った。例えばfacebookの「＃TOKYO」というウインドウがずっと画面に出ているといい。
　例えば庭園の歴史を見たい人は、その庭園の情報が集まっているウェブサイトに行けばいい。最後の画面では少し出ていたが、ああいうものがずっと出ているようにすると、番組を見たくなる人も増えるのではないかと思った。

○　こういう番組をＮＨＫワールドで作るべきかどうか、考えた。
　ホテルのテレビには周辺の見どころ等を紹介する番組があるし、ネットにも観光情報が多数ある。地方自治体でも、動画などを作っていて、観光情報はよりきめ細かく多言語で発信されているのが現状だ。そんな時代に、こういう番組をＮＨＫワールドが世界に発信する意味を聞きたい。

○　新宿御苑は、意外に分かりにくい場所にあり、取り上げるのは適切だと思った。
　２点申し上げる。１つ目は、日本の庭園の何がよくて、誰がどういうことに興味を持って、そこを訪れて楽しんでいるのかをわれわれも知りたかったのに、インタビューがあいさつだけで終わってしまったことだ。何が目的で入園して、何を楽しんだということがもう少し明らかになっていると、また違った捉え方ができたのではないか。
　２つ目。番組では情報を「HISTORY」と「FREE」というコーナーに振り分けていた。FREEというと、どうしても無料という意味が強いので、「HISTORY」と並列にするのは、ちょっと違うかのではないかと感じた。

○　桜については、われわれ日本人が持っている美意識に一歩踏み込めると、急にその風景が違って見えてくると思う。そこの説明が足りないので観光案内のように見えるのではないか。

○　日本文化に踏み込むべきというのは深いコメントであり同感だ。国際放送番組審議会では、こういう観光案内的な番組だけでなく、もう少し歯応えのある番組について議論してはどうか。

○　いろいろな意見が出た。こういうものはきちんとストックして、後からでも見られるようにするためのアップデートが必要だとか、平板な作りで観光案内のようなので、もう少し日本の美しさ、美意識に焦点を当てれば、全く違った番組にできたのではないか、などのご指摘があった。
　基本的には、制作意図が旅行案内であることはわかったが、先ほど委員が言われた

ように、もう少し美意識に焦点を当てながらやるなどの点は、今後工夫の余地はあるか。

（ＮＨＫ側）　「＃TOKYO」については、厳しいご意見を頂いた。確かにそういう面もあるが、一方ではＮＨＫワールドとして、地域も含めた日本の魅力を世界に発信して、できるだけ多くの外国人に知ってもらい、さらに言えばその人たちに日本に来てもらいたい。いまは訪日外国人が 2,400 万人だが、2020 年までに 4,000 万人というのが国の目標だ。われわれとしても日本の魅力を世界に知ってもらう。これはＮＨＫワールドの１つの使命と言うと、強すぎるかもしれないが、やらなければいけない仕事の１つだと思っている。

そういう意味では、ただの観光番組に見えるのは、取材や構成に深みが足りなくて、もう一工夫、二工夫、必要だということだと思う。これは批判を頂いたとおりで、謙虚に受け止めたい。こういった番組は、われわれとしても使命感を持って作っており、今後も審議会に出させていただくことはご理解いただきたい。

（ＮＨＫ側）　2020 年に向けて、いままでの観光番組や情報番組と違った形で東京をテーマにした番組を作ろうというコンセプトが、まずあった。そして、１５分という短い時間で毎回１つのテーマを取り上げた番組を年間１０本程度制作する予定とし、この「Gardens」を第１回のテーマにした。

最初に取り上げた新宿御苑は、そもそも新宿の駅が最寄りであるとか、どの出口から出たほうがわかりやすい、切符はどこで買うのかといった、実際にそこへ行く人のヒントになるような視点も取り込んだ。今後もワンテーマでやりたいと考えている。そういう意味で、いままでの番組とは違った作りの観光情報番組として、いつ見ても、何回見ても、発見があるというところを目標にしたい。

「FREE」や「HISTORY」というコーナーについては、確かに「FREE」というのは、無料を意味する直接的な表現だが、海外モニターの報告を読むと、日本は物価が高いので、入場料が要る施設ももちろんいいのだけれども気軽に無料で楽しめるような施設、場所も訪問したいという声も多い。

現状は旅行案内を優先させて作り始めているが、ご指摘いただいたような、文化や美意識、あるいはインタビュー内容については、制作しながら修正していきたい。

（ＮＨＫ側）　ロコミサイトや写真共有ＳＮＳなどで、たくさんの観光客が東京についていろいろなつぶやきや画像を発信している。この番組を作るときに、その中の情報を基にして東京という街を描き出すとこういうふうに見えてくる、ということを映像的に表現したいということがあった。

それから 2020 年を目指して東京の情報を発信する目的で番組を作った。

平成２９年４月国際放送番組審議会

平成２９年４月のＮＨＫ国際放送番組審議会（第６３５回）は１８日（火）ＮＨＫ放送センターで８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、上田会長から国際放送について所信の表明があり、その後、「国際放送強化のために何をすべきか」について、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニター報告の資料を配付し、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	内永ゆか子	（特定非営利活動法人 ジャパン・ウィメンズ・イノベイティブ・ネットワーク 理事長）
委　　員	大西　　洋	（㈱三越伊勢丹ホールディングス 取締役）
委　　員	岡本　行夫	（外交評論家、㈱岡本アソシエイツ 代表取締役）
委　　員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委　　員	木山　啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 代表理事）
委　　員	塩見美喜子	（東京大学大学院理学系研究科 教授）
委　　員	神馬　征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授　国際地域保健学教室）
委　　員	別所　哲也	（俳優、ショートショート フィルムフェスティバル ＆ アジア 代表）

（主な発言）

＜上田会長との意見交換＞

○　私は、公平・公正、自主・自律で世界から信頼されるＮＨＫであることを強く願っている。その実現にあたって、どのように取り組んでいくのか。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫでは、放送法と放送番組基準に基づいて、公平・公正、不偏不党という、いわゆる公共放送の原点に立って自主・自律を貫くような形で番組を提供するということになっている。

ただし、国際放送に関しては、放送法の第６５条第１項に、総務大臣は、ＮＨＫに対して必要な事項を指定して国際放送等を要請できるという条文があり、その点で国内放送と若干違う。指定された事項は、「邦人の生命、身体及び財産の保護に係る事項」「国の重要な政策に係る事項」「国の文化、伝統及び社会経済に係る重要事項」「その他の国の重要事項」となっている。

こうした要請に応じたとしても、ＮＨＫとして番組編集の自由を確保できるという判断をして、要請を応諾している。

○　世界から信頼されるＮＨＫを、ぜひ実現していただきたい。個人的にはどんな番組を見たら信頼されるだろうかと考えると、やはり多様な意見を取り上げるということだと思う。多様な意見や見方が紹介されるような番組を増やしてほしい。

（ＮＨＫ側）　多様な意見を取り入れるということで、２年前から放送しているのが「GLOBAL AGENDA」という番組だ。日本や世界が抱える課題についていろいろな意見を取り上げて討論している。

国際放送に関してはまだ進化の途上なので、委員のアドバイスを頂戴してさらにいいものにしていきたい。

○　この間バンコクでＮＨＫワールドＴＶの番組を見て、「NHK NEWSLINE」の質がものすごくよくなっており、アジアでナンバーワンと言っていいのではないかと思った。ただ、東南アジアの安い宿では、あまりＮＨＫワールドＴＶを見ることができない。中国や韓国の放送は結構見られているので、現地に住む人、あるいは若い日本からのボランティアなどはそちらの方にひかれてしまう印象だ。そういう面も検討していただきたい。

（ＮＨＫ側）　日本から見た、中国やアジア諸国などの情報を発信することは、ＮＨＫが日本に足場を置いているということの１つの強みだと思う。そのあたりをしっかりと意識しながら、アジアにおけるナンバーワンの国際放送を目指したい。

○　テレビで国会の予算委員会を見たが、会長の答弁の随所に公平・公正、それから多様性と品質向上という言葉があった。特に公平・公正については、他局と違うＮＨＫの本質的なところだと思う。多様性についても、これからますます重要になってくると思うので、会長の言葉を聞いて安心した。

地域局制作の英語リポートが年間 300 本近くある。地域局の人が自分で取材をして自分でリポートすることは、地域局にとっても、リポーター本人にとっても非常に高いモチベーションになると思う。質のばらつきがあるのも事実だが、本当にその地方を代表するもの、日本の持つスタイルやその背景にあるストーリーをもっとプレゼンテーションするといいのではないか。

東日本大震災から６年だが、今でも福島で生産されたものは輸入規制している国があったりするので、ＮＨＫにはいいものについては、本当は大丈夫なのだという姿勢で報道を続けて頂きたい。

（ＮＨＫ側）　ＮＨＫの１つの強みは、全国に５３局の放送局のネットワークを持っていることだ。このネットワークをうまく使って、地域の情報を全国に届けると同時に世界に向けて届けたい。国際放送局で英訳を手伝ったり、発音の指導をしたり、さまざまな形でバックアップをしている。英語リポートとなると体が引いてしまうという人が多いので、そこはいろいろと工夫している。

○　審議会での議論が、実際の制作に反映されていることに感謝している。
　私が申し上げたいのは公平・公正の話で、非常に大事な概念なのだが、それが火中の栗は拾わない、安全プレーで行く、ということになってはいけない。
　意見が対立する案件にもＮＨＫは入る勇気を持って、形としてはパネルディスカッションで肯定派と否定派を並べるなど、多様な意見を見せる形で物事の深いところまで、主として知識層を相手に伝わるような報道をして頂きたい。

○　番組の審議をする上で常に心がけているのはコンテンツの内容と同時に、技術、テクノロジーの部分だ。日本が世界から注目を集めるべきものは、放送技術の分野でのチャレンジではないかと思う。
　オリンピック・パラリンピックに向けてもそうだし、ハイビジョン放送などでＮＨＫは世界に向けて放送技術の最先端を示して来た。これからも、例えばＶＲ、360 度放送、通信と放送の連携、自動翻訳など、さらに踏み込んで言えば環境に配慮した電力など、どういったクリーンエネルギーを使って世界に向けて発信しているか問われる。
　さらに言えばパラリンピックを含めて視覚障害者、聴覚障害者の方々と一緒に放送はどうあるべきなのかを考え、放送技術によって世界中から注目を集める国際放送であってほしい。

（ＮＨＫ側）　日本の技術を世界に発信する１つのチャンスでもあるので、前向きに検討していきたい。
　いま、通信と放送の融合が大きく進んでいるが、ＮＨＫは国内ではテレビと全く同じコンテンツを２４時間インターネットを使って流すことは法律で認められていない。ところが、国際放送は常時同時配信が許されている。しかもこれは国内でも見られるし、世界中で見られる。

＜「国際放送強化のために何をすべきか」について＞

○　ＢＢＣなどいろいろな国際放送がある中で、日本の国際放送らしさを大事にしていただきたい。例えば放送技術では、日本の国際放送がどこのものよりもすばらしくて、特徴がよく表れているような、そういったものを目指していただければ、うれしい。
　認知度を上げるのが喫緊の課題ということだが、海外に住んでいる人が知っているだけではやはり弱い。海外に行くたくさんの日本人や日本に在住している外国人も含めた人たちの中で、ＮＨＫワールドＴＶがどれぐらい認知されているのか。国際放送の課題としてどう取り組んでいるのか、教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）　この２、３年、公共放送としてもっと国際放送をしっかりやろうというスタンスを強めた。
　やはり 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックが１つの大きなモメンタムになっているので、そこに向けてプロモーション活動をして、そ

して日本に来た外国人がインターネットや宿泊施設等でＮＨＫワールドＴＶを見て、ＮＨＫというのは公共放送でフェアな立場から中国とか北朝鮮とか、難しい問題も取り上げてやっているなと感じてもらう。そして帰ってからも、インターネットを使えばいつでも、どこでも見られる。遠回りかもしれないが、着実にそういうファンを増やすために、日本に来てどこかに泊まった時にできるだけ多くの方がＮＨＫワールドＴＶを見られるように、トップセールスなども考えたい。

それから国際放送ではないが、「ＮＨＫニュース７」と「ニュースウオッチ９」以外の二か国語放送も増やす努力をしたい。駐日の各国大使館の人と話をしていて感謝されるのは、ＮＨＫワールドＴＶだけでなく、実は「ＮＨＫニュース７」だ。日本語が分からないけれども、音声切替をすれば英語で聞けるのはすばらしいと言ってくれる。

○　ＮＨＫは受信料で成り立つ公共放送で、もともとは国内放送のみでスタートした。グローバル化など、いろいろなことから国際放送を強化してきたが、はじめは国際放送と国内放送が分かれていて、別ものであったが、今では連携が求められている。お互いにコンテンツを使い合いましょうと。ただ、これから３年後、５年後、１０年後を考えると、テクノロジーもどんどん進化する。そういう意味ではいかに融合していくのか。融合したことによって競争力が落ちるのではなく競争力を高めていくという方向性が、これからは大事で、その点に会長が触れたのではないかと理解した。

そうであれば、ぜひお願いしたいのは、競合相手の分析だ。世界中のメディアの中でどこと比較してどういうふうになりたいのか。ただ単に世界でナンバーワンと言っても、ゴールが明確ではない。「競合分析」といったような、ゴールイメージを具体化することをお願いしたい。

もう１つは、ダイバーシティ。いろいろな意見があることは、とても大事だと思う。そういう番組を作っていくためにも、ＮＨＫの職員のダイバーシティを進めていただきたい。放送を作る人が多様にならないと、そうした番組を作ることはなかなか難しい。

（ＮＨＫ側）　どこと比較しながらやっていくかという意味では、プレゼンスの大きさも含めてＢＢＣに学びたいと思っている。そういう面で私もＢＢＣを訪ねたり、イギリスの公共放送について専門の先生方と意見交換をしている。

ダイバーシティというのは本当に大事なので、これはわれわれも心がけたい。

○　先ほど、300 ぐらいの英語リポートができて非常に増えたという話を伺ったが、外国人、あるいはネイティブスピーカーが参加するのは、番組ができ上がって、それを英語化していくプロセスになってからだ。こういうあり方も今後続くとは思うが、もっと企画段階から入るという可能性はないのか。

もともと日本人向けに作られた地域放送番組だと、日本人にとって当たり前のことは採用されない可能性がある。そこに企画段階から外国人が入れば、彼らにとって驚

きと思える要素も番組に組み込まれて、最初から世界発信を目指した番組というものが作れるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）　基本は各局が作ったリポートを英語化するということだが、最近では地域局のディレクターや記者が外国出張をして、ＮＨＫワールドＴＶに出すことを前提としてニュースの企画を作ることもやっている。２年前ぐらいからこういう仕組みをつくっているのだが、一昨年度は７、８本ぐらいの実績だったものが、昨年度で言うと２２本を日本各地の若いディレクターや記者が海外出張をして作った。

「ＥＴＶ特集」も提案段階から国際放送で放送することを前提に制作局と国際放送局が一緒に企画を出している。最初から国際放送向けのロケを行って番組を作ることも、ここ１、２年で急速に進んでいる。

方向としては、委員がおっしゃる方向に、各局も含めて向かっていると考えている。

○　２点ある。１つは2020年のオリンピック・パラリンピックを視野に入れるということだが、具体的な企画があれば、教えていただきたい。

もう１つは、内容について、ＮＨＫワールドＴＶを見れば日本が分かるといったときに、その日本を代表する文化ということで「KABUKI KOOL」という番組など、いろいろ充実しているが、例えば日本の古典芸能であれば、他にも狂言がある。あるいは漫画に関しても、「imagine-nation」という番組もあるが、日本の漫画は非常に奥が深いので、新作も重要なのかもしれないが日本人が知っている古典的なもの、例えばＮＨＫワールドＴＶに行けば昔の作品が見られるというような、何か、日本人でも見てみたいというような特徴があると、おもしろいのではないか。例えば今「ひょっこりひょうたん島」の歌が「ひよっこ」で歌われているが、もう録画が残っていないという話を聞いた。例えばそういうものがＮＨＫワールドＴＶでは見られるようになると、話題性が出てくると思う。そういう可能性はあるか。

（ＮＨＫ側）　2020年のオリンピック・パラリンピックについて申し上げると、１つのターゲットとしている、国内のテレビ放送と同じ内容をネット配信する「常時同時配信」は、今は認められていないが、オリンピック・パラリンピックを１つの目標にしている。常時同時配信というのは海外では行われているわけだから、オリンピック・パラリンピックのときにはグローバルスタンダードで、観客が例えば国立競技場で陸上を見ながら、さらに自分の見たいものをタブレットで見られるとか、少なくともそういう環境にしたい。2020年というのが１つの契機になりうるのではないかということだ。

２つ目に関しては、実はＮＨＫには大量のアーカイブス、フィルム時代からの番組の資産がある。ただ、これも通信技術を使って公開するためには権利処理をしなければいけない。例えばヨーロッパなどはディレクティブで、放送でも通信でも流せるよう、一度で権利処理が済んでいる。

ＮＨＫの場合は、大量に持っていて放送で流せるものでも、権利処理に

膨大な手間とお金がかかって、インターネットではなかなか流せないという問題がある。

それから「ひょっこりひょうたん島」の世界になると、テープが高価だった頃は、テープを何度も上書きして使っていたので、古いテープが残っていない。ただ、民間の愛好家にはいっぱい蓄積している人がいる。ＮＨＫではそういった民間で保有されているテープを一生懸命に集めている。そして欠落していた番組を一堂に集めて、川口のアーカイブスでフィルムを最新技術で復元したり、デジタルデータとして保存したりと、いろいろな努力をしている。

○　地域からの発信も非常にいいが、地域にも外国人記者をどんどん送り込んでほしい。今、ＣＮＮではいろいろな国の人たちがキャスターとしてやっている。ＮＨＫはもちろん公共放送だが、日本人による、日本人が作った放送である必要はない。だからもっと外国の人たちを取り入れて、日本のいろいろな組織の中でＮＨＫの国際放送が一番、国籍に関してのこだわりがないというぐらいの風土をぜひ作ってほしいと、以前から思っている。

（ＮＨＫ側）　非常に大切なポイントだ。ニューヨークはまさに人種のるつぼだし、アメリカにいたこともあるので、それは非常によく分かる。そういう面ではダイバーシティをＮＨＫの中にも取り込んでいきたい。

ただ、何でもダイバーシティで取り入れればいいということではない。私自身がそういう所で生活して来た経験があるので、いろいろ配慮しなければいけない問題もあるという感じを持っている。

○　地域局で放送したニュースを英語化して、それを発信する場合に、地域局の多少は英語を話せる人が一生懸命に頑張って、それを英語のネイティブの人に見てもらってというのがあった。それを見ていると何となくもどかしいなと思う。地域局で、ネイティブとして話せる人、大人のしっかりした英語を話せる人たちを雇って、そういうところに関わるようにしたらどうかと思う。

地域局は、常に英語の番組を作っているわけではないので無駄なのかということも考えたが、そのときにふとひらめいたのは、法人化してから地方とのつながりを重視している大学のあり方だ。オープンキャンパスなどもたくさん実施している。地域の人たちがたくさん来て、とてもにぎわっている。せっかく作った地域局の英語リポートを、例えばその県の中の高校、あるいは大学で英語の教材として用いるような、そういう試みができたらいいのではないか。そうするともっと連携が強くなる。

○　「海外発信プロジェクト」が地域から世界への発信というテーマだったので、その視点で皆さんの話を聞いていて、どういうアイデンティティをＮＨＫワールドが持って行くのかということを自問自答していた。その中で出発点が逆ではないかと思うことがあった。何を海外発信したいのかという根源的なことを皆さんはどう考えるのか。私も委員をしてきて感じるところだが、ほとんどの内容がウェブサイトのホームペー

ジで言うとabout us、who we are、who am I、要するに私たち日本は、どういうところでどうなのかということばかりの発信に軸足を置いている。外国の人たちが日本人から聞きたいのは、日本が世界をどう見ていて、日本が世界にどんな価値を感じているのかということではないか。日本の歌舞伎や相撲など、それは一義的な一次情報としてはウェブサイトで氾濫した情報で、十分に受け止められる時代だ。だからそこにどういう新しい視座、視点を置いた放送をするのかということが大事なのではないか。

（ＮＨＫ側）　まさにおっしゃっている通りだ。ＮＨＫがＢＢＣと差別化できるとすれば、日本のＮＨＫとして中国や北朝鮮の動きをどう見るのかを伝えること。このあたりは今委員が言われたように非常に大きな課題で、さらに努力していかなければいけないと思う。地域からの発信だけが、われわれが今ねらっている国際放送ではない。

ニュースや番組の素材を英語の教材にすることは、鳥飼玖美子さんに先生をお願いしている番組「ニュースで英会話」で実現している。

○　きょうの意見交換は大変活発だった。国際放送のあり方を巡って皆さん方の意見を頂いたが、今後もこういった機会が持てればさらに議論を深めていけるのではないかと思う。

私も個人的にはこういったことは非常に大事だと思うが、きょうの上田会長の話を聞いてＮＨＫは変わりつつあるという感じを受けた。私はＮＨＫが変わることは日本が変わることだと思う。ダイバーシティも含めて、ぜひ頑張っていただきたい。